



平成28年度

県立広島大学大学教育再生加速プログラム（AP）

事業報告書

はじめに

## 何故アクティブ・ラーニングに取り組むのか

法人化された大学が果たすべき、教育、研究そして地域連携に係わる運営は、一般に設置者（本学では広島県知事）から課せられた中期目標が、大きな標となります。さらに、中期目標の最も骨子となる point は、通常、冒頭の段落文末にあるまとめのフレーズで読み取ることができます。10 年前に本学に提示された第一期中期目標における相当部分には、「**確かな教育と研究に支えられた実践力のある人材の育成**」が明記されていました。統合後 12 年間、文言にある「確かな教育と研究」についての取り組みは、文科省からの科学研究費助成事業の採択件数が統合前の 2 倍を超えるなどの著しい向上、その研究力を背景にした講義内容の充実、さらには地道な FD 活動などの努力がなされました。授業満足率 (92%)、就職率 (99.4%)、トップレベルの各種国家試験の合格率、図書館利用大学ランキング (全国 22 位) など十分なエビデンスを持って、目標に応えることができたと自負しております。

現在進行中の第二期中期目標にある当該部分には、「**グローバル化が進む社会経済環境の中で、企業や地域社会において活躍できる実践力のある人材の育成**」が記されています。真摯に勉学に取り組む姿勢の涵養、知識・技能修得という視点をさらに乗り越えるべく努力の必要性を、この新たな目標は示しています。「粘り強く真面目で理解力に優れてはいるが、挑戦力や主体性に欠ける」という多くの本学教員が学生に感ずる印象を払底しなくてはなりません。何故なら、急速に進展するグローバル化、少子高齢化による社会構造の変質、資源の枯渇、食料等の供給問題、地域格差の広がりなど、大きく変容する社会の課題に取り組むべく人材は、主体的に課題を見出し、情報の中から最適解を創り出す解決力が求められ、従来型の受動的学習で育成された愚直力のみでは、対応できないことは明らかです。

第二期中期目標が記した、今日的人材育成要請に応えるため、本学では、第二期中期目標初年にあたる平成 25 年度、学長直下の組織として「教育改革推進委員会」を設け、共通教育の大胆な改変から始まり、教育の質の改革に着手しました。背景にあったのは、各委員が共通して本学教育の弱点として抱いていた、学生の主体的学びを引き出せていないという強い反省でした。そうした中から、産まれたのが「県大型アクティブ・ラーニング」です。目指すスローガンは、「**生涯にわたり学び続ける自律的学修者**」です。

本学で育った学生が、不確定性時代の地域社会を切り開く牽引者として活躍している姿を夢見ながら、より確かな「県大型アクティブ・ラーニング」の取り組みを目指して努力しています。先駆的にアクティブ・ラーニングを実践している他大学、高校などの中等教育機関に学びながら、文字通り能動的に取り組んで行きたいと思っています。多方面からのご指導、ご鞭撻の程お願いします。

公立大学法人県立広島大学  
学長 中村 健一

## 平成28年度県立広島大学AP事業報告書 目次

はじめに	1
<b>(1) 本学AP事業の概要</b>	<b>3</b>
1 平成28年度 県立広島大学AP事業について	4
2 平成28年度AP事業推進部会 開催状況	7
3 平成28年度教育改革推進委員会 開催状況	8
<b>(2) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) の推進</b>	<b>9</b>
1 「行動型学修に参加する学生への経費助成」実績一覧	12
2 平成28年度 担当科目におけるCLAL導入状況調査 調査票	13
3 平成28年度 担当科目におけるCLAL導入状況調査 集計結果	15
4 平成28年度 CLALの導入に係る意識調査 調査票	17
5 平成28年度 CLALの導入に係る意識調査 集計結果	19
<b>(3) ファカルティ・ディベロッパー (FDe r) の養成</b>	<b>25</b>
1 第1回FDe r養成講座 実施概要及び資料	28
2 第2回～4回FDe r養成講座 チラシ	35
3 第2回FDe r養成講座 実施概要及び資料	36
4 第3回FDe r養成講座 実施概要及び資料	45
5 第4回FDe r養成講座 実施概要及び資料	50
<b>(4) 学修支援アドバイザーの養成</b>	<b>57</b>
1 学修支援アドバイザーの概要	60
2 学修支援アドバイザー養成講座 資料	61
<b>(5) 高大接続改革の推進</b>	<b>65</b>
1 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会 実施概要	67
2 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会 チラシ	69
3 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会 資料	70
4 平成28年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 開催概要	79
5 平成28年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 チラシ	81
6 分科会 本学発表ポスター (11学科・総合教育センター)	82
<b>(6) 教育改革フォーラムの開催</b>	<b>95</b>
1 平成28年度県立広島大学教育改革フォーラム チラシ	99
2 講演資料	100
3 取組報告資料	109
4 実践報告①資料	116
5 実践報告②資料	119
<b>(7) AP評価委員会の開催</b>	<b>123</b>
1 平成28年度AP評価委員会 委員からの評価・コメント一覧	125
<b>(8) 広報活動</b>	<b>133</b>
1 AP事業推進部会ニュース Vol.3	135
2 SPOD フォーラム2016 ポスターセッション 発表ポスター	139
おわりに	140

## (1) 本学AP事業の概要

平成26年度に文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）に選定された私たちの教育改革事業は、平成28年度に3年目を迎えた。時を同じくして、APは全テーマで入口から出口までを一体的に取り組む「高大接続改革推進事業」として位置づけられ、本学の事業期間も2年間延長されることとなった。

6年間の事業期間前半を締めくくる一年は、CLALの推進、FDerの養成、学修支援アドバイザーの養成を3つの柱とし、本学の目指す「生涯学び続ける自律的な学修者＝アクティブ・ラーナー」の育成に近づけるよう、仕組みづくりと普及に努めた。

### 資料

- (1)－1 平成28年度 県立広島大学AP事業について
- (1)－2 平成28年度AP事業推進部会 開催状況
- (1)－3 平成28年度教育改革推進委員会 開催状況

## 平成 28 年度 県立広島大学 A P 事業について

本学の取組は、地域活動を組み込むなど主として教室外で行う「行動型学修」と、教室内でのグループワーク等を通じて学修者の知的能動性を喚起する「参加型学修」を組み合わせた、県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning: CLAL）を導入して教育改革を進め、幅広い教養と高度な専門性を備えた、実践力ある「アクティブ・ラーナー」を育成する組織的取組である。



AP 事業期間の延長による取組の継続は、教育改革推進への確かな足がかりとなることが期待される。これまで進めてきたアクティブ・ラーニングの質的向上を中核としつつ、テーマ II (学修成果の可視化) およびテーマ III (高大接続) を視野に入れた取組への発展を図ることで、質保証を伴った大学教育を入学から卒業まで実現させていく。平成 28 年度は、その基礎固めの 1 年であった。

年間を通じて、主として次の 3 項目、すなわち「CLAL の推進」、「FDer の養成」、「学修支援アドバイザーの養成」を着実に実施するとともに、より良い方策を検討した。その際、「生涯学び続ける自律的な学修者＝アクティブ・ラーナー」の育成という最終ゴールを常に念頭に置いて事業推進を図った。平成 28 年度当初に「高大接続推進事業」として捉え直しがなされた際、アクティブ・ラーニングのさらなる充実を図るこの 3 項目については次の計画とした。

県立広島大学型アクティブ・ラーニングは、全学共通教育、専門教育、そして自らが学びを選択する領域横断・学部横断教育プログラムを加えた 3 種の体系的な学士課程教育プログラムを基盤とする。これに「行動型」と「参加型」の 2 つの手法を導入し、「学生の主体性を育む能動的学修」へ向けて授業改善を進めている。「体系的な教育プログラム——授業改善——自己評価システム」を一連のものとして捉える本学の教育改革のうち、「授業改善」を本補助事業で重点的に取り組んでいるが、学修成果を学生自ら評価する「学びの自己評価システム」の構築は常に射程に置いてきた。全学人材育成目標に掲げる「主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材」とは、体系的な教育プログラムと授業改善の結果としてもたらされる学生の主体性や自律性を抜きに考えられないからである。それが私たちの目指す「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー」である。

平成 26, 27 年度の取組を通じ、行動型学修、参加型学修を取り入れた授業は着実に増加してきた。「行動型学修」は、3 キャンパスに分かれた一見「弱み」である本学の立地を「強み」へと転換する試みである。例えば、全学に開かれた複数の授業科目において、他キャンパスの学生とともにフィールドワークへ出かけ、地域課題の解決を目指す議論を重ね、合同発表会を開くなどしている。「参加型学修」は、主に教室内で行うグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションなどを通じて学生の知的能動性を高める試みである。これらの手法は、AP 事業の開始以来確実に増加し、学生の主体的な学びに結びついている。この両者を組み合わせ、「Campus Linkage Active Learning (CLAL)」と名付けた本学の取組は、異なる専門を持つ 3 キャンパスの学生間の協働や、「県全域がキャンパス」を謳う本学が広島県全地域との「リンク」を通じて人材を育成しようとするものである。授業の手法を学ぶ FD 研修等を通じて実科教員の意識も高まり、質的、量的な向上も図られている。また、アクティブ・ラーニングの促進を支えるファカルティ・ディベロッパー(教員)、学修支援アドバイザー(学生)の養成も着実に進み、組織的な授業改善は成果を見せつつある。今後も取組を継続し、授業改善を加速させていきたい。課題は、これまでの授業改善が「アクティブ・ラーナーの育成」に確実に結びついているかどうか検証していくことである。「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー」に求められる知識、汎用的技能、態度などをより一層明確にし、教職員と学生とが共有し、卒業時にどの程度身についたかを明らかにしていく必要がある。

この具体化は、平成 28 年度の計画調書に記したそれぞれの内容によって進めた。その上で、「学修成果の可視化」、「高大接続」という発展的な課題を設定し、着手した。

#### (1) CLAL の推進

- ・平成 27 年度に実施した「CLAL 導入状況および意識調査」の結果を分析・公表し、学内での CLAL に対する意識をさらに高めるとともに、行動型学修・参加型学修を推進しながら、「幅広い教養と高度な専門性を備えたアクティブ・ラーナー」を育成するための CLAL のあり方を引き続き検討する。
- ・学内教職員の先進事例調査への積極的な参加を促し、参加者が学内 FD 等での発表を行う仕組みを促進する。

#### (2) FDer の養成

- ・FDer 養成プログラムの「応用編」を実施し、学内教職員の FDer への理解をさらに深めるとともに、これまでの「入門編」で学んだ内容を自身の授業や他者へのアドバイスへ活かせるよう、より実践的な講座を展開する。
- ・FDer (候補者) は全学 FD 研修会等においてコーディネーターの役割を担うなど、事業推進の牽引役をつとめる。

#### (3) 学修支援アドバイザーの養成

- ・学修支援アドバイザー候補者の学生に向けての研修を実施する。アドバイザーは、他者の学びを支援することで自身が学ぶ喜びを感じ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーとなるために必要な知識や技術の習得に努める。
- ・学修支援アドバイザーに対する教職員の理解を深め、本学に真に求められる学修支援アドバイザーのあり方を探るため、教職員対象の研修会を開催する。

こうした当初計画の具体化へ向け、どのような取組を行い、どう総括することができるか、本報告書に掲載した資料によって、その姿をご覧いただきたい。

なお、2 つの発展的な課題については、次の展開を志向している。

#### テーマ II (学修成果の可視化) への展開

学内においてアクティブ・ラーニングの導入を進める中で、その評価のあり方に関心が高まってきた。すでに個々の教員や学科レベルでルーブリックの導入が検討され、全学的な研修会も実

施した。学生の到達目標とともに評価基準を明確に示すルーブリックは、学修成果を可視化するツールとして有効であると考えられる。

このルーブリックを、本学の目指す「生涯にわたり学び続けるアクティブ・ラーナーの育成」の達成度をはかる評価基準としても活用していきたい。学士課程の4年間でその目的が達成されるのではなく、卒業時に「生涯にわたって学び続ける」準備がどの程度整っているか可視化できる指標づくりを目指したい。

本学では、平成26年度の申請時より「学びの自己評価システム」の構築を視野に入れてきた。平成27年度より「キャリア・ポートフォリオ・ブック」を導入し、学生自らの目標設定と振り返りの実践を続けている。この取組とルーブリックによる可視化を連動させ、学生自らが卒業まで一貫して「アクティブ・ラーナー」に近づいていることを実感できるようにしたい。一部学内で導入されているeポートフォリオの活用も検討したい。

### テーマ III (高大接続) への展開

本学では第2期中期計画(平成25～30年度)において教育改革が進行中であるが、これまでに、(1)全学人材育成目標の策定、(2)学びの基礎基盤と豊かな教養を養う科目をL(エル)字型に配した新たな全学共通教育プログラムの導入、さらに、(3)幅広い履修を可能とする仕組みを伴う領域横断・学部横断教育プログラムの導入を進めてきた。その具体的な運用と密接にかかわる3つのポリシーについては、平成27年度末に示された高大接続システム改革会議「最終報告」を受け、全学的な見直しに着手したところである。見直しに際しては、「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー」を育成する具体的な道筋を示し、高等学校との接続を円滑に行うことが重要であるとする。

広島県教育委員会では、平成26年12月に広島版「学びの変革」アクション・プランを策定し、初等中等教育において、グローバル化する21世紀の社会を生き抜くための新しい教育モデルを構築する取組を続けている。ここで育成を目指すのは、変化の激しい社会を生き抜くことができる資質・能力(コンピテンシー)の育成であり、ことに「学び続ける力」としている。これはまさに本学の目指す「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成」と目的を同じくするものである。初等中等教育における「学びの変革」が、アクティブ・ラーニングを軸とした大学教育改革と有機的に接続することにより、一体的で総合的な取組が実現し、相乗効果が期待できるものと思われる。

これまで本学では、教育ネットワーク中国(広島県内大学を中心としたコンソーシアム)の主催する高大連携事業、大学独自の出前授業、通常の授業を高校生に公開する「県大へ行くー授業公開週間ー」を設けるなど、積極的に高大接続事業を展開してきた。さらに平成27年度に始まった広島創生イノベーションスクール(広島県教育委員会主催、県内高校生対象)には本学教員が運営アドバイザーとして参画し、本学学生も大学生メンターとして加わっている。一方、本学のAP事業については、平成26年度に選定された当初より、広島県教育委員会からの外部委員参画を依頼し、助言を得てきた。

こうした相互事業連携の実績を踏まえ、県下全域に広がる県立高校とタイアップするなど、さらに県立大学の強みを活かしていきたい。入口から出口までの質保証を伴った大学教育を一層効果的に進めるため、高大の教職員が協議する場を設けたり、高大の教職員が共に参加できるイベントを開催したりすることによって相互連携を深め、最終的には、高大接続による教育改革モデルプランを作成し、公表していくことを検討している。

ここで述べた「学修成果の可視化」については、FDer養成講座(第2～4回)のメインテーマであった。さらに教育改革フォーラムにおいて学内のトップランナーであるFDerによる事例報告が行われた。

「高大接続」も順調に滑りだした。受験生確保とは異なるベクトル、すなわち「人材育成」という点から一気に接続の機運が高まった。

AP事業の推進がどう具体的に進められ、教育改革にどのような影響を与えてきているか。本報告書を通覧いただくことで、その成果と課題が浮き彫りになることと思う。本冊子には、報告者の了承を得て、できるだけ多くの発表資料を掲載した。報告して終わり、ではなく、次へ繋がるテキストとしての役割も持たせたいとの願いからである。

(AP事業推進部会長 馬本 勉)

## 平成28年度AP事業推進部会 開催状況

回数	日時	議題(審議事項)
第1回	平成28年 6月8日(水) 16:20～	<b>【報告事項】</b> 1 AP事業推進部会要領の一部改正について 2 平成26・27年度AP評価委員会の開催報告について 3 AP事業の事業期間延長について 4 文部科学省への提出書類について <b>【協議事項】</b> 1 「行動型学修に参加する学生への経費助成に関する要領」の一部改正について(案) 2 ラーニングcommonsにおける学修支援アドバイザーの運用について(案) 3 FDer連絡調整部会(仮称)の設置について(案)
第2回	平成28年 7月25日(月) 9:15～	<b>【審議事項】</b> 1 学修支援アドバイザーの授業支援等に係る活動について 2 FDer連絡調整ワーキンググループについて 3 AP事業で購入した図書の運用について 4 その他 <b>【報告事項】</b> 1 第3回県立広島大学ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップの開催について 2 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査状況について 3 その他
第3回	平成28年 11月14日(月) 14:40～	<b>【審議事項】</b> 1 広島県教育委員会との連携事業について 2 平成28年度 県立広島大学教育改革フォーラムの開催について 3 平成28年度FDer養成講座の実施計画について 4 平成28年度CLAL導入状況等調査の実施について 5 その他 <b>【報告事項】</b> 1 平成28年度「SIH道場振り返りシンポジウム」及び「テーマⅠ:アクティブ・ラーニング採択校協議会」への参加について 2 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査状況について 3 平成28年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について 4 その他
第4回	平成29年 1月10日(火) 16:20～	<b>【審議事項】</b> 1 平成28年度県立広島大学教育改革フォーラムの実施計画について 2 平成28年度CLAL導入状況等調査の実施について 3 学修支援アドバイザーの養成について 4 その他 <b>【報告事項】</b> 1 「平成28年度 広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」の開催及び本学の発表参加について 2 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会の実施報告について 3 大学教育再生加速プログラム(AP)[テーマⅠ:アクティブ・ラーニング]選定校に対する依頼について 4 平成28年度FDer養成講座の実施報告について 5 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査状況について 6 平成28年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について 7 その他

## 平成28年度教育改革推進委員会 開催状況

回数	日時	議題(審議事項)
第1回	平成28年 4月15日(月) 13:00～	<b>【協議事項】</b> 1 学士課程全体のディプロマ・ポリシー, カリキュラム・ポリシーの策定について(案) 2 平成28年度AP「高大接続改革推進事業」について(案) ○ 事業期間延長に伴う対応 ○ テーマ別幹事校設定に伴う対応 <b>【報告事項】</b> 1 平成28年度大学連携による新たな教育プログラム開発実施事業の申請について(案) 2 平成26・27年度AP評価委員会について 3 その他
第2回	平成28年 6月15日(水) 13:10～	<b>【審議事項】</b> 1 3つのポリシーの見直しについて 2 その他 <b>【報告事項】</b> 1 平成28年度第1回AP事業推進部会 2 その他
第3回	平成28年 8月3日(水) 16:20～	<b>【審議事項】</b> 1 全学3ポリシーについて 2 その他 <b>【報告事項】</b> 1 大学教育再生加速プログラム「高大接続改革推進事業」テーマ別幹事校の選定結果について 2 平成28年度第2回AP事業推進部会について 3 FDer連絡調整ワーキンググループについて 4 その他
第4回	平成28年 10月19日(水) 13:30～	<b>【審議事項】</b> 1 広島県教育委員会との連携事業について 2 平成28年度 県立広島大学教育改革フォーラムの開催について 3 その他
第5回	平成28年 12月22日(木) 16:20～	<b>【審議事項】</b> 1 県立広島大学の3ポリシーについて 2 その他 <b>【報告事項】</b> 1 大学教育再生加速プログラム(AP)[テーマI:アクティブ・ラーニング]選定校に対する依頼について 2 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会の実施報告について 3 「平成28年度 広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」の開催及び本学の発表参加について 4 その他
第6回	平成29年 2月22日(水) 15:50～	<b>【審議事項】</b> 1 県立広島大学(学士課程)の3ポリシーについて 2 その他 <b>【報告事項】</b> 1 「平成28年度 広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」の実施報告について 2 平成28年度県立広島大学教育改革フォーラムの開催について 3 平成29年度大学連携による新たな教育プログラム開発・実施事業の募集について 4 その他

## (2) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) の推進

県立広島大学型アクティブ・ラーニング (Campus Linkage Active Learning: CLAL) の推進を図り、学内での意識を高めるため、新任・昇任者研修、目標・計画に係る説明会ほか、様々な機会を利用して「平成 27 年度 CLAL 導入状況・意識調査」の結果を報告した。前年度に引き続き行動型学修に対する支援（交通費助成）を行うとともに、参加型学修を促す機器（タブレット、クリッカー）を整備した。また、研修会への参加等を通じて他大学の先進事例に学ぶことを継続し、CLAL 推進を図る検討に反映させた。

平成 28 年度のアクティブ・ラーニング実施率は、前年度の 72.3% から 74.8% へと微増した。教員に対する意識調査では、アクティブ・ラーニングに対して前向きなコメントが増加しており、徐々に浸透していることをうかがわせる。一方、積極的に導入を図ろうとする授業に対し、サポートが十分と言えない面もある。意識調査の内容を踏まえ、教員のモチベーションを高める方策を講じていきたい。

### 資料

- (2)－1 「行動型学修に参加する学生への経費助成」申請一覧
- (2)－2 平成 28 年度 担当科目における CLAL 導入状況調査 調査票
- (2)－3 平成 28 年度 担当科目における CLAL 導入状況調査 集計結果
- (2)－4 平成 28 年度 CLAL の導入に係る意識調査 調査票
- (2)－5 平成 28 年度 CLAL の導入に係る意識調査 集計結果

## 県立広島大学アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進について

### （１）行動型学修の推進

教師外における能動的学修を推進するため、「行動型学修に参加する学生への経費助成に関する要領」に基づき経費助成を行った。関連資料は次のとおり。

- 行動型学修に参加する学生への経費助成に関する要領
- 「行動型学修に参加する学生への経費助成」申請一覧
- 学外実習実施報告書（行動型学修実施報告）

### （２）参加型学修の推進

教室内におけるアクティブ・ラーニング（参加型学修）促進のため、ICT機器の整備を行い、授業への導入を図った。

#### 【整備状況】

	内容	購入数	納入キャンパス	活用実績
1	iPad Air 2 本体 +専用ソフト	7式	三原	既存の端末と合わせて教員に貸出を行い、授業の中で学生が使用
2	iPad Air 2 本体	8式	庄原	図書館に配備し、ラーニングcommons利用者に貸出
3	クリッカーシステム	1式 (端末40台)	庄原	・授業にて使用 ・学外者参加のイベントにて使用

### （３）CLAL導入状況等調査

平成28年度におけるCLALの導入状況及び導入に係る教員の意識の把握を目的として、下記のとおり2種類の調査を実施した。

#### 【実施概要】

- ア 実施期間 平成29年1月23日（月）～平成29年2月3日（金）
- イ 対象教員 平成28年度に学部の授業を担当している全教員（非常勤講師を含む）
- ウ 調査の種類 ①「平成28年度 担当科目におけるCLAL導入状況調査」  
②「平成28年度 CLALの導入に係る意識調査」

	① 導入状況調査	② 意識調査
調査目的	平成28年度の全開講科目 <sup>※1</sup> におけるCLALの導入状況の把握	CLALの導入に対する意識の把握
調査方式	質問紙の配布・回収	
調査対象の単位	科目単位 〔当該教員が担当する全開講科目 <sup>※2</sup> 〕 の導入状況を調査する	教員単位 〔担当科目数に関わらず、教員〕 個々人の意識を調査する
質問内容	・CLALの導入状況（CLALの定義を満たしているか。） ・実施しているアクティブ・ラーニングの手法	・CLALを導入したことによる学生への効果 ・CLALを導入していない理由 ・CLALの導入に必要な支援等の要望

※1 平成28年度「授業改善のためのアンケート」実施科目が対象。ただし、履修者が5人以下の科目も含める。

※2 オムニバス形式の授業については、代表者に回答を依頼。

#### オ 調査結果

資料(2)－4 及び (2)－6 のとおり

#### (4) 先進事例調査

学内におけるアクティブ・ラーニング実践・普及の更なる加速や、AP事業の企画の参考とするため、先進事例調査として、学外で実施されたセミナーやフォーラム等のイベントに参加した。調査の実施状況は次のとおり。

期間：平成28年4月1日～平成29年3月31日

	日程	セミナー等名称（場所）	参加人数
1	H28. 6. 11～12	第64回中国・四国地区大学教育研究会 (於：岡山大学)	1人
2	H28. 6. 11～12	大学教育学会第38回大会 (於：立命館大学)	1人
3	H28. 8. 26～28	SPOD フォーラム 2016 (於：愛媛大学)	2人
4	H28. 9. 1	岡山大学第18回桃太郎フォーラム (於：岡山大学)	1人
5	H28. 10. 13	大学教育再生加速プログラム (AP) シンポジウム (於：愛媛大学)	1人
6	H28. 11. 10	平成28年度公立大学創生フォーラム (於：東京)	1人
7	H28. 11. 11	山形大学 AP キックオフシンポジウム (於：明治大学)	1人
8	H28. 11. 11	平成28年度SIH道場振り返りシンポジウム (於：徳島大学)	3人
9	H28. 11. 17～18	大学・高校実践ソリューションセミナー2016 (於：東京)	1人
10	H28. 12. 17	芝浦工業大学 AP シンポジウム (於：芝浦工業大学)	1人
11	H29. 2. 14	北九州市立大学大学教育再生加速プログラムフォーラム (於：北九州市立大学北方キャンパス)	2人
12	H29. 3. 4	京都光華女子大学平成28年度 AP 成果報告会 (於：京都光華女子大学)	1人
13	H29. 3. 4～5	第22回 FD フォーラム (於：京都)	1人
14	H29. 3. 19～20	第23回大学教育研究フォーラム (於：京都大学)	5人
15	H29. 3. 23	崇城大学・徳山大学 AP 第1回中間報告会 (於：崇城大学)	2人
16	H29. 3. 26	徳山大学第6回アクティブ・ラーニング勉強会 (於：徳山大学)	1人
延べ参加人数			25人

平成28年度「行動型学修に参加する学生への経費助成」実績一覧

1 助成実績

(期間：平成28年4月～平成29年2月)

	科目名	担当教員	科目区分	助成対象	実施日
1	ボランティア活動	手島 洋	全学共通科目	36人	6月4日
					6月18日
					9月10日
2	異文化としての日本	柳川 順子 五條 小枝子	全学共通科目	3人	7月10日
3	食品衛生学実験	谷本 昌太	専門科目 (健康科学科)	35人	8月2日
4	地域情報発信論	五條 小枝子 馬本 勉 塩川 満久	全学共通科目	42人	8月29日 ～9月2日
5	体育実技Ⅱ (山寺)	塩川 満久	全学共通科目	62人	8月22日 ～8月26日
6	体育実技Ⅱ (しまなみウォーク)	楠堀 誠司	全学共通科目	7人	8月12日 ～9月15日
7	留学生と学ぶ広島①	柳川 順子 五條 小枝子	全学共通科目	58人	10月9日
					10月16日
8	留学生と学ぶ広島②	柳川 順子 五條 小枝子	全学共通科目	58人	11月19日
9	フィールド科学	入船 浩平	専門科目 (生命環境学部)	177人	12月1日 ～12月13日
10	留学生と学ぶ広島③	柳川 順子 五條 小枝子	全学共通科目	58人	12月17日
11	留学生と学ぶ広島④ (最終発表会)	柳川 順子 五條 小枝子	全学共通科目	29人	1月21日
12	地域の理解 (合同発表会)	五條 小枝子	全学共通科目	67人	2月7日
合 計					

## 平成 28 年度 担当科目における C L A L 導入状況調査

この調査は、本学における県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning：CLAL）導入の現状と課題を探ることを目的として、平成 28 年度の開講科目を担当している教員（非常勤講師を含む）を対象として行うものです。

本学は、平成 25 年度からの第 2 期中期計画において、教育改革への取り組み強化を主軸に据え、確かな研究力と教育力に基づき、地域の連携拠点としての実績と強みを活かした人材を育成することをめざしています。この教育改革への取り組みを着実に実施し、より確かなものにするため、平成 26 年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」（テーマⅠ アクティブ・ラーニング）に採択され、「教育内容や方法の見直しと能動的学修の定着」に取り組んでいます。

この調査は、今後の本格的な事業推進、今後のさまざまな取り組みのための基礎資料となるものです。ご回答いただいた調査結果は AP 事業推進部会が責任をもって管理し、統計的に処理します。結果については、統計処理終了後、教育力の向上、授業改善に取り組むための基礎資料としてご活用いただくため、AP 事業推進部会委員を通じて各学部学科・センター等に提供します。また、AP 事業にかかる外部評価委員会や文部科学省等、事業評価に必要な際には情報を提供いたします。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力賜りますようお願いいたします。

なお、AP 事業の概要については教職員専用 Wiki をご覧ください。今年度を実施した推進部会の資料や議事録等も掲載しています。また、ご不明な点がございましたら、下記担当者までお問い合わせください。

お忙しいところ恐縮ですが、平成 29 年 2 月 3 日（金）17：00 までに、調査票に記入の上ご提出くださるようお願いいたします。

AP 事業推進部会長 馬 本 勉

- ❖ 提出締切： 平成 29 年 2 月 3 日（金）17：00
- ❖ 提出先： 広島キャンパス：メール室（回収 BOX を設置）  
庄原キャンパス：教学課 AP 担当  
三原キャンパス：教学課 メールボックス
- ❖ 問い合わせ先： 本部経営企画室 AP 事務担当 伊藤（俊）  
電子メールアドレス kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp  
電話番号 082-251-9727（内線 1228）

この調査では、CLAL を次のように定義しています。

**1 学期における授業（90 分×15 回＝1,350 分）の中で 300 分（1 講義あたり 20 分×15 回）以上の割合で、本学が定める行動型・参加型アクティブ・ラーニング手法を取り入れ実施する授業**

※手法や回数を問わず、300 分以上の時間をアクティブ・ラーニングに充てていれば CLAL とします。

※実習及び実技は「d.その他の行動型手法」、演習及び実験は「p.その他の参加型手法」としてください。

区分	本学が定めるアクティブ・ラーニングの手法		
行動型 （主に教室外）	a. フィールドワーク c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修 d. その他の行動型手法（実習・実技を含む）	b. 体験学修（現地体験、地域活動）	
参加型 （主に教室内）	e. ミニッツペーパー h. グループワーク k. ワークショップ n. 双方向授業 p. その他の参加型手法（演習・実験を含む）	f. 振り返り i. ディスカッション l. PBL <sup>※1</sup> o. 反転授業	g. プレゼンテーション j. ディベート m. TBL <sup>※2</sup>

※1 Problem-Based Learning：問題基盤型学修／Project-Based Learning：課題解決型学習

※2 Team-Based Learning：チーム基盤型学修



## 平成28年度CLAL導入状況調査 集計結果

- 1 調査期間 平成29年1月23日（月）～2月3日（金）
- 2 対象科目 総科目数 1242科目
  - ① 平成28年度「授業評価アンケート」のデータベースに登録されている科目
  - ② ①の科目のほか、履修者数が5人以下の科目
- 3 対象者 対象科目を担当する常勤および非常勤の教員 312名  
(複数人が担当する科目は、代表担当者に回答を依頼)
- 4 調査方法 ①常勤教員：各キャンパスで配付・回収  
②非常勤教員：調査票を郵送し、返信用封筒にて返送を依頼
- 5 回収率 70.5% (220人/312人)

### 【所属別回収率】

所 属	調査対象 (人)	回答数 (人)	回答率
人間文化学部 国際文化学科	24	17	70.8%
人間文化学部 健康科学科	14	10	71.4%
経営情報学部 経営学科	14	9	64.3%
経営情報学部 経営情報学科	17	14	82.4%
生命環境学部 生命科学科	34	27	79.4%
生命環境学部 環境科学科	14	10	71.4%
保健福祉学部 看護学科	20	15	75.0%
保健福祉学部 理学療法学科	14	11	78.6%
保健福祉学部 作業療法学科	14	10	71.4%
保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	14	12	85.7%
保健福祉学部 人間福祉学科	20	10	50.0%
センター (総合教育・学術情報・地域連携・国際交流)	11	9	81.8%
非常勤講師	102	66	64.7%
合 計	312	220	70.5%

## 6 調査結果

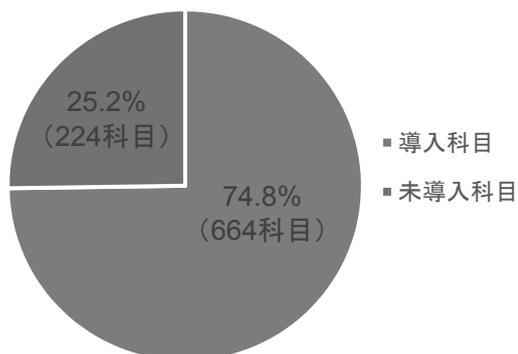
問1 CLALの導入状況について、該当するほうにチェックを入れてください。

(例) 1学期の授業時間のうちアクティブ・ラーニング実施時間が300分以上 → 導入  
 // 300分未満 → 未導入

	調査対象科目	回答科目	導入科目	未導入科目	未回答科目
科目数	1242	888	664	224	354

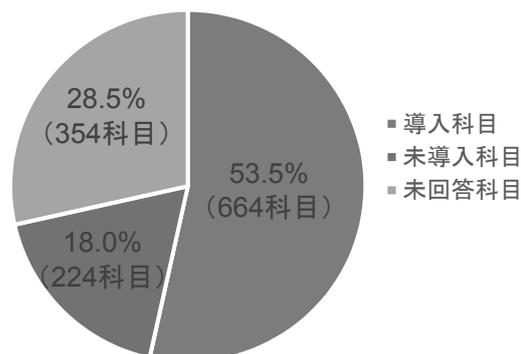
問1 CLALの導入率① (n=888)

(回答があった科目のうち、CLALを導入している科目の割合)



問1 CLALの導入率② (n=1242)

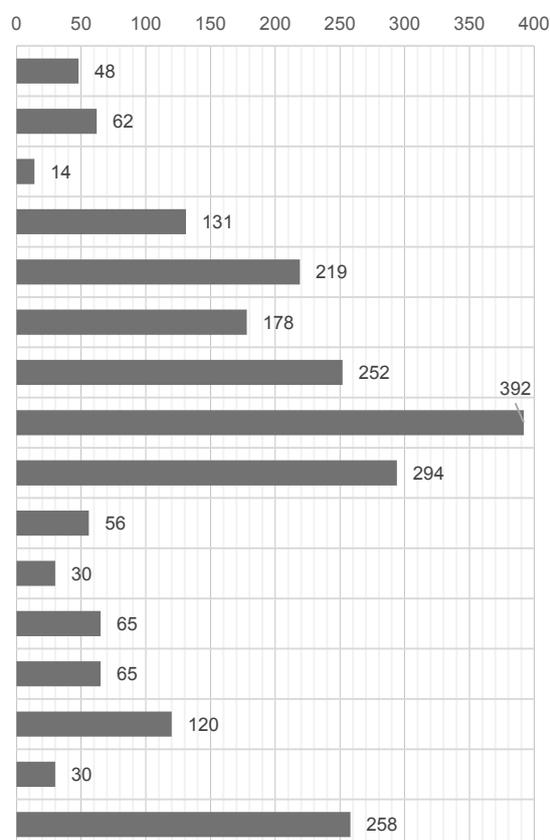
(全対象科目のうち、CLALを導入している科目の割合)



問2 問1で「導入」とした科目について、実施しているアクティブ・ラーニングの手法を教えてください。回答の選択肢a~pの中から、該当するもの全てにチェックを入れてください。

手法	件数
a.フィールドワーク	48
b.体験学修	62
c.他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修	14
d.その他行動型学修(実習・実技を含む)	131
e.ミニツツペーパー	219
f.振り返り	178
g.プレゼンテーション	252
h.グループワーク	392
i.ディスカッション	294
j.ディベート	56
k.ワークショップ	30
l.PBL	65
m.TBL	65
n.双方向授業	120
o.反転授業	30
p.その他の参加型手法(演習・実験を含む)	258

問2 導入手法(複数回答)



## 平成 28 年度 CLAL の導入に係る意識調査

この調査は、本学 AP 事業で推進する県立広島大学型アクティブ・ラーニング(Campus Linkage Active Learning: CLAL) の導入に係る教員の意識を把握し、現状と課題を探ることを目的として、平成 28 年度の開講科目を担当している教員（非常勤講師を含む）を対象として行うものです。

並行して依頼をしております「平成 28 年度 担当科目における CLAL 導入状況調査」（以下「導入状況調査」とする。）では、担当科目毎に CLAL の導入状況を把握することを趣旨としていますが、この調査は CLAL の導入に対する教員一人ひとりの意見を伺うことに主眼を置いています。

ご回答いただいた調査結果は、「導入状況調査」と同様に、AP 事業推進部会が責任をもって管理し、CLAL の推進や AP 評価委員会への報告等に活用いたします。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力賜りますようお願いいたします。

お忙しいところ恐縮ですが、平成 29 年 2 月 3 日（金）17:00 までにご回答くださるようお願いいたします。

AP 事業推進部会長 馬 本 勉

❖提出締切： 平成 29 年 2 月 3 日（金）17:00

❖提出先： 広島キャンパス：メール室（回収 BOX を設置）  
庄原キャンパス：教学課 AP 担当  
三原キャンパス：教学課 メールボックス

❖問合わせ先： 本部経営企画室 AP 事務担当 伊藤（俊）  
電子メールアドレス kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp  
電話番号 082-251-9727（内線 1228）

### ◎ 氏名および所属を教えてください。

氏名		
所属 数字を○で囲んでください。	1 人間文化学部 国際文化学科	2 人間文化学部 健康科学科
	3 経営情報学部 経営学科	4 経営情報学部 経営情報学科
	5 生命環境学部 生命科学科	6 生命環境学部 環境科学科
	7 保健福祉学部 看護学科	8 保健福祉学部 理学療法学科
	9 保健福祉学部 作業療法学科	10 保健福祉学部 コミュニケーション障害学科
	11 保健福祉学部 人間福祉学科	
	12 総合教育センター	13 学術情報センター
	14 地域連携センター	15 国際交流センター
	16 非常勤講師	

### 問 1. CLAL の導入状況を教えてください。

平成 28 年度の担当科目で CLAL を導入している（300 分以上アクティブ・ラーニングを実施している）授業はありますか。当てはまる数字を○で囲んでください。

- 1 全ての授業で導入している。 → 問 2 および問 4 をお答えください。
- 2 一部の授業で導入している。 → 問 2, 問 3 および問 4 をお答えください。
- 3 全ての授業で導入していない。 → 問 3 および問 4 をお答えください。

**問2. 問1で「1」または「2」と答えた方にお聞きします。**

[ア] アクティブ・ラーニングの実施による、学生の学修に対する効果をどのように感じていますか。当てはまる欄に○を入れてください。

	1 そう思う	2 どちらとも いえない	3 そう思わない
学修内容の理解度が上がった			
授業への参加が積極的になった			
質問が増えた			
授業外の学修時間が増えた			
レポート等、課題の質が向上した			
遅刻・早退・欠席が減った			
私語が減った			
居眠りが減った			

[イ] その他、感じている効果があれば具体的に記入してください。

SAMPLE

[イ] その他の理由があれば自由にお聞かせください。

**問4. 全ての方にお聞きします。**

[ア] 平成29年度の授業におけるCLALの導入予定について、当てはまるものに○を付けてください。

- 1 行動型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。
- 2 参加型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。
- 3 行動型・参加型とともに含む複合型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。
- 4 導入を検討していない。

[イ] [ア] の回答理由を具体的にお聞かせください。

SAMPLE

[ウ] CLALを導入するための支援について、必要だと思うものにチェックを入れてください。(複数回等可)

- |  |   |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 1 FDeP 養成講座の充実<br><input type="checkbox"/> 3 ラーニングコミュニティ等の学修環境整備<br><input type="checkbox"/> 5 研修会等の情報提供<br><input type="checkbox"/> 7 学修支援アドバイザー制度の充実<br><input type="checkbox"/> 8 その他( ) | <input type="checkbox"/> 2 行動型学修への経費助成<br><input type="checkbox"/> 4 ICT機器・環境の整備<br><input type="checkbox"/> 6 研修会等参加への経費助成 |
|--|---|

ご協力ありがとうございます。

**問3. 問1で「2」または「3」と答えた方にお聞きします。**

[ア] CLALを導入していない理由について、当てはまる欄に○を入れてください。

	1 そう思う	2 どちらとも いえない	3 そう思わない
授業の内容上導入が難しい			
大人数の授業であるため			
事前・事後の作業時間が増える			
講義に充てる時間が減る			
教育効果があると 思わない			
周囲も導入していない			
手法がわからない			
面倒である			
なんとなく			

## 平成28年度CLALの導入に係る意識調査 集計結果

- 1 調査期間 平成29年1月23日(月)～2月3日(金)
- 2 調査対象 平成28年度開講科目を担当する常勤および非常勤の教員 312名
- 3 調査方法 ①常勤教員：各キャンパスで配付・回収  
②非常勤教員：調査票を郵送し、返信用封筒にて返送を依頼
- 4 回収率 69.2% (216人/312人)

### 【所属別回収率】

所 属	調査対象 (人)	回答者 (人)	回答率
人間文化学部 国際文化学科	24	15	62.5%
人間文化学部 健康科学科	14	11	78.6%
経営情報学部 経営学科	14	8	57.1%
経営情報学部 経営情報学科	17	13	76.5%
生命環境学部 生命科学科	34	24	70.6%
生命環境学部 環境科学科	14	10	71.4%
保健福祉学部 看護学科	20	16	80.0%
保健福祉学部 理学療法学科	14	11	78.6%
保健福祉学部 作業療法学科	14	10	71.4%
保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	14	12	85.7%
保健福祉学部 人間福祉学科	20	10	50.0%
センター (総合教育・学術情報・地域連携・国際交流)	11	9	81.8%
非常勤講師	102	63	61.8%
無記入	—	4	—
合 計	312	216	69.2%

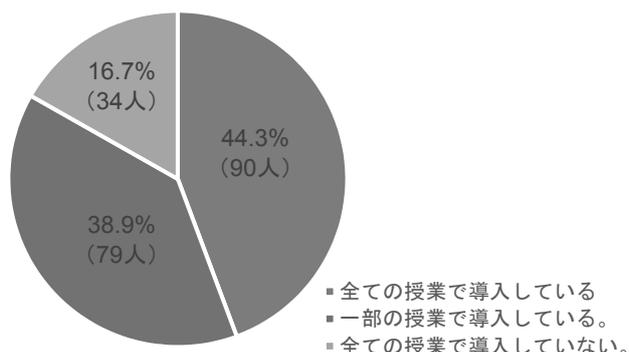
### 5 調査結果 (自由記述の問を除く)

#### 問1 CLALの導入状況を教えてください。

平成27年度の担当科目でCLALを導入している(30分以上アクティブ・ラーニングを実施している)授業はありますか。当てはまる数字を○で囲んでください。

	回答数	割合
全ての授業で導入している	90	44.3%
一部の授業で導入している。	79	38.9%
全ての授業で導入していない。	34	16.7%
合 計	203	100%

問1 CLALの導入状況 (n=203)



※CLAL (県立広島大学型アクティブ・ラーニング)  
…1学期における授業(90分×15回=1,350分)の中で300分(1講義あたり20分×15回)以上の割合で、本学が定める行動型・参加型アクティブ・ラーニング手法を取り入れ実施する授業

問2 問1で「1」または「2」と答えた方にお聞きします。

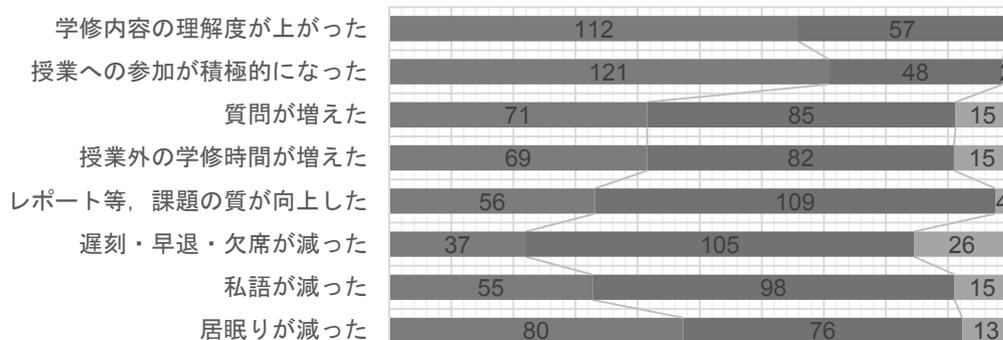
〔ア〕 アクティブ・ラーニングの実施による、学生の学修に対する効果をどのように感じていますか。当てはまる欄に○を入れてください。

上段：割合／下段：回答数

	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	合 計
学修内容の理解度が上がった	65.9% (112)	33.5% (57)	0.6% (1)	100.0% (170)
授業への参加が積極的になった	70.8% (121)	28.1% (48)	1.2% (2)	100.0% (171)
質問が増えた	41.5% (71)	49.7% (85)	8.8% (15)	100.0% (171)
授業外の学修時間が増えた	41.6% (69)	49.4% (82)	9.0% (15)	100.0% (166)
レポート等、課題の質が向上した	33.1% (56)	64.5% (109)	2.4% (4)	100.0% (169)
遅刻・早退・欠席が減った	22.0% (37)	62.5% (105)	15.5% (26)	100.0% (168)
私語が減った	32.7% (55)	58.3% (98)	8.9% (15)	100.0% (168)
居眠りが減った	47.3% (80)	45.0% (76)	7.7% (13)	100.0% (169)

## 問2〔ア〕 アクティブ・ラーニングの効果

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 1 そう思う ■ 2 どちらともいえない ■ 3 そう思わない

〔イ〕 その他、感じている効果等があれば具体的にお聞かせください。(回答抜粋)

- 導入の位置付けの科目でフィールドワークを行ったので、学生の興味関心は高くなった印象
- 学生同士で協力して1つの課題に取り組む力がついている。協調性・共感性など、ソーシャルスキルの向上が伺える。
- 社会科学では理論と現実の接点が重要であるため、必要不可欠である。学習面のみならず、就職活動で実社会の人と話す訓練になっていると感じる。
- 単なる知識の獲得ではなく、学修を通して人間力を身に付けることができた(あるいは契機を得た)と実感する学生が増えた)
- 学生によると、他の学生の考え、多角的な物事の見方につながった。また、毎講義のコミュニケーションシート記入で文章力の向上に役立った、との感想が寄せられている。
- 学生の理解が難しいところがか、教員が理解しやすくなった気がします。ただそれを教える技術・教材づくりが難しいと感じます。
- 知識の修(習)得、基礎の定着を図りつつやるのは、難しい面もあります。
- 当初から導入しているので、比較対照できない。授業以外の学修時間が必要な様に(課題を)設定している。

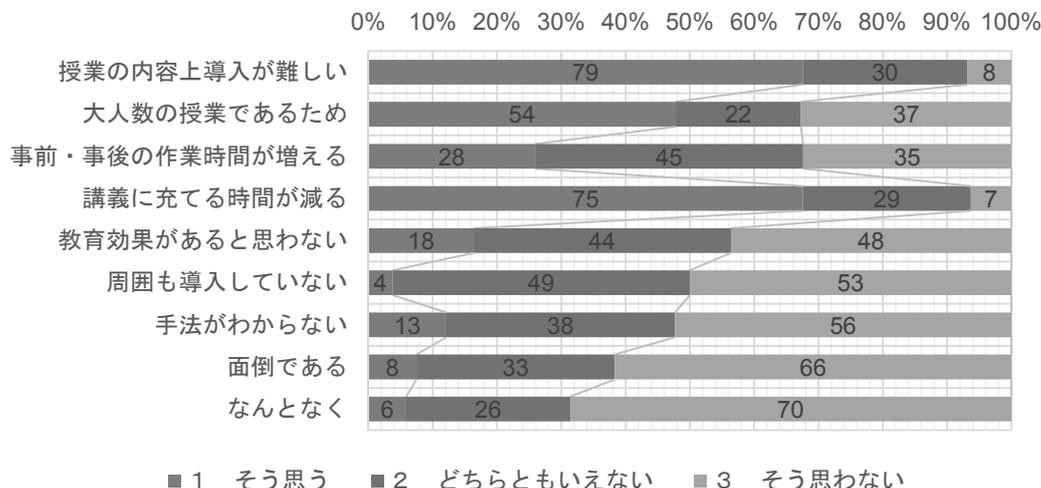
問3 問1で「2」または「3」と答えた方にお聞きします。

〔ア〕 CLALを導入していない理由について、当てはまる欄に○を入れてください。

上段：割合／下段：回答数

	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	合計
授業の内容上導入が難しい	67.5% (79)	25.6% (30)	6.8% (8)	100.0% (117)
大人数の授業であるため	47.8% (54)	19.5% (22)	32.7% (37)	100.0% (113)
事前・事後の作業時間が増える	25.9% (28)	41.7% (45)	32.4% (35)	100.0% (108)
講義に充てる時間が減る	67.6% (75)	26.1% (29)	6.3% (7)	100.0% (111)
教育効果があると思わない	16.4% (18)	40.0% (44)	43.6% (48)	100.0% (110)
周囲も導入していない	3.8% (4)	46.2% (49)	50.0% (53)	100.0% (106)
手法がわからない	12.1% (13)	35.5% (38)	52.3% (56)	100.0% (107)
面倒である	7.5% (8)	30.8% (33)	61.7% (66)	100.0% (107)
なんとなく	5.9% (6)	25.5% (26)	68.6% (70)	100.0% (102)

### 問3〔ア〕 CLALを導入していない理由



〔イ〕 その他の理由があれば自由にお聞かせください。(回答抜粋)

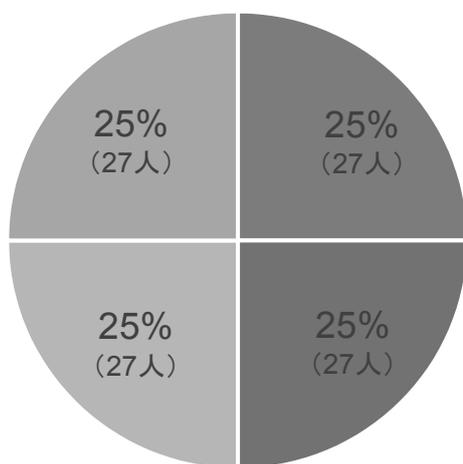
- 取組のための事前準備の時間がとれない
- 実施しているが、300分を少し下回っている。
- 300分は超えていませんが、それぞれ考えさせる時間やレポートの提出をさせています。時間ではなく、質ではないでしょうか。
- 他の担当科目に比べて、「知識」を重視している科目である為。部分的にALを導入しているが、300分以上には及ばない。協働作業になじめない学生もいる(グループワーク等)
- 講義をおこなって内容を知ってから行うほうが導入がスムーズであると思います。無知の状態から行うと時間が足りなくなると思います(質を確保したいです)
- 学生の基礎知識が圧倒的に不足しております。ある科目は教職の内容にも必要であり、15回ゆっくりと丁寧に説明しております。実習や実験で別途プレゼンや実技を行っております。
- 理系の科目は、基本的にALで、アクティブラーニングを導入しえないor必要のない部分を座学で行っている。また、卒業論文は最大かつ最も効果的、重要なアクティブラーニングである。

問4 全ての方にお聞きします。

[ア] 平成28年度の授業におけるCLALの導入予定について、当てはまるものに○を付けてください。

	回答数	割合
1 行動型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。	27	25.0%
2 参加型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。	27	25.0%
3 行動型・参加型をともに含む複合型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。	27	25.0%
4 導入を検討していない。	27	25.0%
合 計	108	

問4 [ア] H28年度担当科目におけるCLAL導入予定 (n=167)



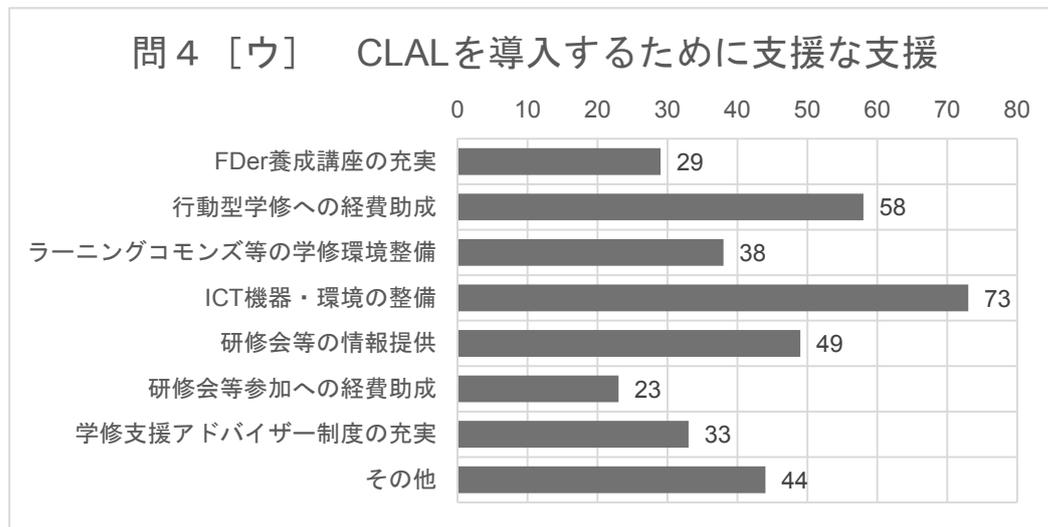
- 行動型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。
- 参加型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。
- 行動型・参加型をともに含む複合型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。
- 導入を検討していない。

[イ] [ア] の回答理由を具体的にお聞かせください。(回答抜粋)

問4 [ア]	問4 [イ]
1	人数と講義内容で参加型が難しいため。本年度、前年より質の向上が感じられたため。県大の武器になりうる、と実感したため。
1	前年度に効果を感じた授業では、引き続き導入していきたい。また、導入していない授業では、どの手法がよいか試行錯誤しながら実践していき、教育的手法として確立していきたい。
1	28年度に導入した際、学生の授業評価が近年で最も高く、教育効果を実感できたので、28年度の反省を踏まえて、計画性を持って実施したいと考えています。
2	講義中に学生が主導的・能動的に授業に取り組む様子が見られており、研究発表やディベートの際にも夫々学修能力を発揮することができるからである。
2	ICT (タブレット) を活用した双方向授業や、学習課題に対するディスカッション、演習 (指導案作成、模擬授業) を計画しています。
2	理論だけでなく、演習による体験を通して理解を深めるため。
3	学生の主体的な学びのために、両方とも重要だと思う。演習・実習を担当することも多いため、導入しやすい。
3	学生の学修状況を見ながらでないと、授業が組み立てられないから。
4	時間が無い。もっと授業の準備に充てる時間が必要。
4	基礎知識がないのに参加型・行動型の学修を仕かけても無駄な時間を作るだけになるため。

[ウ] CLAL を導入するための支援について、必要だと思うものにチェックを入れてください。(複数回等可)

	回答数
FDer 養成講座の充実	29
行動型学修への経費助成	53
ラーニングコモンズ等の学修環境整備	38
ICT 機器・環境の整備	73
研修会等の情報提供	49
研修会等参加への経費助成	23
学修支援アドバイザー制度の充実	33
その他	44
合 計	347



■ 選択肢「その他」自由記述 (抜粋)

- 参加型学修で使える消耗品の整備
- FDer を決める (あるいは手を挙げる) にしても現在の講座のみではなく、学生 (アドバイザー) と教員双方参加で議論するとか、実際取り組んでおられる先生方 (ほとんどかもしれませんが) がフランクに話題を出すことができるようにする。専門で 10~20 名の講義なら可能です。1 年生/2 年生→3 年等で行っている AL 型の講義を体験 (参加) させる前から、本学でもやれるなと思っておりました!!
- CLAL の導入を相談でき、導入方法のアドバイスや、学内の CLAL の実施状況を理解している、専任のアドバイザーがほしい。
- 講義事例などがあると参考にしやすいと思います。
- 何を授業で教えるかを教科別に検討する会が必要な気がします。
- 推進していく教員・組織の作成
- 各キャンパスの独自性の尊重
- 全ての授業ではなく、効果の認められる授業を選択する (選択のコツや、指定教科を設ける)
- 行動型学修を実践・計画するための連続ワークショップ
- 学生自身が CLAL の意義を理解し、慣れ親しむ取組
- 教育効果の測定
- 学生交通費の補助
- 参加型学修への経費助成 (グループワークやディスカッションをするためのミニホワイトボードがほしい)
- 最も影響が大きいのは、私の場合は、クラスサイズと教室の雰囲気だと感じています。固定型の机、イスだと、どうしても学生の動きが制約されてしまいます。



### (3) ファカルティ・ディベロッパー (F D e r) の養成

平成 28 年度は 5 回の FDer 養成講座を開催した。第 1 回は、従来三原キャンパスの教員を中心に行われてきたティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを FDer 養成の一環として位置づけ、3 日間にわたって実施した (8/24～8/26 広島 C)。第 2～4 回は各キャンパスのニーズに対応したテーマとし、キャンパス FDer 代表を中心に企画・運営した (他キャンパスへの遠隔配信を実施)。テーマはそれぞれ「ICE モデル:アクティブラーニングの効果的ツール」(12/9 三原 C)、「ひととひとをつなげるルーブリック」(12/12 広島 C)、「学修成果の評価について」(12/21 庄原 C) であった。第 5 回は、広島県高等学校教育研究・実践合同発表会と兼ねて実施した (1/27 広島 C)。

平成 28 年度は FDer 間の連絡調整を行うワーキング・グループをスタートさせたことから、FDer の動きが活発化してきた。授業改善にとどまらず、カリキュラム改善へ向けた議論も始まった。一方、自身の授業改善を超えた組織的働きかけが十分に見られないケースもある。FDer に期待される役割を明示することに努め、学び合い・支え合いの仕組み作りを加速させていきたい。

#### 資 料

- (3)－1 第 1 回 F D e r 養成講座 (第 3 回 県立広島大学ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ) 実施概要及び資料
- (3)－2 第 2～4 回 F D e r 養成講座 チラシ
- (3)－3 第 2 回 F D e r 養成講座 実施概要及び資料
- (3)－4 第 3 回 F D e r 養成講座 実施概要及び資料
- (3)－5 第 4 回 F D e r 養成講座 実施概要及び資料

## ファカルティ・ディベロッパー（F D e r）の養成について

### (1) F D e r 連絡調整ワーキンググループ

F D e r 間の連携を進化させ、組織的な教育改善を推進するため、新たにF D e r 連絡調整ワーキンググループ（F D e r W G）を発足し、下記のとおり協議を行った。

#### 【WG構成員】

県立広島大学F D e r 36名

#### 【協議概要】

平成28年度における全体会の実施状況は次のとおり。

回数	日時	議題
第1回 全体会	平成28年 8月1日(月) 14:40～	【協議事項】 1 FDer連絡調整ワーキンググループの活動について 2 学修支援アドバイザーとの連携について 3 AP事業で購入した図書の運用について 4 その他

この他、キャンパス毎の個別協議を随時実施した。

### (2) 平成28年度F D e r 養成講座の実施

前年度に引き続きF D e r 養成を行うため、平成28年度F D e r 養成プログラム(応用編)として養成講座を計5回実施した。実施概要は下記のとおり。

#### 【実施状況】

回	日時	会場	概要
1	平成28年 8月24日(水) ～ 8月26日(金)	広島キャンパス 2313 講義室 他	【テーマ】 第3回県立広島大学ティーチング・ポートフォリオ 作成ワークショップ 【講師】 北野 健一 氏 (大阪府立大学工業高等専門学校 教授)
2	平成28年 12月9日(金) 14:40～17:00	【発信】 三原C 広島 2143 講義室 庄原 2302 講義室 三原 1101 講義室	【テーマ】 ICEモデル —アクティブラーニングの効果的 なツール— 【講師】 土持 ゲーリー 法一 氏 (帝京大学高等教育開発センター長/教授)
3	平成28年 12月12日(月) 14:40～16:10	【発信】 広島C 広島 2313 講義室 庄原 2102 講義室 三原 4103 講義室	【テーマ】 ひととひとをつなげるルーブリック」 【講師】 芝崎 良典 氏 (くらしき作陽大学 子ども教育学部 准教授)
4	平成28年 12月21日(水) 13:00～14:30	【発信】 庄原C 広島 2143 講義室 庄原 2102 講義室 三原 1101 講義室	【テーマ】 学修成果の評価について 【講師】 原田 浩幸 氏 (県立広島大学 生命環境学部 教授)

5	平成 29 年 1 月 27 日(金) 9:30~17:30	<b>発信</b> 広島C	<b>【テーマ】</b> 平成28年度広島県高等学校教育研究・実践合同 発表会 ※第5回 FDer 養成講座として学内に公開
		広島 2143 講義室 庄原 大講義室 三原 1101 講義室	

【参加人数】※教員のみ

(人)

	広 島	庄 原	三 原	合 計
第 1 回	1 1	—	—	1 1
第 2 回	8	1	1 9	2 8
第 3 回	1 3	0	3	1 6
第 4 回	1 7	1 1	1 1	3 9
第 5 回	5 6	8	1 3	7 7
延べ人数	1 0 5	2 0	4 6	1 7 1

**第1回FDer養成講座 実施概要**  
(第3回県立広島大学ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ)

1 日時 平成28年8月24日(水)～26日(金)

2 場所 広島キャンパス 2313講義室ほか

3 概要

(1) テーマ 「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」

(2) 講師 大阪府立大学工業高等専門学校 教授 北野 健一 氏

(3) 参加者 メンティー 5人, メンター 6人

4 アンケート集計結果(コメントのみ抜粋)

(1) メンティーコメント

- 本気になってこれだけ考えて教育について考えたことはありませんでした。本当に勉強になりました。教員としてポートフォリオは必要不可欠だと感じました。従って定期的にステップアップ研修や継続研修などもあればいいなと感じました。
- TPは 期限内にまとめていくこととなりますが、時間を集中して教育のために使うことはかなりプラスになる体験だと思います。改訂が楽しみ(すこし不安もあり)です。
- 自分の教育について多面的に振り返り、まとめることができた。上記作業をメンターの助言を受けながら、すすめたため、楽しんで作業ができた。
- 履歴書以外で自分を振り返るよい機会となりました。信念を持って現在の職に取り組んでいる点も確認できて、自分の励みにもなりました。しかし、他人に影響を及ぼす仕事ですし、それ以上に組織の多彩な人々との連携が大切なので、多くの教員が同様の機会を有し、それぞれの教育の姿勢や功罪を考える場をもっと多く持つことを期待します。メンターの方々が、「また書き直したい」と仰っていましたが、教員免許状講習ではありませんが、定期的なブラッシュアップのための研修の1つとして活用していきたいと思います。
- 昔を振り返ると、私は、比較的早い段階から(小学校高学年?), 教師になりたいと思っていました。夢が叶ったわけですから、これほど嬉しいことはないのですが、ここ数年、大学運営に関わる業務量が激増し、何のために教師になったのか、悩んだり落ち込んだりすることが多くなりました。今回、ティーチング・ポートフォリオを作成したことで、私自身の原点に帰ることができたように思います。皆様に心より感謝しております。後期の授業、何か変わったな、と感じることが増えてきました。心構えと言うか・・・。とにかく元気が出たのです。ティーチング・ポートフォリオのおかげだと思います。

(2) メンターコメント

- 同じキャンパスにいても、他学科の先生がどのような考えてその専門職の教育を行っているのか、そもそもその専門職の役割が何なのか、ということをよくわかっていなかったのだということに気がつくことができた。多職種の専門性や教育上重視している点を知ったことで、それを自分の教育にも活かせると感じた。
- 他学部の先生の教育観をじっくり聞くことができました。上の学年や院生が下の学生を育てるという発想はなかったもので、自分の教育に取り入れることができないかと考えながら、話を聞いていました。前回も思ったことですが、他の人の話を聞くことで、自分を振り返ることができました。良い経験になったと思います。
- メンティーの話聞きながら、もう一度、自身の教育について考えることができた。また、他の先生の研究方針やアイデアを聞くことができて、今後の教育に役立つと感じた。傾聴や相手の考えを引き出すことを意識しながら、人と話す機会が少なかったので、良い経験ができた。

### (3) メンティーからメンターへ

- これほど真剣に向き合って一緒に考えてくださったのでこちらとしても少しでもそれに答えようと頑張ることができました。また、沢山の助言から自分がどのような考えで教員をやっているのか振り返り、立ち止まり、考えることができました。1日目2日目提出が3時4時になってしまいましたでしたがしっかり読んで頂き助言も頂き感謝しかありません。これから先もっともっと学生の為に頑張ろうと思いました。
- 今回対応いただきまして、うまく原稿の初稿から内容や論旨を読み解いていただいている（しかも短時間に）と感じました。考えてきたこと、書きたいことの要点をまとめていく上で、またTPとは何ぞやという部分も大変参考になりました。もし個人的に書いていただければ仕上がりにあせませんね。マッチングというものはあるかと思います。だれがどなたを担当するのか？秘伝があるのですか？（事前準備を読みこなせば、ある程度どんな考えかなどは伝わるのかもしれませんが、心して楽しみながらできる才能？とでもいうのか、必要な気がしました）
- ひとつひとつの作業にきめこまやかな配慮をもってご助言くださり、感謝しております。時間に追われ、あわただしい中での作業でしたが、メンターのサポートのおかげで、とても楽しく、充実した、幸せな時間でした。
- 資料を丁寧に読んでいただき、スーパーバイザーとの連携も巧みに取れていたようで、的確なアドバイスがいただけたと思います。加えて、こちらの話を引き出しながら傾聴し、かつ方向性をサポートしていただけた点が最もありがたかったと思います。全体の組み合わせはよく考慮されていて、今回の規模からみて、それぞれに適切なマッチングだったと判断します。ありがとうございました。

## 第3回 県立広島大学

### ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

日程：2016年8月24日（水）～26日（金）

集合時刻：2016年8月24日（水）午後1時00分

場所：県立広島大学 広島キャンパス 2317 講義室

〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目 1-7-1

TEL 082-251-9727（経営企画室直通）

主催：県立広島大学

## プログラム日程

8月24日（水）

13:00～14:00	オリエンテーション（2317 講義室）（司会：吉川） ■中村健一学長挨拶 ■自己紹介 ■ワークショップ概要説明（北野） ■ティーチング・ポートフォリオとは（北野） ■第一編に向けての共通のアドバイス（北野）
14:00～14:45	ミニワーク（2317 講義室）
14:45～16:15	第1回個人メンタリング 私のメンタリング時間（ ）
16:15～18:30	TP作成作業（2317 講義室）
18:30～20:30	夕食：意見交換会（任意参加） 会場：広島キャンパス食堂（2棟1階） 日頃、教育について思っていることをざっくばらんに語りましょう
23:00	TP作成作業（自宅等） TP第一編提出締め切り期限 （メンターとスーパーバイザーまで、添付ファイルにて提出）

私のメンターのメールアドレス（ ）  
私のスーパーバイザーのメールアドレス（ kitano@osaka-pct.ac.jp ）

8月25日(木)

9:00~10:00	TP作成作業 (2317 講義室)
10:00~11:00	第2回個人メンタリング 私のメンタリング時間 ( )
11:00~12:00	TP作成作業 (2317 講義室)
12:00~13:30	意見交換会+昼食 (2215 演習室) 参加者の第一欄に共通するコメントと情報共有
13:30~16:00	TP作成作業 (2317 講義室)
16:00~17:00	第3回個人メンタリング 私のメンタリング時間 ( )
17:00~ 23:00	TP作成作業 (2317 講義室または自宅等) 第二欄提出期限 (メンターとスーパバイザーまで、添付ファイルにて提出)

8月26日(金)

9:00~10:00	TP作成作業 (2317 講義室)
10:00~11:00	第4回個人メンタリング 私のメンタリング時間 ( )
11:00~12:00	TP作成作業 (2317 講義室)
12:00~12:45	昼食 (2215 演習室)
12:45~13:30	よりよいメンターになるために (2336 講義室) 良いメンタリングに必要なこと
13:30~15:00	TP作成作業&プレゼンテーション準備 (2317 講義室)
15:00~16:30	TPプレゼンテーション (2317 講義室)
16:30~17:00	修了式 (2317 講義室) 修了証の授与 中村健一学長挨拶 ワークショップを振り返って 記念撮影
18:00~20:00	修了を祝う会(任意参加) 会場：花の舞 蔵島別邸 自分の学科・大学にスムーズに導入するにはどうすればよいでしょう ※修了式前後に、皆で後片付けをし、17:18のバスで移動します。

## ワークショップについて

### 【目的】

- ◇ティーチング・ポートフォリオ (TP) の作成
- ◇TPの作成を通じた教育改善
- ◇本ワークショップの評価と改善
- ◇参加者の情報交換とネットワーキングづくり

### 【スケジュール紹介】

- ◇作業スペースは、2317 講義室とします (オープンは、8:30~21:30です)。
- ◇学生が質問等のために、教員をたずねてくるケースが考えられます。また、メンターによっては個人ミーティングの時間の変更をお願いする場合がございます。ご了承のほどお願い致します。
- ◇原稿の提出期限は23:00です。電子メールの添付ファイルでご提出をお願いします。
- ◇個人ミーティングは全部で4回あります。個人ミーティング以外の時間でも、担当メンターには自由に相談することはできます。ただし、6ページにありますように、メンター側もメンターミーティングをしておりますので、ご希望に添えない場合もございます。ご了承をお願いいたします。

### 【設備について】

- ◇2317 講義室に備え付けのプリンタはご自由にお使いください。プリンタに直結しているパソコンにUSB等でファイルをコピーしてお使いください。
- ◇コピーは、1325 教員印刷室のコピー機がご利用になります (コピーカードが必要です)。
- ◇その他必要な文房具類がありましたら、経営企画室の伊藤 (俊) まで申し出てくださいます。できる限り対応いたします。

### 【その他】

- ◇本ワークショップでは、お互いを「さん」で呼び出すこととしたいので、ご協力ください。

## 第一稿に向けてのアドバイス

### スタートアップシートとTPの関連

- ◇シート右にあるコメント
- ◇授業評価についての記述
- ◇学生の学習成果

### 分量の目安

全体として8～10ページくらいになるように作成します。フォントはあまり小さくないほうがよいでしょう（推奨サイズ11ポイント以上）。

- ◇理念
- ◇責任
- ◇方法
- ◇授業評価
- ◇学習成果
- ◇教育改善
- ◇今後の目標
- ◇添付資料

### 第一稿作成にあたって

- ◇理念 – 目的・方針/方法・エビデンスの一貫性を意識してください。
- ◇全体構成（項目/目次）をまずたててください。第一稿の段階で細部にわたって完成している必要はありません。
- ◇根拠を明らかにしてください。参照が容易なように明示してください。
- ◇体裁は「実践 ティーチング・ポートフォリオ スタターブック」の本の例を参考にしてください。
- ◇ページ番号を振ってください。
- ◇ファイル名は、「Kitano\_1\_0806.doc」のように、「名前\_稿のバージョン\_日付.doc」としてください。（稿のバージョンは1、2、3、・・・となります）。

### 最終日のプレゼンテーション

- ◇最終日のプレゼンテーションでは、カバーページでは、カバーページとしてハイライト部分（簡易書式で6～8個？）をA4一枚にまとめたものを配布してもらう予定です。
- ◇自分のTPのハイライトは、どこなのかを考えながら作成するとよいでしょう。発表5分、質疑応答3分の予定です。

## (参加者)ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ スケジュール

	8月24日(水)	8月25日(木)	8月26日(金)
8:00AM			
9:00		TP作成作業(2317)	TP作成作業(2317)
10:00		個人メンタリング	個人メンタリング
11:00		TP作成作業(2317)	TP作成作業(2317)
12:00		意見交換+昼食(2215)	昼食(2215)
1:00PM	オリエンテーション(2317)		To be a good mentor(2336)
2:00	ミニワーク(2317)	TP作成作業(2317)	TP作成作業&プレゼン準備(2317)
3:00	個人メンタリング		TPプレゼンテーション(2317)
4:00		個人メンタリング	修了式(2317)
5:00	TP作成作業(2317)		後片付け・移動(※)
6:00		TP作成作業(2317)	
7:00	夕食:意見交換会(任意参加)		修了を祝う会(任意参加)
8:00			
9:00			
10:00			
11:00	原稿提出締切 23:00	原稿提出締切 23:00	
0:00AM			

※17:18のバスで移動

担当一覧

スーパードायザー	メンター	メンティー	個人メンタリングの部屋
北野	藤田	井上	1243
	永井	馬本	1245
	黒田	江本	1247
	山中	糸田	1249
	古山	丸山	2333

(敬称略)

(メンター)ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ スケジュール

	8月24日(水)	8月25日(木)	8月26日(金)
8:00AM			
9:00			
10:00		メンターミーティング3(2215)	メンターミーティング7(2215)
11:00		個人メンタリング	個人メンタリング
12:00	メンターミーティング1(2215)	メンターミーティング4(2215)	メンターミーティング8(2215)
1:00PM	オリエンテーション(2317)	意見交換+昼食(2215)	昼食(2215)
2:00	ミニワーク(2317)	休憩	To be a good mentor(2336)
3:00	個人メンタリング		メンターミーティング9(2215)
4:00		メンターミーティング5(2215)	TPプレゼンテーション(2317)
5:00	メンターミーティング2(2215)	個人メンタリング	修了式(2317)
6:00		メンターミーティング6(2215)	後片付け・移動(※)
7:00			修了を祝う会(任意参加)
8:00	夕食:意見交換会(任意参加)		
9:00			
10:00			
11:00	原稿提出締切 23:00	原稿提出締切 23:00	
0:00AM			

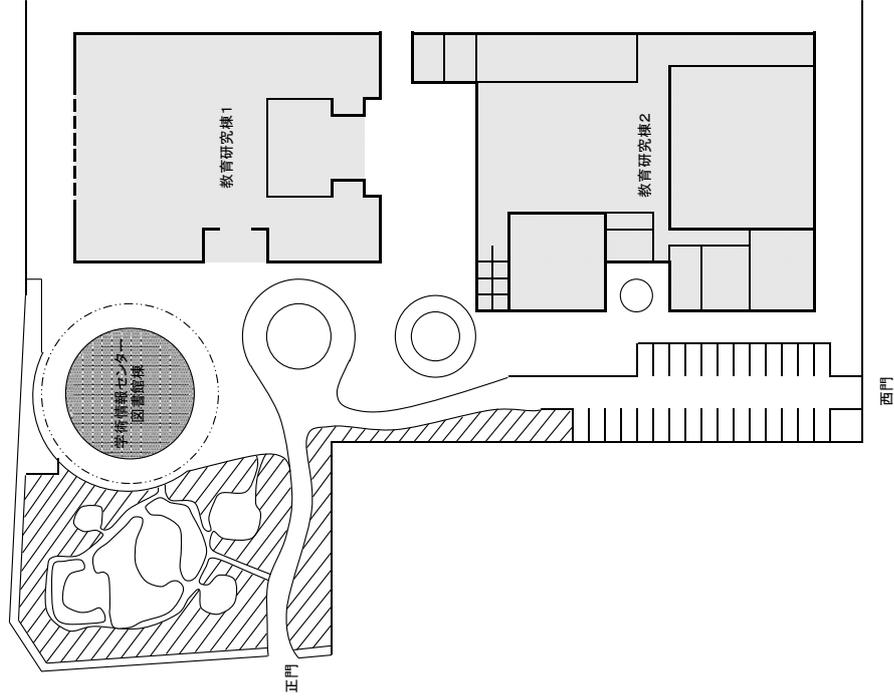
※17:18のバスで移動

担当一覧

スーパースタッフ	メンター	メンティー	個人メンタリングの部屋
北野	藤田	井上	1243
	永井	馬本	1245
	黒田	江本	1247
	山中	萩田	1249
	古山	丸山	2333

(敬称略)

広島キャンパス校舎配置図



ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

日程: 2015年8月24日(水)~8月26日(金)  
 場所: 県立広島大学広島キャンパス2317 講義室

運営メンバー:

所属	職名	氏名
看護学科	准教授	黒田寿美恵
看護学科	准教授	山中 道代
作業療法学科	准教授	古山千佳子
看護学科	講師	永井 庸央
生命科学科	助教	藤田 景子
作業療法学科	教授	吉川ひろみ
本部経営企画室	スタッフ	伊藤 俊

メンター: 6名

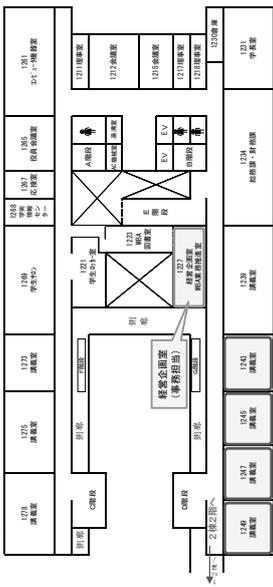
所属	職名	氏名
大阪府立大学工業高等専門学校	教授	北野 健一
看護学科	准教授	黒田寿美恵
看護学科	准教授	山中 道代
作業療法学科	准教授	古山千佳子
看護学科	講師	永井 庸央
生命科学科	助教	藤田 景子

メンティ(作成者): 5名

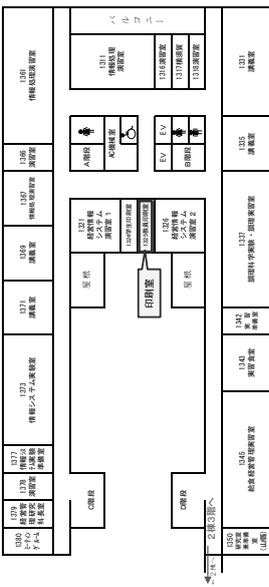
所属	職名	氏名
国際文化学科	教授	丸山 浩明
生命科学科(総合教育センター)	教授	馬本 勉
生命科学科	教授	萩田信二郎
看護学科	准教授	井上 誠
人間福祉学科	准教授	江本 純子

◆ 広島キャンパス教育研究棟1

2 階平面図

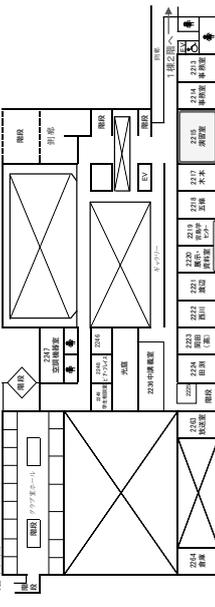


3 階平面図

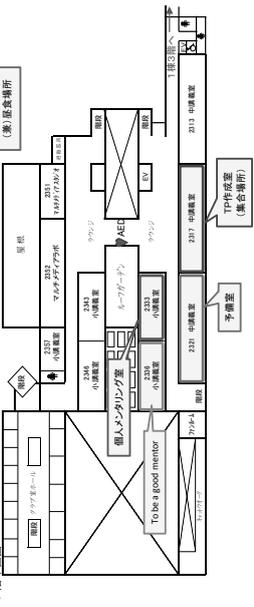


◆ 広島キャンパス教育研究棟2

2 階平面図



3 階平面図



AP事業 平成28年FDer養成プログラム



# ファカルティ・ディベロッパー (FDer) 養成講座



第2回 12月 9日(金)  
第3回 12月12日(月)  
第4回 12月21日(水)

【第2回】 12月9日(金) 14:40~17:00 <<主会場:三原キャンパス>>

テーマ『 ICEモデル アクティブラーニングの効果的なツール 』

【第1部】 講演 14:40~16:10

■講師 帝京大学 高等教育開発センター  
センター長・教授  
土持 ゲーリー 法一 先生

■会場 広島キャンパス 2143講義室  
庄原キャンパス 2302講義室  
三原キャンパス 1101講義室(遠隔発信)

【第2部】 意見交換会 16:20~17:00

■会場 三原キャンパス 4102会議室

【第3回】 12月12日(月) 14:40~16:10 <<主会場:広島キャンパス>>

テーマ『 ひととひとをつなげるルーブリック 』

■講師 暮らしき作陽大学 子ども教育学部  
准教授 芝崎 良典 先生

■会場 広島キャンパス 2313講義室(遠隔発信)  
庄原キャンパス 大講義室  
三原キャンパス 4103講義室

【第4回】 12月21日(水) 13:00~14:30 <<主会場:庄原キャンパス>>

テーマ『 学修成果の評価について 』

■講師 県立広島大学 生命環境学部  
教授 原田 浩幸 先生

■会場 広島キャンパス 2143講義室  
庄原キャンパス 大講義室(遠隔発信)  
三原キャンパス 1101講義室

担当・問い合わせ

本部経営企画室(担当:川口・伊藤俊)  
TEL 082-251-9727(内線 1223, 1228)  
E-Mail [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

県立広島大学  
Prefectural University of Hiroshima



## 第2回FDer養成講座 実施概要

1 日時 平成28年12月9日（金）14時40分～17時00分

〔 講 演：14時40分～16時10分 〕  
〔 意見交換会：16時20分～17時00分 〕

2 場所 三原キャンパス 1101大講義室（主会場・遠隔発信）

広島キャンパス 2143大講義室

庄原キャンパス 2302講義室

### 3 概要

(1) テーマ 「ICEモデル アクティブラーニングの効果的なツール」

(2) 講師 帝京大学 高等教育開発センター長／教授 土持 ゲーリー 法一 氏

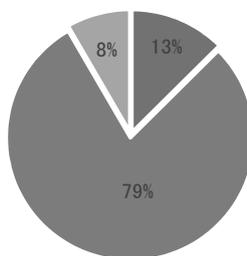
(3) 参加者 広島 8人，庄原 1人，三原 19人

### 4 アンケート集計結果

**問1** 本日の養成講座についての率直なご感想をお聞きます。該当する数字に○を付けてください。また、よろしければ理由もお聞かせください。

(1) この度の企画の全般（趣旨・構成等）について

項目	回答数	割合
大変参考になった	3	13%
参考になった	19	79%
どちらとも言えない	2	8%
参考にならなかった	0	0%
全く参考にならなかった	0	0%
合計	24	100%



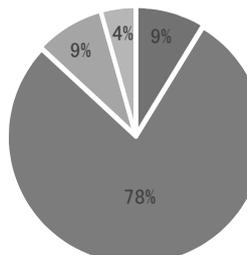
- 大変良かった
- 良かった
- どちらともいえない
- 良くなかった
- 全く良くなかった

#### 【理由】

- 継続した（シリーズ化）FDer 関連の話は有効だと思います。
- 講座はよかったが、参加者が少なかったのが残念だった。
- AL を洗練する上で必要と思われるテーマだった。
- 講演と実践報告の順序は逆の方が良かったと思われる。

(2) アクティブ・ラーニング実践例報告「多重課題に対応する思考過程とチームナーシングを学ぶ演習とシャドウイング実習の学修成果—学びの分析にICEモデルを活用して—」について

項目	回答数	割合
大変参考になった	2	9%
参考になった	18	78%
どちらとも言えない	2	9%
参考にならなかった	1	4%
全く参考にならなかった	0	0%
合計	23	100%



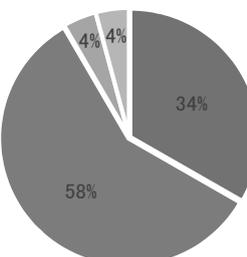
- 大変参考になった
- 参考になった
- どちらともいえない
- 参考にならなかった
- 全く参考にならなかった

#### 【理由】

- 自身にてらして何を得たいか／伝えられるか／得られたか？を改めて考えることができた。
- ICE モデルをまだよくわかっていなかったので土持先生の方が先が良かったかも・・・資料の字が小さくてわかりにくかった。
- 実習授業の進め方について参考になる所があった。
- 教育実習の評価に活かそうだと思います。

(3) 講演「ICEモデル アクティブラーニングの効果的なツール」について

項目	回答数	割合
大変参考になった	8	34%
参考になった	14	58%
どちらとも言えない	1	4%
参考にならなかった	1	4%
全く参考にならなかった	0	0%
合計	24	100%



- 大変参考になった
- 参考になった
- どちらともいえない
- 参考にならなかった
- 全く参考にならなかった

【理由】

- 学修者を中心に（する）・・・という（動詞）デザインについて/いま一度見直してみようと思った。
- わかりやすい講演だった。
- 1時間では時間が不十分で、独学が必要。
- 理念は納得できるが、ICEによるALの進め方についてイメージがわきにくかった。
- 欧米の学生と日本の学生との違いなどはほとんど考慮せず、教育方法の輸入は有効とは考えにくい。ゆとり教育のことを考えたら心配。
- 質問が大事だということが再確認できました。
- これまでのICEモデルの話の中で、ICEルーブリックの話などは最も面白かった。また、参考になった。

問2 本日の養成講座で得られたことや、今後活かしていきたいことをお書きください。

◆ 自由記述一覧

No.	記述
1	・単位数では図れないものはあるし、それを伝えて学生/教員共に得られるもの。 ・あと話術力？大社連携→これは求められていると思う。内容・質・記憶の充実。
2	看護実習はまさにアクティブラーニングになっていると再確認できた。
3	質問することの大切さがわかった。「動詞が全て」と云われたが、具体的にどう使うかがよくわからなかった。
4	ラーニング・ポートフォリオにICE動詞を使ったまとめをしてみたいと思った。実習後のレポートもICE動詞を使って書くことを導入してみたいと思った。将来的にはICEルーブリックを作りたい。
5	学生の記録をみる際に、ICEの視点を活用し、学生に学びが深まるようにフィードバックしていきたい。
6	大社連携
7	講義の全てをALにて実行しなくてよいというのは思いがけない発見だった。
8	○自分が行っている授業の中で、どのように展開できるのか考えつつ、聞かせていただきました。I・C・Eどこからはじめてもよい！高大連携でなく大社連携だということが印象的でした。
9	ideaのつながりを動詞で説明するという方法が新鮮でした。臨床実習の指導などに活かしてみたいと思います。
10	「知識と知識をつなげる」ということを意識した講義の改善に努めたい。
11	大社連携について ①日本の企業はそもそも大学の教育に期待していないと思う ②米国の大学数と違い、日本の大学数は多すぎ。学生を甘やかしてしまっており、社会から期待されていない。 ①②より困難ではないでしょうか？
12	クエスチョンの繰り返しで、学生に考えさせるという点は、今後、活用していきたいと思います。大変参考になりました。
13	年末をさけてほしい。卒論授業・修論授業で時間がとれない。
14	ICEモデルの使い方（有効性）を知ることができた。 初めてICEモデルを聞き、動詞が大事ということでしたが、関連性がわからなかったです。
15	質問を吟味して、より学修を深めるような授業をしたいと思いました。
16	やはり卒論等の研究室セミナーで活かしていく。

問3 今後のFDer養成講座で取り上げてほしいテーマや内容があればお書きください。

◆ 自由記述一覧

No.	記述
1	アクティブラーニングを可能とする教員養成に関することをやってほしい（教員教育です）。
2	各学部で行う内容が最終的に1つのストーリーとしてまとまる形になるように考えたらよいと思う。
3	数学・簿記等「答えが決まっている」領域の具体的なAL実践事例の紹介。
4	講義とアクティブラーニングを切りかえつつ、より効果を出す配分で授業ができればよいと思いました。そのためにアクティブラーニングの実践例を見たいと思います。
5	ワークショップを遠隔で行わない理由がわからない。以前もあったが・・・？学生には遠隔講義を受講させている？ 意見交換会？出席者の懇親会？土持先生は欠席？であれば不要。

### 第3回FDer養成講座 実施概要

1 日時 平成28年12月12日(月) 14時40分～16時10分

2 場所 広島キャンパス 2313大講義室(主会場・遠隔発信)  
庄原キャンパス 大講義室  
三原キャンパス 4103講義室

#### 3 概要

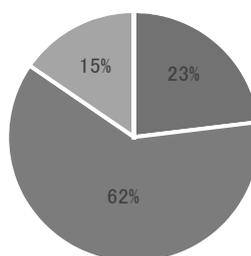
- (1) テーマ 「ひととひとをつなげるループリック」  
(2) 講師 くらしき作陽大学 子ども教育学部 准教授 芝崎 良典 氏  
(3) 参加者 広島 13人, 庄原 0人, 三原 3人

#### 4 アンケート集計結果

**問1** 本日の養成講座についての率直なご感想をお聞きます。該当する数字に○を付けてください。また、よろしければ理由もお書きください。

(1) この度の企画の全般(趣旨・構成等)について

項目	回答数	割合
大変参考になった	3	23%
参考になった	8	62%
どちらとも言えない	2	15%
参考にならなかった	0	0%
全く参考にならなかった	0	0%
合計	13	100%



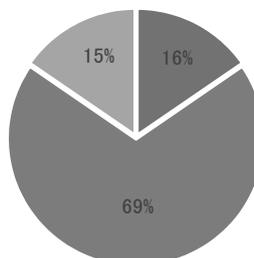
- 大変良かった
- 良かった
- どちらともいえない
- 良くなかった
- 全く良くなかった

##### 【理由】

- ループリックの作り方がわかった。

(2) 講演について

項目	回答数	割合
大変参考になった	2	16%
参考になった	9	69%
どちらとも言えない	2	15%
参考にならなかった	0	0%
全く参考にならなかった	0	0%
合計	13	100%



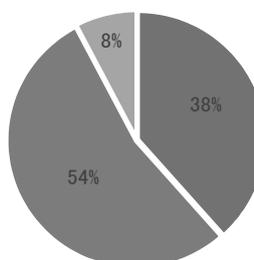
- 大変参考になった
- 参考になった
- どちらともいえない
- 参考にならなかった
- 全く参考にならなかった

##### 【理由】

- ループリック作成プロセスの説明が丁寧になされた。
- 色々な言葉をひろっていただき、丁寧な説明をしていただけました。ありがとうございました。
- 遅れて参加したため。

(3) ループリック作成について

項目	回答数	割合
大変参考になった	5	38%
参考になった	7	54%
どちらとも言えない	1	8%
参考にならなかった	0	0%
全く参考にならなかった	0	0%
合計	13	100%



- 大変参考になった
- 参考になった
- どちらともいえない
- 参考にならなかった
- 全く参考にならなかった

##### 【理由】

- (2) の理由と同様。
- 到達設定、減法
- 遅れて参加したため。

問2 本日の養成講座で得られたことや、今後活かしていきたいことをお書きください。

◆ 自由記述一覧

No.	記述
1	楽しかったです。しかし1項目ずつ作成するのは大変な作業だと感じました。
2	人と人をつなげる・・・他の教員と一緒に教育について考えていくことの大切さがわかった。
3	卒論等では使えそうだが、講義（大人数）では難しそうな印象を受けた。
4	評価の指標を明確にすることは、授業評価等を行う時必要だと思いました。
5	ルーブリックの作り方で参考にさせていただきたいと思います。
6	すでに実施している庄原Cの卒論評価ルーブリックと比較してみたい。

問3 今後のFDer 養成講座で取り上げてほしいテーマや内容があればお書きください。

回答なし

## 第4回FDer養成講座 実施概要

- 1 日時 平成28年12月21日(水) 13時00分～14時30分  
 2 場所 広島キャンパス 2143大講義室  
 庄原キャンパス 大講義室(主会場・遠隔発信)  
 三原キャンパス 1101大講義室

### 3 概要

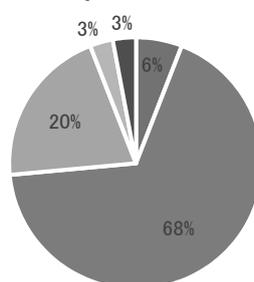
- (1) テーマ 「学修成果の評価について」  
 (2) 講師 県立広島大学 生命環境学部 教授 原田 浩幸 氏  
 (3) 参加者 広島 17人, 庄原 11人, 三原 11人

### 4 アンケート集計結果

**問1** 本日の養成講座についての率直なご感想をお聞きます。該当する数字に○を付けてください。また、よろしければ理由等をお書きください。

- (1) この度の企画の全般(趣旨・構成等)について

項目	回答数	割合
大変参考になった	2	6%
参考になった	23	68%
どちらとも言えない	7	20%
参考になった	1	3%
全く参考にならなかった	1	3%
合計	34	100%



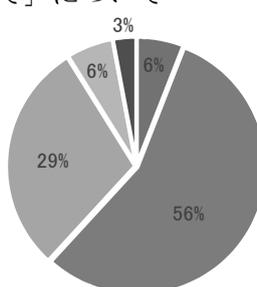
- 大変良かった
- 良かった
- どちらともいえない
- 良くなかった
- 全く良くなかった

#### 【理由】

- 「評価」というものを再考できた。また、参考になった。
- 総じてよかったが、何をどう活かしあってよいのかよくわからなかった。それぞれリーダーがおられ、それなりに来てよかった。
- 学修の評価方法に関する講演は趣旨としていいと思ったが、結局ループリックの話だったから、グループワークがやりにくかった。大講義室ではやりにくいです。
- 全ての講義等に適用することは困難。  
作業を実際にする時間が十分にとってあったから。
- プレゼン内の一部資料が手元になかったため、振り返って構成を理解するのが難しかった。
- 『問題解決型』PBLとして、テーマをよりしぼらないと、個々の専門的な「問題のシナリオ」を提示されてもよく理解できない部分がある。
- キャンパス内の意欲ある教員が議論を熱心に行った。

- (2) 講演・ワーク「学修成果の評価について」について

項目	回答数	割合
大変参考になった	2	6%
参考になった	19	56%
どちらとも言えない	10	29%
参考になった	2	6%
全く参考にならなかった	1	3%
合計	34	100%



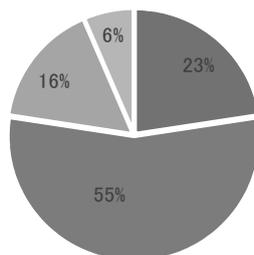
- 大変参考になった
- 参考になった
- どちらともいえない
- 参考にならなかった
- 全く参考にならなかった

#### 【理由】

- 「評価」というものを再考できた。また、参考になった。
- ループリックについて具体例があればより理解できた。
- 話があちこちにとんでいる気がして、理解できなかった。
- レベルの格差をどのように反映させるのが困難。
- 学習・教育到達目標の作り方が示されていたから。
- 先生方とのワークショップはおもしろかった。
- ループリック/事例/LEVEL1→LEVEL0? LEVEL2/3/4/5 の区分のコンセプトがないように思われた。区分のコンセプトを示すべきだった。
- “時間が短くて、うまくまとまらなかった。
- 事前に通知していただければ・・・”
- 専門がバラバラなのでワークがうまく進まなかった。学科に属していない者は不利。
- 評価の仕方もしっかり考えなくてはいけないと感じた。

(3) 『学修成果の評価』について、日頃問題点を感じておられますか。また、今回のワークで気づかれた点をお書きください。

項目	回答数	割合
大変参考になった	7	23%
参考になった	17	55%
どちらとも言えない	5	16%
参考にならなかった	2	6%
全く参考にならなかった	0	0%
合計	31	100%



- 大変参考になった
- 参考になった
- どちらとも言えない
- 参考にならなかった
- 全く参考にならなかった

**【理由】**

- やはり、学生と教員／学生間の相互の気づきやフィードバックについてはどうするのか？考えます。
- レポートの評価方法。
- 質問に来るが、テストができない学生の評価が難しい。
- これで良いのか、何が正解か、という疑問が常にある。
- 必修の授業をしていて、まったく関心がない人がかなりいること。
- 卒論や講義のグループ発表をどう評価するか。
- “PBL＝アクティブラーニングではないと思う。ゆっくり本を読み講義を聞いて、知識をたくわえ、新しいアイデアを出せるバックグラウンド能力を養う力も大切である。
- PBL+ルーブリックで何でもアクティブラーニングの問題を解決しようとする雰囲気は出しすぎてほしくない。”
- 知識と技術 vs 意欲・主体性・協働性の部分をどう結びつけるか？
- しっかり学生に見える化しなくてはいけないと感じました。

**問2** 本日の養成講座で得られたことや、今後活かしていきたいことをお書きください

◆ 自由記述一覧

No.	記述
1	フィールド科学講義や食品資源科学実験等で AL がかなり取り入れられている。実際に取り入れて実施する側であるが、学生の反応もよく、理解が高まっていることも実感している。
2	評価方法のルーブリックを作成したことがなかったので、作成して、利用しようと思う（プレゼン発表とかに）
3	再履修者を減らすためにはルーブリックが必要かもと感じた。
4	評価することの難しさの再確認。
5	行動特性について、まず考えてみる
6	ルーブリックの具体的な書き方が理解できました。
7	ルーブリックの作成と実践
8	ルーブリックを簡単にでも作成してみたい。
9	部分的に活かせるのがあった。
10	研修会の意図がよく理解できない点があった。
11	見えないところの評価に見えるようにする（ルーブリック）方法を考えていきたい。

**問3** 今後の FDer 養成講座で取り上げてほしいテーマや内容があればお書きください。

◆ 自由記述一覧

No.	記述
1	実際、学生からの評価の高い（学修効果が高い）授業を受講してみたい。 アクティブラーニングの失敗事例。
2	学生のやる気の引き出し方、持たせ方等をアクティブラーニングを通じて。
3	入学者の学力格差、リメディアル教育の実践法。

## (4) 学修支援アドバイザーの養成

平成 28 年度前期は、前年度末に養成講座を受講した学修支援アドバイザーによる、ラーニング・コモンズにおける学修支援を開始した。後期に入ってから、授業担当教員の求めに応じて授業内外で学修支援を行う授業支援を開始した。

学修支援アドバイザーには、他の学生の支援を通じて自ら学ぶ喜びを感じ、自身が一番のアクティブ・ラーナーであって欲しいことを養成講座で伝えている。自薦・他薦で集まったアドバイザー学生には、先頭に立ってアクティブ・ラーナーになろうとする熱意が感じられる。その熱意に見合う活動の場が与えられているかという点、現状ではまだまだ不十分である。彼らが先頭を走るアクティブ・ラーナーとして輝くために、FDer や事務職員の果たす役割も大きい。教職学の協働が一層重要となるだろう。

### 資料

- (4)－1 学修支援アドバイザーの概要
- (4)－2 学修支援アドバイザー養成講座資料

## 学修支援アドバイザーの養成について

### (1) 学修支援アドバイザーの養成

#### 【平成27年度募集】

- 募集期間 平成28年1月～3月
- 研修実施 平成28年3月24日(木) (※不参加の学生には、後日研修を実施)
- 養成人数 29名

#### 【平成28年度募集】

- 募集期間 平成28年10月～11月
- 研修実施 平成28年1月から2月にかけてキャンパス毎に実施
- 養成人数 13名

### (2) ラーニングcommonsにおける学修支援活動

#### 【業務内容】

アドバイザーの役割	具体的な活動内容
① 所定の日時にラーニングcommonsに待機し、学生の学修相談に応じる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>■各曜日の決まった時間に、アドバイザー学生がラーニングcommonsに待機し、学修相談等の窓口となる。</li> <li>■学生は、事前調整の上、シフトを決定する。</li> </ul>
② 文献検索や課題作成、PC等機器の操作について支援を行う。	
③ 自身が得意とする教科の学習指導(リメディアル教育)を行う。	
④ 学修支援や学習指導を内容とする学内イベントを企画・実施する。(図書館主催のイベントを含む。)	■企画するイベント(図書館が実施するものを含む)について、実施及び運営を行う。

#### 【活動状況】 期間：平成28年7月～平成29年1月

キャンパス	活動人数	活動時間(延べ)	利用人数(延べ)	業務内容
広島	8人	47.5時間	28人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期試験対策相談会</li> <li>・個別学修相談</li> <li>・図書館運営補助</li> </ul>
庄原	3人	112時間	109人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別学修相談会(試験期間期間)</li> <li>・個別学修相談会(毎週金曜2限)</li> </ul>
三原	5人	62.5時間	43人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別学修相談(予約・常駐)</li> <li>・図書館運営補助</li> </ul>

### (3) 授業等における学修支援活動

#### 【業務内容】

	アドバイザーの役割	具体的な活動内容
授業支援に係る活動	① 担当教員の指示を受けて、事前学修を含む授業外学修のサポートや、授業(演習、実験及び実習を含む)内での授業運営支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>■授業内外で実施するアクティブ・ラーニングをサポートし、その活性化に資する。</li> <li>例1:授業内のグループ討議のファシリテーション</li> <li>例2:授業外においてグループ発表準備の支援</li> </ul>
その他の活動	② 授業計画の策定の際に、教員の求めに応じて、授業改善に資する意見を述べる。	■FDerとともに、授業改善に向けた協議・提言を行う。

	③ 他者を支援・指導する立場として、知識・見識を広めるための努力をする。	■学内で実施する研修会への積極参加や、学修支援アドバイザー養成研修の運営に携わる。
--	--------------------------------------	---

【活動状況】 期間：平成28年11月～平成29年2月

	日時	科目名及び活動内容	活動人数	活動時間 (延べ)
1	平成28年 11月6日(日)	科目名：「 <u>地域の理解</u> 」 活動内容： ・フィールドワークにおける学生への助言 及び質問対応、	1人	3時間
2	平成29年 1月26日(木)	科目名：「 <u>英語Ⅱ</u> 」「 <u>英語Ⅳ</u> 」 活動内容： ・授業外における学生への助言及びからの 質問対応	1人	1時間
3	平成29年 2月7日(火)	科目名：「 <u>地域の理解</u> 」 活動内容： ・合同発表会の運営補助 ・合同発表会のポスターセッションにおけ る学生への助言	3人	16.5時間

#### (4) その他活動

【業務内容】 フォーラム参加

## 学修支援アドバイザーの概要

### 1 学修支援アドバイザーの定義

授業内外において本学学生への学修支援を行う学生であり、他者の学びを支援すること等を通じて、自身が学ぶ喜びを感じ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを目指す者。

### 2 学修支援アドバイザーの役割

- ① 所定の日時にラーニングコモンズに待機し、学生の学修相談に応じる。
- ② 文献検索や課題作成、PC等機器の操作について支援を行う。
- ③ 自身が得意とする教科の学習指導（リメディアル教育）を行う。
- ④ 学修支援や学習指導を内容とする学内イベントを企画・実施する。
- ⑤ 担当教員の指示を受けて、事前学修を含む授業外学修のサポートや、授業（演習、実験及び実習を含む）内での授業運営支援を行う。
- ⑥ 授業計画の策定の際に、教員の求めに応じて、授業改善に資する意見を述べる。
- ⑦ 他者を支援・指導する立場として、知識・見識を広めるための努力をする。

### 3 役割ごとの活動場所

	学修相談・学習指導に係る活動	授業支援に係る活動	その他
役割	① ② ③ ④	⑤ ⑥	⑦
活動場所	ラーニングコモンズ（図書館）	講義室等	学内外

### 4 活動内容（例）

学修相談 学習指導	①	・ラーニングコモンズに待機し、学修の悩みについて相談を受ける。
	②	・希望学生に対して、文献・資料の検索や、レポートの作成を支援する。 ・PCや電子黒板を使用する際に、操作を補助する。
	③	・希望学生に対して、高校の内容を中心とした教科学習の指導をずる。
	④	・学生を対象に、資料検索やレポート作成についての講習会等を開催する。
授業支援	⑤	・授業外において、事前課題の作成をサポートする。 ・授業内において、グループ討議のファシリテーションをする。
	⑥	・授業期間終了後、受講者の視点から、授業への要望を教員に伝える。
その他	⑦	・学内外で行われる講座やセミナーに積極参加する。 (参加に係る費用は、上限を設けた上でAP予算において負担する。)

### 5 雇用条件

時給：916円

任期：卒業（大学院生の場合は修了）するまで継続可

平成28年度  
学修支援アドバイザー  
養成講座

AP事業推進部会

1

本日の養成講座の狙い

- 学修支援アドバイザーに期待されていることを理解する
- アドバイスする上での心構え、準備すべきことを理解する

2

県立広島大学 人材育成目標

- 県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。

県大型アクティブ・ラーニング

4

平成26年度「大学教育再生加速プログラム（AP）」選定取組  
Acceleration Program for University Education Rebuilding

テーマⅠ  
(アクティブ・ラーニング)

県立広島大学型アクティブ・ラーニング  
Campus Linkage Active Learning  
CLAL(ケラル)

5

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」選定取組

大学名：県立広島大学  
テーマ：テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）

取組概要：地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かす深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学習者（アクティブ・ラーナー）の育成を目指す。

県立広島大学型 アクティブ・ラーニング Campus linkage Active Learning

学生の主体性を育む能動的学修

行動型学修：フィールドワーク・現地体験・実地調査等  
参加型学修：グループワーク・ディスカッション・ディベート・PBL・TBL 反転授業 等

課題解決型学修、対話を重視した学修の積極的導入  
知的能動性を揺り動かす、深い学びを喚起する  
自ら考え、課題に取り組み、解決に向けて行動する  
生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成

6

取組概要

地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かす深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学習者（アクティブ・ラーナー）の育成を目指す。

7

SP00フォーラム2015 ポスターセッション  
行動型、参加型アクティブ・ラーニングとFD、SD

代表発表者：県立広島大学 総合教育センター 馬本 聡  
共同発表者：県立広島大学 本部教育学課 山口博之、渡田 輝、伊藤 俊

1 県立広島大学について

- 県立広島大学は2008年に、広島県内の3つの県立大学が統合し開学。
- 広島市、庄原市、三原市の3キャンパスに加え、2013年にはさらなる4キャンパスを開設し、10キャンパスに拡大した。県立に特化した大学を目指す。
- これまで県立広島大学は「産学連携推進プラン」や「学修支援教育の推進」といった、学生が主体的に学ぶための取組を進めてきた。
- 一方で、学生の授業外での学びが促進される「行動型学修」や、新たな課題解決の取組、導入により学生の知的能動性を揺り動かす「参加型学修」を推進している。

2 行動型、参加型アクティブ・ラーニングの推進

- 本学は平成26年度、文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」事業の「テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）」に採択され、学生の主体的な学びを促す能動的学修の取組を推進している。
- 本学が推進する県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning: CLAL）は、広島県全県民を一堂に集めて、学修者への学びが促進される「行動型学修」や、新たな課題解決の取組、導入により学生の知的能動性を揺り動かす「参加型学修」を推進している。
- この2つのALを推進することで、キャンパスの枠を超え、知的能動性が高まった新たな学びの形を展開していく。

8

### 3 CLALの実質化を加速するFD,SD

- 平成28年度に実施したAL導入状況に関する学内調査<sup>※2</sup>では、既に27科目の授業で導入済みと、把握が得られた。
- 一方で、ALにより学生の自律性を高め、授業外学習時間の増加へとつなげるには、ALの更なる質の向上が必要である。
- AP事業を通じて、本学が実施できるFD、SDを更に発展させ、CLALの実質化を加速させていく。

**FDの役割** ファカルティ・ディベロッパー (FDer) の養成  
 FDerの役割は、授業実践、その成長・発展に際して、教員には、アクティブラーニングの推進から学習者の学びのサポートまで、様々な役割を担う必要がある。  
 【養成対象】各学系各年級、全学での導入  
 【養成方法】3つのプログラムを相補的に実施する  
 ①門外漢(42)による指導(42) → 2023年度

**FDの養成** 学修アドバイザー養成に係る教員協働  
 学修アドバイザー養成  
 学修アドバイザーは、学生との学修支援の役割を担い、自らも積極的に学ぶ。また、キャンパス内での授業実践や、コンテストなど、形勢に応じた実践を実施する。  
 学修アドバイザー養成に係る教員協働  
 教員と協働して、学修アドバイザーの養成や、アクティブラーニングの推進や、授業実践の推進を図る。また、学修アドバイザーの養成や、アクティブラーニングの推進や、授業実践の推進を図る。

**FDの養成** 先進事例調査・研修参加の促進と学内フィードバック  
 ①FDや授業実践に係る先進事例調査や、研修参加の促進を図る。学内に伝達する。②FDや授業実践に係る先進事例調査や、研修参加の促進を図る。学内に伝達する。  
 【学内フィードバック】教員・学生の研修や、FD養成等を通じて、学内・外部を連携する。教員・学生の研修や、FD養成等を通じて、学内・外部を連携する。

### 4 FD,SDの課題：全学的な共有へ

CLALの推進に係る本学のFD、SDについて、次の点に課題として挙げられる。

- (1) FDの課題…ALの導入状況やFD推進の意識について、学部・学科間で差がみられる。全学的なつながり(Campus Linkage)を図るための共有が必要である。学内でFDを推進する意義、目的を強く共有し、各学系を回っていくことが、効果的なALの導入につながると考えられる。
- (2) SDの課題…各学系等で導入されたALに関する情報やノウハウを教務局内で共有する機会について、現状では本学教務局で行うフィードバック研修での報告に限られる。全学的な教員研修との連携等により、先進的な情報も共有していく必要がある。

## CLAL推進:3つの柱

- 参加型、行動型学修によるAL推進
  - 100%の学生が受講(平成29年度)
- ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成
  - 30名(平成29年度)
- 学修支援アドバイザーの養成
  - 55名(平成29年度)

10

## 平成27年度 CLAL導入状況

### 問1 CLALの導入率①(n=823)

(回答があった科目のうち、CLALを導入している科目の割合)

導入科目 27.7%  
未導入科目 72.3%

## CLAL導入手法

### 問2 導入手法(複数回答)

フィールドワーク	42
体験学修	38
他キャンパスの教員による	10
その他行動型学修	04
ミニッツペーパー	173
振り返り	201
プレゼンテーション	252
グループワーク	348
ディスカッション	274
ディベート	37
ワークショップ	41
PBL	72
TBL	71
双方向授業	117
反転授業	30
その他の参加型手法	224

12

## 教員意識調査より

### 問2 [ア] アクティブ・ラーニングの効果

学修内容の理解度が上がった	92	48	3
授業への参加が積極的になった	100	30	6
質問が増えた	63	60	16
授業外の学修時間が増えた	60	62	19
レポート等、課題の質が向上した	45	56	13
遅刻・早退・欠席が減った	41	75	20
私語が減った	55	65	14
居眠りが減った	33	46	8

■1 そう思う ■2 どちらともいえない ■3 そう思わない

13

## グループワーク①

- 自己紹介(3つの数字)
- 好きなこと、得意なこと

14

## 学修支援アドバイザーとは

- 授業内外において本学学生への学修支援を行う学生であり、
- 他者の学びを支援すること等を通じて、自身が学ぶ喜びを感じ、
- 生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを目指す者。

15

## 資料

- 『平成27年度学生便覧』
- 『平成26年度学生による授業評価報告書』
- 『大学基礎セミナー:「大学生の学び」のためのハンドブック』
- 『平成27年度新入生意識調査集計結果』より
- 「AP事業推進部会ニュース」No.1, No.2

16

## グループワーク②

- 好きなこと、得意なことを、  
教えられるようになるには、何が必要？

17

## 学修支援アドバイザーの役割

- ①所定の日時にラーニングコモンズに待機し、  
学生の学修相談に応じる。
- ②文献検索や課題作成、PC等機器の操作  
について支援を行う。
- ③自身が得意とする教科の学習指導(リメデ  
ィアル教育)を行う。
- ④学修支援や学習指導を内容とする学内イ  
ベントを企画・実施する。

18

## 学修支援アドバイザーの役割

- ⑤担当教員の指示を受けて、事前学修を含  
む授業外学修のサポートや、授業(演習、実  
験及び実習を含む)内での授業運営支援を  
行う。
- ⑥授業計画の策定の際に、教員の求めに応  
じて、授業改善に資する意見を述べる。
- ⑦他者を支援・指導する立場として、知識・見  
識を広めるための努力をする。

19

## グループワーク③

- アドバイスされる側になってみよう  
資料を見て、自分の大学生活を振り返る  
どんなことを尋ねたい？

20

## グループワーク④

- 人の「尋ねたいこと」に
- 答えてみよう
  
- 答え方で心掛けたいことは？

21

## 対応法

- 即答できる？
  
- つなぐ
  
- 準備する

22

## 基本姿勢

- 受容的態度
  
- 相手の目線で考える

23

## 注意事項

- 相談相手の情報を漏らさない
  
- 相手を傷つける発言をしない
  
- 個人情報の交換をしない

24

## 始動へ向けて

- 書類のお願い
- ラーニングコモンズでの登録について
  
- 継続的な研修
- 学修支援アドバイザー間の連絡体制

## 振り返りのプレゼンテーション

- 今日の講座を通じて分かったこと  
(気づいたこと, 理解したこと)
  
- 今後, 必要だと思うこと

## (5) 高大接続改革の推進

申請時の事業期間 4 年間から 6 年間へと延長されたことに伴い、新たな方向性として「高大接続」の強化を掲げた。広島県においては、本学の AP 事業選定と時を同じくして、広島版「学びの変革」アクション・プランが策定されており、変化の激しい社会を生き抜くことができる資質・能力（コンピテンシー）、殊に「学び続ける力」の育成を狙った中等教育の取組が続けられている。これは、「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成」を掲げる本学と方向性を一にする。育成すべき人材像を共有するそれぞれの取組は、強固な連携によって、相乗的な効果をもたらすだろう。この具体化の一步として、平成 28 年度は広島県教育委員会における「学びの変革」の取組事例を学び、意見交換を行った。さらに、本学を会場に、広島県高等学校教育研究・実践合同発表会を共催した。発表会への参画は、学科等の組織的な取組を振り返る絶好の機会となった。高等学校の実践からどう学び、それを大学の教育改革にどう反映させていくか。本学ならではの「高大接続」を実現する鍵となるだろう。

### 資料

- (5)－1 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会 実施概要
- (5)－2 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会 チラシ
- (5)－3 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会 資料
- (5)－4 平成 28 年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 開催概要
- (5)－5 平成 28 年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 チラシ
- (5)－6 分科会 本学発表ポスター（11 学科・総合教育センター）

## 高大接続改革の推進について

### (1) 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会

#### 【第1部】広島県の学びの変革に係る説明会

- 日時 平成28年11月21日(月) 13:00～14:30
- 場所 広島キャンパス 2313講義室(遠隔発信)  
庄原キャンパス 2302講義室  
三原キャンパス 1101講義室

#### 【第2部】広島県教育委員会との意見交換会

- 日時 平成28年11月21日(月) 14:40～16:10
- 場所 広島キャンパス 1275講義室

### (2) 平成28年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会

#### 【開催概要】

- 日時 平成29年1月27日(金)  
開会行事・全体会 9:30～12:00  
分科会(ポスターセッション) 13:00～16:00 ※本学発表  
まとめ・閉会行事 16:10～16:30
- 場所 広島キャンパス大講義室 ほか

#### 【本学実践事例発表内容】(全体会)

- 講演者 学長補佐 馬本 勉
- テーマ 「県立広島大学における教育改革の取組について」

#### 【本学ポスター発表内容】(分科会)

	所属	発表者	発表タイトル
1	人間文化学部 国際文化学科	秋山伸隆, 柳川順子	国際文化学科の教育改革
2	人間文化学部 健康科学科	山岡雅子, 岡田玄也, 神田雅子, 鍛島秀明, 杉山寿美, 谷本昌太, 馬淵良太, 山縣誉志江	健康科学科における学生の主体的な学び
3	経営情報学部 経営学科	和田崇, 村上恵子	学外実習型専門演習による研究力・実践力向上の取り組み
4	経営情報学部 経営情報学科	市村匠, 重安哲也, 竹本康彦, 広谷大助	スマートタブレットによる能動的授業の実施とその効果の検証
5	生命環境学部 生命科学科	荻田信二郎	生命科学分野の教育—研究の深化を目指した講義事例
6	生命環境学部 環境科学科	小林謙介	環境科学科におけるキャリア分析に基づく課題抽出とその改善の取組
7	保健福祉学部 看護学科	岡田麻里	患者中心の看護と多重課題へ対応するチームナーシングを学ぶ演習と実習の学修成果
8	保健福祉学部 理学療法学科	田中聡	理学療法士の臨床をイメージさせる初年度教育の取り組み
9	保健福祉学部 作業療法学科	吉川ひろみ, 古山千佳子, 高木雅之, 永吉美香	作業療法士教育におけるプレイバックシアターの活用
10	保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	細川淳嗣	言語聴覚士養成教育での症例に基づいた演習へのTeam Based Learning (TBL)導入の効果
11	保健福祉学部 人間福祉学科	金子努	地域活動を通じたアクティブラーニング
12	総合教育センター 全学共通教育部門	五條小枝子, 馬本勉	全学共通教育の改革と「広島と世界」:参加型・行動型アクティブラーニングの実践を中心に

## 広島県の学びの変革に係る説明・意見交換会 実施概要

### 1 実施日時等

日 時：平成28年11月21日（月）13：00～16：10

内 容：【第1部】広島県の学びの変革に係る説明会

教育研究棟2 2313講義室（遠隔配信：庄原C 2302講義室，三原C 1101講義室）

【第2部】広島県教育委員会（高等学校教員）との意見交換会

教育研究棟1 1275講義室

### 2 参加者数

【第1部】広島県の学びの変革に係る説明会

区分	教員	職員	その他	県教委	計
広島キャンパス会場	30	13	1	5	49
庄原キャンパス会場	13	2	—	—	15
三原キャンパス会場	34	2	—	—	36
合 計	77	17	1	5	100

【第2部】広島県教育委員会との意見交換会

区分	教員	職員	その他	県教委	計
広島キャンパス会場	8	5	1	5	19

### 3 参加者の主な意見・感想等（第1部参加者アンケートより抜粋）

- 「学習過程の質的改善」という言葉に元気が出ました。アクティブ・ラーニングを行う上での悩みに光が見えました。
- 広島県の取組概要がよくわかった。教育内容や教育方法の転換には時間がかかる。入試改革を含めてあきらめずに推進するしかないが、課題山積の感が強い
- 留学により生徒はどんな力がついたのか（更に知りたい）。
- 県の取組は本学の事業推進に重要となってくるので、大学に関連のある内容は基本的に詳しく知っておきたい。県が高校生に主体的な学びの取組を行っているので、大学もこれを受けた取組を推進し、県内の優秀な学生を獲得することが大切だと感じた。
- 県立高校には上位校と下位校で大きな学力差がある。これは学力差だけでなく、モチベーションの差も大きいと考えられる。これらを一括りに同じ方向性の取組で解決できるのか、疑問であると考え。アクションプランについて）考え方はゆとり教育と同じと見えるが、何がちがうのか比較してほしい。高校生が留学をする意義は理解できるが、県が行う事業での具体的な成果はなんなのか、本人のアンケートだけでなく、もっと客観的な評価が必要なのではないか。
- （アクションプランについて）そのような取組がなされていたことを知らなかった。生徒主体で進めると授業の進度が遅くならないか、指導要領や大学入試の出題範囲をカバーできるのか（更に知りたい）。大学の場合は、自由に授業内容を選択できるが…。本学に入学してきている学生が高校で実際にどのような（スタイルの）授業を受けてきているのか知りたいと思います。年々、「講義スタイル」に耐えられない学生が増えてきているような気がしていて、それはなぜだろうかと考えています。
- 高大接続に関し、高校の先生方の方向性がわかり大変参考になりました。定期的に情報を交換していただきたいです。（今後は）高校時の（論立てに関わる）学習履歴を重視し、大学としてのゴールとの接続を高校生に示していく必要があると思います。高校の先生方、教育委員会の方々とこまめな話し合いの機会があると良いと思います。

- 県内高校での授業取組・変革についての現状が分かり大変参考になった。高校教育における現在の取り組み方が具体例で示され、良く理解できた。グループワーキングが効果的であるのは理解できるが、一人ひとりの評価をどのように行っているか（更に知りたい）。（今後は）高大連携事業の中で、大学授業を高校生が学んで経験する場があるが、その際にも自らが考え学ぶという工夫を入れていかなければいけないと感じた。
- 高校の取組を知ることで、高校生が受けている授業が想像できた。（アクションプランについて）理念は理解できたが、具体的な部分がかみにくかった。
- 高校も生徒の資質向上について様々な取り組みをされていることがよくわかりました。（アクションプランについて）既知のことではあったが、ここまで発展してきていることは驚きました。
- 以前の職場ではSSHの学生が研究したいテーマを考え、それを持ち込んで研究を進めるということを受け入れていたので、負担にならない範囲でそのようなことを行ってもよいかと思います。
- 今後も中学高校での教育手法の取組については、定期的に情報交換が必要かと思います。
- 学びの変革の話題は大変参考になりました。一方、このような取組が全県の教員の授業で行われるためにはどのような課題があり、どのようにそれぞれについて解決していけばよいのか、考えさせられました。
- 高校教員と一緒に研修を受ける機会があるとよい。
- 海外留学の効果をどう計るかが難しそうに思った。
- 変革に対する事例もあり参考になった。能動学修を行った際、講義の進み方は以前と同じか？実体験では時間がかかると思う。
- （留学促進の取組について）各事業や活動のねらいがどのように達成されたのか知れるとよいと思った。実施内容・件数だけでなく、その成果がわかるとよいと思った。
- 本学に来る学生が高校時代どうだったのか、何が目指されていたのか等知る良い機会でした。広島県での取組が良くわかりました。
- 高校側の取組がわかったことはよかった。ただ、大学側への要望はよくわからなかった。留学促進の取組と高大連携の関係がよくわからなかった。高校側はどのような大学入試を求めているか、どういう形態の入試であれば高校で育成した能力が正しく評価されると考えているか、学びの変革をしていく中で基礎的な知識・技能はどのように育成しようとしているか（更に知りたい）。
- 在学生の中には、県内出身学生も多数おり、学生がどのような学びを受けてきているか知ることができた。また今後も知識のみならず自己探求・表現できる生徒達が入学してくれるであろうことが期待できる内容でもあった。大学側も授業改善に取り組んでいる。更に深めて考えたいと思った。グローバル人材育成のために、県でも様々な取組がされていることを知ることができた。多様な経験を積んでいる生徒さんに入学していただけるとありがたいです。本日は高校での話が中心となりましたが、お話の中で触れられているように、幼小中での学びも変革がされていくのだと思いますが、ぜひそのような話も聞きたいです。

# 広島県の学びの 変革に係る 説明・意見交換会

日時

平成28年11月21日(月)  
13:00~16:10 [2部構成]

対象

本学教職員

会場

広島キャンパス 2313講義室(第1部)・1275講義室(第2部)  
庄原キャンパス 2302講義室(第1部のみ・遠隔受信)  
三原キャンパス 1101大講義室(第1部のみ・遠隔受信)

※庄原及び三原キャンパス所属の方で、広島キャンパスでの意見交換会に出席を希望される場合は、事前に担当までご相談ください。出席に係る移動費を本部AP予算から支出します。

【第1部】 13:00 ~ 14:30

## 広島県の学びの変革に係る説明会

### ① 広島県版「学びの変革」アクション・プラン説明

講師:広島県教育委員会高校教育指導課長  
吉村 薫 氏

### ② 広島県における留学促進の取組説明

講師:広島県教育委員会学びの変革推進課



【第2部】 14:40 ~ 16:10

## 広島県教育委員会との意見交換会

### 広島県教育委員会担当者(高等学校教員)と 本学教職員による意見・情報交換

参加者:広島県教育委員会  
高校教育指導課・学びの変革推進課 5名



担当・問い合わせ

本部経営企画室 川口・伊藤(俊)  
TEL 082-251-9727 (内線 1223・1228)  
E-Mail [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)



県立広島大学  
Prefectural University of Hiroshima

## 平成28年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 開催概要

### 1 発表会の概要

日時：平成29年1月27日（金） 9：30～16：30

場所：県立広島大学 広島キャンパス

午前／全体会：2143大講義室

遠隔配信（庄原キャンパス大講義室，三原キャンパス1101大講義室）

午後／分科会（個別発表）：1275，1278，2346，2357講義室

内容：当日のプログラムは以下のとおり

時刻	内容	登壇者・発表者等	備考
9:30 ～ 9:50	開会行事	諸藤教育部長，中村学長	開会の辞
9:55 ～ 10:35	【県大】実践事例発表	馬本学長補佐	プレゼンテーション
10:45 ～ 11:55	【県教委】授業DVD観察及び協議	助迫指導主事他	プレゼンテーション
13:00 ～ 13:40	【県大】分科会ポスターセッション	各学科・総合教育C	15分×2回
13:50 ～ 16:00	【高校等】分科会ポスターセッション	高等学校等39グループ	国公立私立高校等
16:10 ～ 16:30	閉会行事	西本副学長，吉村課長	講評・閉会の辞

#### (1) 全体会

##### ①実践事例報告（大学）

演題：「県立広島大学における教育改革の取組について」

報告者：馬本学長補佐・AP事業推進部会長

##### ②実践事例報告（県教委）

内容：授業DVD観察及び協議（地理歴史科・理科）

進行：助迫指導主事（広島県教育委員会事務局 教育部 高校教育指導課）

#### (2) 分科会

➤ 4会場に分かれてのポスター発表

➤ 各会場に大学（11学科及び総合教育センター全学共通教育）・高等学校双方のポスターを掲示，同一内容を2回ずつ発表する形式のポスターセッションを実施

##### ①大 学

発表者：各学科（11学科）及び総合教育センター（全学共通教育部門）

発表内容：各学科及び全学共通教育の組織的な取組の紹介

（例：特徴的な授業実践事例を含む教育プログラムについて）

##### ②高等学校等

国公立私立高等学校及び教育研究会が39事例を紹介

発表者：国立高校（2校），県立高校（32校），私立高校（2校），研究会（3件）

発表内容：課題発見・解決学習推進プロジェクト等による教育実践事例報告

### 2 参加者等

参加者：広島県内の高等学校教員，広島県教育委員会関係者等，本学教職員

参加者数				
区分	広 島	庄 原 (遠隔)	三 原 (遠隔)	計
高等学校教員・県教委関係者等	202	—	—	202
県立広島大学 教員（発表者含む）	56	8	13	77
県立広島大学 職員	25	1	3	29
合 計	283	9	16	308

### 3 参加者の主な意見・感想等（参加者アンケートから抜粋）

#### 【本学教職員】

- 高等学校ではどんな取り組みを行っているかを知る意味で参考になりました。
- 高校の授業での工夫の様子などが分かり、自らの講義でも活かせそうな部分は活かしたいと思う箇所が少なくありませんでした。
- SSHでの実践報告を聞きました。高校生から自分で課題をみつけ研究に取り組み、国際学会に参加し、英語で発表した・・という報告を聞いてびっくりしました。このような生徒さんに選ばれる大学にならねばと思いました。
- ポスターセッションI(大学)について、単に学科案内に徹している学科がある。教育研究・実践研究会であることを考えれば、学科の抱える課題／取り組み／成果を定量的に示すべきだと思う。
- 本来、全体会よりも各ポスター発表において討議することが大学教員にとっても意義深いことだと思います。報告書は開示されてくると思いますが、各キャンパスでの参加者からの情報発信等が必要だと感じました。

#### 【高等学校教員等】

- 大学でのAL取組や、各高校での指定事業の取組を知ることができ、大変実りある学びとなりました。授業で取り入れることで工夫・改善に取り組んでいきたい。
- 様々な角度から教育について考えることができ、有意義であった。大学の先生の話は普段聞くことができないので、いろいろと質問でき大学での学びの意義を再認識できた。
- 他県で活躍する先生方を見て広島県の教育の未来に悲観していたが、頑張られている先生が多くいることが感じられてよかった。良いイベントでした。
- 大学の先生方の思いが分かり、今後の指導に活かせるものでありました。
- 大学の発表をもっと聞きたいと思いました。
- 大学との連携の視点を取り入れた今回のような開催方法は、とてもよかった。
- 県立広島大学との共催は大変意義深い。せつくなので、大学の職員と協議する場があるとよい。
- 非常に活気のある発表会だった。会場もきれいでやる気が出た。今後は広島大学より、もっと県立広島大学と連携を図るべきだ(同じ県立同士)。各学校の優秀な生徒を進学させることが大切。
- 大学も、というより大学がALに取り組んでいるということは良く伝わってきました。県の取組としては、指導の充実、評価の仕方について、これから互いに磨いていければ・・と思いました。

### 4 当日の様子

#### 【全体会】



#### 【分科会】



# 平成28年度 広島県高等学校教育研究・ 実践合同発表会 ／県立広島大学第5回FDer養成講座

## 開催日時

平成29年 1月 27日 (金)  
9:30～16:30 [午前:全体会/午後:分科会]

## 会場

- 開会行事・全体会  
広島キャンパス 2143大講義室  
庄原キャンパス 大講義室(遠隔受信)  
三原キャンパス 1101大講義室(遠隔受信)
- 分科会  
広島キャンパス講義室
- まとめ・閉会行事  
広島キャンパス 2143大講義室

## 本学参加対象

教職員, 学生

## 開会行事・全体会 9:30～12:00

2143大講義室

### 9:30 開会挨拶

広島県教育委員会事務局教育部長 諸藤 孝則  
県立広島大学学長 中村 健一

### 9:55 実践事例発表

県立広島大学学長補佐 馬本 勉  
「県立広島大学における  
教育改革の取組について」

### 10:35 休憩

### 10:45 授業DVD観察及び協議

- 広島県教育委員会高校教育指導課
- ・ DVD観察(地理歴史科, 理科)
  - ・ グループ協議
  - ・ まとめ

## 分科会(ポスターセッション) 13:00～16:00

1275・1278・2346・2343講義室

### 13:00～13:40

### ポスターセッション I (大学)

各学科及び全学共通教育の組織的な取組  
(特徴的な授業実践事例を含む教育プログラム)

#### 1275講義室

国際文化学科, 生命科学科, 作業療法学科

#### 1278講義室

経営情報学科, 理学療法学科, 人間福祉学科

#### 2346講義室

経営学科, 環境科学科, 看護学科

#### 2343講義室

健康科学科, コミュニケーション障害学科,  
全学共通教育部門

### 13:50～16:00

### ポスターセッション II (高等学校)

県内高校による, 教育研究・実践成果の発表

- (1)平成28年度高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト探究  
コアスクール指定校
- (2)平成28年度高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト活用  
コアスクール指定校
- (3)ものづくり人材育成日本一プロジェクト
- (4)平成28年度スーパーサイエンスハイスクール支援事業
- (5)平成28年度スーパーグローバルハイスクール支援事業
- (6)平成28年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール支援事業
- (7)高校生による中山間地域わくわく事業
- (8)平成28年度教育課程研究指定校事業
- (9)広島県高等学校教育研究会
- (10)中高生の科学研究実践活動推進プログラム

## まとめ・閉会行事 16:10～16:30

2143大講義室

### 16:10 分科会講評

県立広島大学副学長 西本 寮子

### 16:30 閉会挨拶

広島県教育委員会高校教育指導課課長 吉村 薫

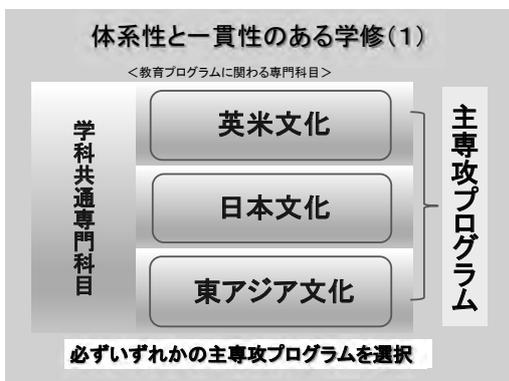
## 担当・問い合わせ

本部経営企画室 川口・伊藤(俊)  
TEL 082-251-9727 (内線 1223・1228)  
E-Mail [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

# 国際文化学科の教育改革

平成29年度入学生から、国際文化学科の教育は大きく変わります。

—体系性と一貫性のある教育プログラムの提供—



## 主専攻プログラム

—英米・日本・東アジアのいずれかに軸足を置いた体系的学修—

3つの主専攻プログラム「英米文化」「日本文化」「東アジア文化」を設ける。学生はそのいずれかを選択し、体系的な学修を進める。

⇒ たしかな能力・思考力の育成

### 英米文化プログラム

- ・ 文化的背景の異なる人々と相互理解を可能とする、高い英語運用能力を身に付ける。
- ・ 言語・文学・歴史・思想・社会などの観点から英米文化の特質を理解する。

### 日本文化プログラム

- ・ 日本列島に展開した文化に関わる様々な資料を読み解く能力を身に付ける。
- ・ 東アジアや欧米との関係に視野を広げながら、地理・歴史・言語・文学などの観点から日本文化の特質を理解する。

### 東アジア文化プログラム

- ・ 中国語・韓国朝鮮語を用いる人々との相互理解を可能にする言語運用能力を身に付ける。
- ・ 隣接する諸地域との関係を視野に入れて、言語・文化・社会などの観点から東アジアの文化の特質を理解する。

## 副専攻プログラム

—地域や領域を超える横断的学修—

3つの副専攻プログラム「人間理解・国際理解」「比較文化」「比較言語」を設ける。学生は主専攻プログラムに軸足を置きつつ、幅広い学修を実現できる。

専門分野を深く学ぶ旧来の文学部にはない学修

⇒ 広い視野と柔軟な発想力を育成

### 人間理解・国際理解プログラム

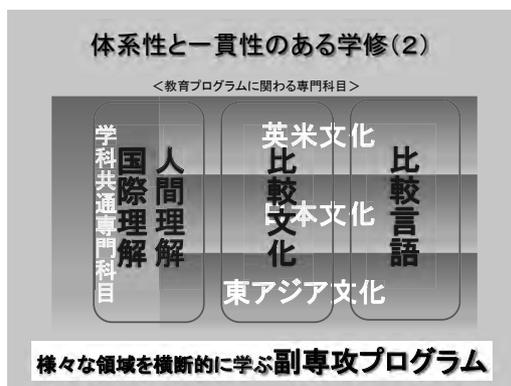
- ・ 多様な価値観を尊重し互いに理解しあうために、人間と社会のあり方について論理的に考察する。
- ・ グローバルな視野から国際社会が抱える諸問題を発見し、それに向けての解決策を提案する。

### 比較文化プログラム

- ・ 英米・日本・東アジアの文化を相互に比較・考察することを通して、それぞれの文化の特質と価値を理解する。

### 比較言語プログラム

- ・ 英語・中国語・韓国朝鮮語および日本語を比較・対照的に考察することを通して、それぞれの言語の特質を理解する。



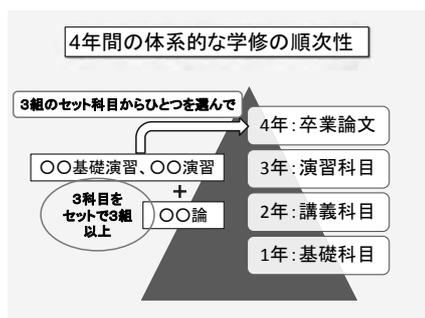
## 体系的な学修の保証

—4年間の体系的な学修の順次性を明確に—

- 1年次では学科の基礎科目・共通専門科目を中心に
- 2年次では「○○論」「○○特論」などの講義科目
- 3年次では「○○論基礎演習」「○○論演習」を3組以上履修
  - ↓
  - 3組のセット科目(論+基礎演習+演習)担当教員の中から卒論指導教員(ゼミ)を選択
- 4年次で卒業論文を作成

## 外国語学修の充実

- 英語・中国語・韓国朝鮮語の中から第一外国語を選択(1・2年次)
- 英・中・韓+ドイツ語・フランス語から第二外国語を選択(1・2年次)
- より高度な内容の「上級○○語」などを3・4年次に設定(英・中・韓)
- 海外短期研修・国際交流プロジェクト・長期留学等を通した外国語運用能力の向上



## 平成28年度の成果と今後の課題

### 初年次教育の充実と組織的教育の実施

- ・ 「履修カルテ」「国際文化概説」レポートによる体系的学修への促し
- ・ 教員相互連携による「大学基礎セミナー」の実施と改善策の検討
- ・ 必修「国際文化概説」や選択必修の入門科目における教員間の連携強化
- ・ 入門科目の受講生が学習成果を共有するワールドカフェの実施

⇒ 早い段階から学修の体系化を構想する学生の増加 ⇒ 継続的検証が必要

### 能動的学修の更なる促進

- ・ 「地域文化学(宮島学)」
- ・ 「日本地域論演習(酒蔵でのフィールドワーク)」
- ・ 「英米社会文化論演習(学生による英語劇上演)」
- ・ 「国際協力論(学外でのアンケート実施)」など

体系化された教育プログラムの中で継続的に実施

## 国際文化学科で学ぶ意義

- 人文学の「知」は、社会に出ても通用する「考える力」の基礎となる。
- 国際文化学科の体系性と一貫性のある教育プログラムによって、人文学の「知」を身につけることができる。



3つの入門科目合同授業「ワールドカフェ」



学生による英語劇The Tempest(あらし)の上演

# 健康科学科における学生の主体的な学び

国立広島大学(広島キャンパス) 人間文化学部 健康科学科



人材育成目標:健康科学科は、真に豊かで健康な人間生活の実現、長寿社会におけるクオリティ・オブ・ライフの向上、生涯にわたる健康の維持と増進、さらには心身の調和的発達の実現に、他者と協働して主体的かつ積極的に取り組む人材の育成を目指す。

## 健康科学科カリキュラム編成

「生体科学」、「栄養・食品科学」、「健康スポーツ科学」の専門の3分野と、それらを統合した形で「健康管理科学」に位置づけられている。  
 【基礎科目】:自然科学から社会科学の視点を含めた科目まで、多彩な分野を講義形式で学び、専門的知識のみならず、幅広い基礎的知識を修得する。  
 【発展科目】:基礎科目をさらに深く、幅広く理解するために実験・実習・演習形式で学び、論理的思考力や協調性・社会性を修得する。  
 【総合科目】:基礎・発展科目で学んだ学習内容を統合し、「総合演習」を通して総合的な力量を高め、「臨地実習」を行う。また、全体を統合した「卒業論文」では、1年以上かけて、様々な領域の基礎的研究を行い、主体的に考える力を修得する。

学年	卒業論文				選択必修
	生物系	化学系	栄養系	食品系	
1	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習
2	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習
3	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習
4	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習	基礎生体科学実験 基礎生体科学実習

## 学生の主体的な学びへの取り組み:「臨地実習」

【事前学習(全体)】  
 > 実習施設概要をまとめる。  
 > 保健所・保健センター、病院、学校に勤務されている先生方から実際の職務内容を学ぶ。  
 > 1カ月以上かけて実習施設から提示された課題に主体的に取り組む。  
 > 社会人として基本的な礼儀・マナーを身につける。  
 【地域保健臨地実習】:保健所・保健センター  
 (対象年次:3年/グループ構成:5~7人/施設/実習期間:1週間)  
 【事前学習】:非常用食品の普及活動案作成、離乳食の献立作成・調理・試食、栄養教室案作成、リーフレット案作成など



【実習生の総括】  
 ● 学内の公衆栄養実習でPDCAサイクルに沿った事業計画を模範的に立てていたため、教室開催に至るまでの準備(事前調査・企画・指導案作成)は大変であったが、スムーズに取り組むことができた。  
 ● 対象者に寄り添った教室を考えることは難しかったが、実際の教室ではその重要性を強く感じた。「ライフステージ栄養学」や「世代別栄養教育論」で学んだ知識をさらに深めることができた。  
 ● ニーズに応じた多様な健康福祉サービスを提供する際には、「地域栄養論」で学んだように他職種との連携が不可欠であることを学んだ

【臨地実習II】:給食経営管理臨地実習I:病院  
 (対象年次:4年/グループ構成:2~4人/施設/実習期間:3週間)  
 【事前学習】:治療食の献立作成・調理・試食、栄養指導案作成、栄養教室案作成、リーフレット案作成、嗜好調査案作成、行事食のメッセージカード案作成など



【実習生の総括】  
 ● 学内で学んだ給食経営管理に対する知識・技能をもとに、現場での給食経営管理における様々な制限やそれらに対する工夫を理解することができた。また常に適切な給食サービスが提供できるよう、分量だけでなく経験や感覚といった技能のさらなる向上も重要であることが理解できた。  
 ● 学内で学んだ病態に関する知識が、現場で総合演習の場で患者様と接することで深まり、今後の学習に対する意欲が高まった。さらに検査値だけでなく患者様の状況を自分の目で把握するなど、広い視野で栄養管理を行うことの重要性が理解できた。

【教育実習(栄養教諭)・給食経営管理臨地実習II】:小中学校  
 (対象年次:4年/グループ構成:1~2人/施設/実習期間:1~2週間)  
 【事前学習】:指導案作成、公開模擬授業など

【実習生の総括】  
 ● 「食に関する指導」より効果的なものにするためには、学級担任をはじめとする教職員、調理員、保護者を含む地域の方々との連携を図ることが大切。  
 ● 栄養教諭は学校給食管理と食に関する指導の2つが軸となっており、栄養教諭の役割としては、学校の食育の中心となることであると学んだ。  
 ● 栄養教諭になるために、今の自分にはどんな力が必要か身をもって学ぶことができた実習でした。  
 ● 栄養教諭は、児童や他の先生方から食に関することを質問されることが多く、食の専門家として様々な知識や経験が必要であると学んだ。  
 【事後学習(全体)】  
 > 報告会資料、研究授業指導案集(教育実習のみ)を作成する。  
 > パワーポイントを用いて、実習内容、実習を通しての学び、自己反省、後輩へのアドバイス等について、後輩、実習先の先生方、教員へ報告する。



## 学生の主体的な学びへの取り組み:「教育課程外学習」

【産学官連携】  
 「レモン大学」:広島は、レモンで健康じゃ!シンポジウム(平成28年9月3日開催)  
 2年生の学生が「レモン組」を結成して参加:シンポジウムでの発表、レモンを使った料理・お菓子のレシピ提案、レモンを使ったお菓子「レモンスコーン」の提供など



【学生生活】  
 ● 自分達がレシピから考え、作った物を多くの方に提供するというのは初めての体験でした。喜んでもらえるか不安な気持ちもありましたが楽しかったと言ってくれた時、嬉しさとやりがいを感じました。当日まで試作や計画書の提案や打ち合わせ等、先生や先輩方に助けってもらい進めることが出来ました。今回、新しいことに沢山挑戦し学ぶことができました。また何より楽しく、レモン組として今回のイベントに参加できて本当に良かったです。  
 ● 広島がレモンで有名なことは知っていたけれど、今回の取り組みで、レモンの特徴や、レシピにどのように取り入れるか知ることができました。また、イベントには広告から看板など、準備することや考えることがたくさんあるということが分かりました。レモンやお菓子をお客様が喜んで受け取って下さったのが嬉しくて、やって良かったなと思いました。みんな協力して、とても良い経験をする事ができました。

【Calbee 新商品開発プロジェクト】(現在進行中~2019年3月まで)  
 ヒット商品3つ開発、圧倒的顧客視点(徹底的に生活者を知りつくし、生活者と共に商品を作りあげる)といったコンセプトのもと、現在、2000人へのインタビューに挑戦中



## 学生の主体的な学びへの取り組み:「総合演習」

【病院実習へ向けて】:一例  
 「患者さんの気持ちになる!」:腎臓病・糖尿病の治療食(各3日間)の見直し

腎臓病	1日目:朝食	パン	野菜スープ	目玉焼き	ポトフサラダ
朝食	やまかけ餅	すまし汁(粗製)	大根はんげん菜物	りんご	
夕食	ご飯	ビーフシチュー	サラダ		
2日目:朝食	トースト	玉葱と人参の炒め	水菜のサラダ	バナナ	牛乳
朝食	ご飯	回鍋肉	すまし(わかめと白ねぎ)	たたききゅうり	オレンジ
夕食	ご飯	豚の南蛮漬け	お浸し	じゃがいもとごんもどきの菜物	
3日目:朝食	ご飯	沢庵煮	肉も豆腐	ヨーグルト	
朝食	天津飯	ナムル	グレープフルーツ		
夕食	さつま芋ご飯	ブリの照り焼き(前選根)	青梗菜の菜物	茄子の揚げ浸し	
	エネルギー	たんぱく質	脂質	炭水化物	食塩相当量
見直し前	596±50	15.3±3.1	20.8±9.6	84.9±14.7	2.1±0.4
見直し後	587±45	14.8±2.4	19.1±5.5	88.0±8.2	1.9±0.4
				動物性たんぱく質比	
				37.9±10.4*	69.4±11.3**
				42.2±11.1*	67.6±10.9**

【患者さんから学ぶ!】:治療中の患者さんとそのご家族との調理実習



【学生の感想】  
 ● 自分たちの腎臓病食はワクワクしないし、今回もネガティブな気持ちで臨んだが、一緒に作った腎臓病食のおいしさに感動。  
 ● 命に関わることで、食の栄養に対する患者様と自分たちの意識が全く違うことに気がついた。  
 ● 管理栄養士との信頼関係が印象的。  
 ● 管理栄養士の「おいしい」という言葉は患者さんをプラスの気持ちにさせると感じた。  
 ● 患者の立場で考える栄養指導が大事だと感じた。日々精進。  
 ● 患者と一緒に考え、頑張ろう。よろこぶあうことが出来る仕事はとて素晴らしい

## 学生の主体的な学びの集大成:「卒業論文」

【卒業研究】  
 これまでの学びの総仕上げとして、3年次の後期から、様々な専門領域に分かれて、1人1テーマで1年以上かけて主体的に基礎的研究を行う。卒業研究の結果の一部は、国内外雑誌に論文として報告されている。  
 卒業論文題目(平成29年1月20日発表)

- 生体科学
  - 植物性食品を利用した生分解性プラスチックの研究
  - 動物性食品を利用した生分解性プラスチックの研究
  - 口呼吸と舌圧(Epiglottic pressure)と正常血圧にみられる抗炎症因子の結合体形成に関する研究
  - 肥満に関連した炎症性腸疾患の発症メカニズムにおけるmiR-20aとmiR-140bの役割
  - 破骨細胞分化に関するカルシニン酸の効果
  - 腸管微生物環境による大腸癌転移関連遺伝子発現の影響
  - 骨髄細胞におけるコラーゲンDDRシグナル系の重要性
  - 放射線の反復照射後に生き残った細胞の特性解析:細胞の放射線感受性
  - 放射線の反復照射後に生き残った細胞の特性解析MDM2遺伝子の発現
  - レイトラシス作用のメカニズムについて
- 栄養・食品科学
  - 短期間の高グルコース補給がグルコース飲料の胃内容物排出を促進する機序の解明
  - アスルメルタン溶液摂取時の甘味感覚が消化吸収活動に及ぼす影響
  - たんぱく質調整食品の特性について
  - 亜臨界含水エタノール中でのN-アセチル-D-グルコサミンの分解
  - 加熱したハマチ肉の揮発性成分とにおい成分分析によるにおい成分と特定
  - マダのにおい成分と揮発性成分の特定とハマチ肉の揮発性成分プロファイルの比較に関する研究
  - 塩分濃度の差による消化吸収率と栄養成分の同定
  - 酒粕の機能性に及ぼす加熱及び酵素処理の影響と小豆の製粉時に算出する副産物の機能性
  - 酒粕の抗酸化性及びACE阻害活性に及ぼす要因の解析と酒粕の新たな菓子の開発
  - 広島お好み焼きのキャベツの加熱能がおいしさに及ぼす影響
  - カスタードフィングのレオロジー特性に及ぼす調製時の牛乳濃度の影響
- 健康スポーツ科学
  - 運動後栄養摂取のタイミングが消化吸収活動に及ぼす影響:高強度レジスタンス運動による検討
  - 短期間の高グルコース補給は運動時に摂取するグルコース飲料の消化吸収を促進するの
  - 運動強度と栄養摂取間隔が睡眠中の血圧変動に及ぼす影響
  - 運動強度と栄養摂取間隔が睡眠と自律神経系緊張に及ぼす影響
  - 低酸素環境下での運動が温度感覚及び生理反応に及ぼす影響
  - サイン波状負荷運動時の非運動時への血流応答-運動強度の影響ならびに上・下肢の比較
  - 上肢、下肢、ならびに上・下肢同時運動時の呼吸循環応答
  - 不均質な介護食品の客観的評価方法の検討
  - 形状を保持した地下調査食の開発
  - 医療施設での各種介護食における牛乳の活用に関する調査
  - 栄養教諭の業務に関する指導の現状と児童生徒への教育効果

# 学外実習型専門演習による研究力・実践力向上

経営学科は、卒業論文作成に向けて開講される「経営学専門演習」において、アクティブ・ラーニングの要素を取り入れ、ゼミごとにさまざまな学外実習を行っています。これらを通じて、学生の自主性伸長、専門分野の資格取得、そして、経営現場における課題発見力および課題解決力、提案力(プレゼン力)の向上を目指します。

以下に4つのゼミにおける学外実習の取組みをご紹介します。

## 経営戦略マーケティング系/経営戦略(朴ゼミ)

### 《活動目標・内容》

- (3年次)経営戦略論の基礎知識/統計分析手法の習得
- (4年次)企業価値分析を用いた卒業論文の作成

### 《学外実習》

#### ◎ マツダのブランド価値経営に関する分析(2016年自主研究)

##### 1) 現地調査

- ・マツダの本社と工場を訪問
- ・グローバル経営部職員にインタビュー



##### 2) 分析結果発表

- ・2016年11月にソウル市立大学を訪問
- ・学術交流会で分析結果を発表(英語)



経営学とは、常に「なぜか」を問い続ける学問です!

## 経営戦略マーケティング系/ビジネスモデル(矢澤ゼミ)

### 《活動目標・内容》

- (3年次)ビジネスモデルの方法論の習得
- (4年次)ビジネスモデル等をテーマとした卒業論文の作成

### 《学外実習》

自分の力で事業を興してビジネスを拡大させることやイベント、映画、音楽に興味のある学生と、各地で開催される文化系イベントの現地調査などを行います。そのうえで、イベント等のビジネスプランを立案し、コンテストなどで発表します。



現地調査(広島国際映画祭)



現地調査(星空の映画祭(長野))



ビジネスプランの発表

## 会計ファイナンス系/ファイナンス(村上ゼミ)

### 《活動目標・内容》

- (3年次)金融・ファイナンスの基礎・応用知識の習得
- (4年次)ファイナンス等をテーマとした卒業論文の作成

### 《学外実習》

#### ◎ 魅力発信グランプリ(中国地域ニュービジネス協議会主催)参加

広島県内の中小企業を取材し、その魅力をプレゼン。

- (2015年度)審査員特別賞
- (2014年度)優秀賞・敢闘賞
- (2013年度)審査員特別賞



#### ◎ 日経TEST学生団体対抗戦(日本経済新聞社主催)参加

国内外の経済・ビジネス動向の理解度を問う試験に挑戦。

(2015年11月)全国6位入賞



これらを通じて、プレゼン力やディスカッション力の向上を図ります。

## 公共経営系/地域マネジメント(和田ゼミ)

### 《活動目標・内容》

- (3年次)まちづくりの基礎知識習得と実態理解
- (4年次)まちづくりをテーマとした卒業論文の作成

### 《学外実習》

#### ◎ 大学生観光まちづくりコンテスト(同運営協議会主催)参加

訪日外国人観光客向け旅行プランを提案。

- (2016年度)観光庁長官賞・大阪府知事賞  
JTB賞・パフォーマンス賞
- (2015年度)ツーリズムおおいた会長賞  
パフォーマンス賞
- (2014年度)大阪商工会議所会頭賞
- (2013年度)JTB賞



#### ◎ サンフレ若者集客促進プロジェクト(2016年自主研究)

サンフレッチェ広島若者集客促進策を検討・提言。



県立広島大学 経営情報学部 経営情報学科  
スマートタブレットによる能動的授業の実施とその効果の検証

市村 匠, 重安哲也, 竹本康彦, 広谷大助

**反転授業**とは、従来の授業と宿題の役割を反転させた授業の形態で、デジタル教材などを利用して自宅で知識を習得し、教室では知識の確認や問題の演習などを行うものである。

タブレットによる反転授業の実施

授業 (教室)



予習・宿題  
(授業時間外)



クラウドシステム

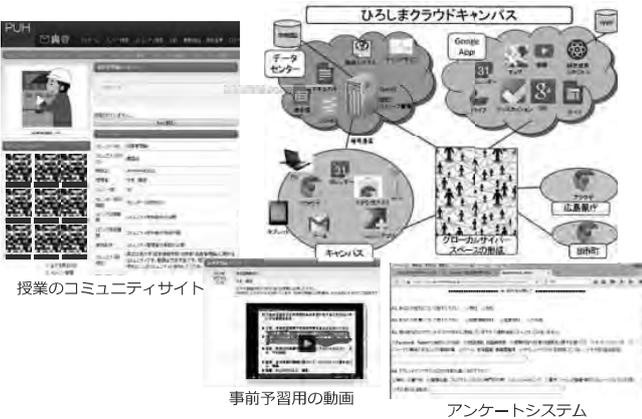
クラウドシステムを使用した動画、資料の事前配布

本取り組みでは、主に本学経営情報学科3年生を対象として、スマートタブレットを活用した反転授業を含む能動的授業を実施し、これによる学生への学習効果の検証、ならびに学生の能動的学習能力の向上をねらいとするものである。

概要

- ・本取り組みは、シャープ株式会社との共同研究において、無線LANの環境を構築し、50台のスマートタブレットの貸与を受け、40名の学科3年生に対し反転授業の効果を検証した。
- ・実施時期は平成27年度後期(平成27年9月28日～平成28年2月5日)、同期に開講の以下の4科目において実践した。
  - オペレーションズ・リサーチ2(市村匠教授)
  - 応用情報システム開発論(重安哲也准教授)
  - 品質管理論(竹本康彦准教授)
  - サプライチェーン戦略論(広谷大助准教授)
- ・自習用の動画や演習問題などのデジタル教材の提供においては、本学独自のクラウドシステム「ひろしまクラウドキャンパスシステム」を利用した。
- ・各授業では、動画による予習やグループディスカッション、プレゼンテーション、ゲーム形式の疑似体験学習などを実践した。
- ・取り組みの成果を確認するべく、同クラウドシステムを用いて電子的に質問紙調査を実施し、本取り組みの成果を調査した。
- ・アンケート調査の結果によると、能動的学習を通じて授業の理解度が増加すると回答した学生が約56%、本授業形態に対し自分なりの学習方法の発見ができたとする学生が約38%いた。

本学独自開発のクラウドシステム



「OR II」での実践(市村教授)

【授業の特徴】

単元ごとに、学修する内容に関する数学知識を確認する。授業においては、手法の説明(証明も含む)や例題を用いた演習を行っている。

【反転授業の内容】

クラウドシステムの動画閲覧機能、SNS機能を用いた。スマートタブレットは全員に貸与した。高校数学の復習は、自修による再確認を促す。単元の概要は動画を事前に閲覧してもらい、授業までに何を学ぶのかを考えさせた。動画で日常的で身近な問題を例に課題を具体的に示した。授業中に、動画や課題について、グループごとにディスカッションさせた。その後、課題の内容、考えられる解法についてまとめ、グループ代表が発表させた。授業では、基礎から教え、課題の解き方、面白さを教えた。

【効果】

最初は動画の閲覧をせず、スマートタブレットの機能を調査していた。このため、授業中に事前学習の内容を行い、何が求められているのかを理解させた。2回目には、動画を閲覧し、課題について自分なりの解法を考えてきた学生が2/3程度に上昇した。しかしながら、授業アンケートでは勉強時間が増えるなどのクレームが増えた。一方で、授業内容に関心をもつ学生も増えた。

ケーススタディ(重安准教授)

【授業の特徴】

- ・複数のアプリケーションが同時に一つのコンピュータ上で動作するための仕組みについて学修する。
- ・アプリケーション同時実行時にも干渉を起こさないためのアルゴリズムの理解
- ・複数のアプリケーションを同時並行的に、かつ、短時間で処理するためのアルゴリズムを理解する。

【反転授業の内容】

- ・反転授業におけるデジタル教材として「排他制御アルゴリズム」に関する説明資料を提供し事前学習を指示した。
- ・授業当日は事前学習内容に関してグループごとに内容を議論させるとともに、より発展的なアルゴリズムについて検討させ、授業終了時にグループごとに検討結果を発表させた。

【効果】

- ・ほとんどの学生が提供した事前学習資料を予習していた。
  - ・反転授業を実施した日程が、その他の3教科よりも後となったため、事前学習への取り組み方などを学生が理解したためであったと考えられる。
- ・事前学習を踏まえた、グループ討議においても、積極的な発言や、討議中に挙げられた意見のまとめを率先して行う学生が多かった。
- ・グループ討議終了の際の他グループの発表に対しても、積極的に質問を行うなど、授業への能動的な参加が確認できた。

「品質管理論」での実践(竹本准教授)

【授業の特徴】

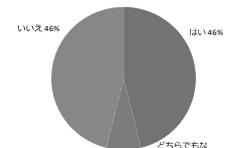
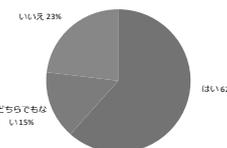
- ・統計的方法に基づく品質管理手法を教授
- ・低学年次に統計に関する基礎知識を別授業にて習得していることから、本授業の早い段階で統計学の基礎を復習

【反転授業の内容】

- ・反転授業におけるデジタル教材として「検定」に関する資料を提供し事前学習を指示
- ・授業当日は事前学習内容に関する小テストを実施し、その後、通常授業を実施。

【効果】

- Q) 演習問題(小テスト)は、予習の結果として自分なりに理解して解答できましたか?
- Q) 予習をした場合の授業では、普段の授業より授業の内容について深く理解できましたか?



ケーススタディ(広谷准教授)

【授業の特徴】

- ・サプライチェーンの概要及びサプライチェーンに対する戦略を理解する事を目的
- ・理解を促進させるためにロジスティクスゲームを実施

【反転授業の内容】

- ・事前学習としてクラウドシステムを用いて、やり方を動画で配信し、更に必要なマニュアル等各自でダウンロードできるようにし、各自でゲームのやり方を習得
- ・事前学習を基にした課題を課し、授業開始時までにレポートとして提出

【効果】

- ・半数以上の学生が事前学習により、理解が深まり、レポート課題が捗ったと回答
- ・半数以上の学生が学修内容の理解が深まったとも回答

\*ロジスティクスゲーム・・・工場→流通センター→販社の3段階からなるサプライチェーンにおいて、輸送費・施設費・保管費・品切れ費からなる総費用を最小にするために、各自で戦略を立て意思決定を行うゲーム

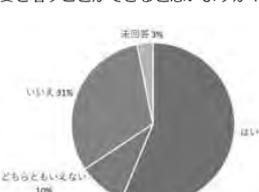


学生によるアンケート評価

- ・調査方法: クラウドシステムを利用した電子的な質問紙調査
- ・回答数: 32

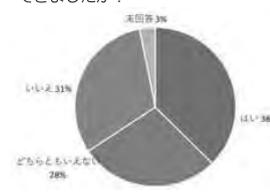
【能動的学習の効果の検証】

反転授業を実践することで、授業の理解度を増すことができると感じますか?



【能動的学習能力の検証】

反転授業を実践することで、授業に対する自分なりの勉強方法を発見することができましたか?



自分なりの学習方法の発見に対して「どちらでもない」、「いい」と回答した学生19名中13名は能動的学習を通じて授業の理解度が上がったとはいえないと回答していた。その点から、能動的学習能力が備わってこそ反転授業の学習効果が期待できると考えられる。これらは早い段階から能動的学習の機会に接する必要があると考えられる。

# 【特色ある教育－研究体系（概要とねらい）】

## “生命科学分野の教育－研究の深化を目指した講義事例”

グループA(1275)各学科および全学共通教育の組織的な取組  
(特徴的な授業実践事例を含む教育プログラムについて)

「平成28年度 広島県 高等学校教育研究・実践合同発表会」

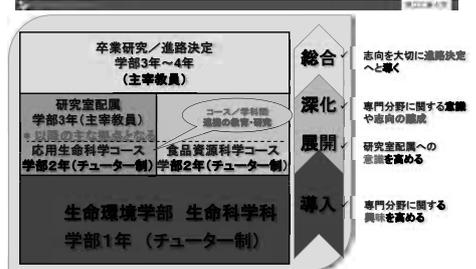
県立広島大学 生命環境学部 生命科学科(植物細胞工学)  
 萩田 信二朗 (教授) ogita@pu-hiroshima.ac.jp  
 FDer (フカデル・ティ・ペイ・ドゥー)、TPノクター、キリアセンター委員

### ● 応用生命科学コースの人材育成目標

生命科学・生物工学に関連する諸問題を解決へと導くための学力と技術、そして思考力を兼ね備えた技術者あるいは研究者を目指す人を受け入れることを基本とし、産業のさらなる発展や新たな成長分野の創成に寄与し、人類の生存や福祉(健康と幸福)へ貢献できる人材の育成を目指しています。

### ● 食品資源科学コースの人材育成目標

人類の生存と健康の維持に欠かせないものであると認識し、かつ、食品・生物資源・環境問題に関心を持ち、社会がかかえる様々な問題を解決しようとする意欲あふれる学生を受け入れることを基本とし、食品や生物資源に深くかわる産業の創成と発展に貢献する人材の育成を目指します。



生命科学科の および、導入から総合まで各ステップで教員と学生が共有し、達成をめざす。 (\*常時 試行・改革・実施を進めています)

# 【特色ある教育－研究体系（事例1：植物組織培養学）】

## ● シラバス事例1(抜粋 H28年度 79名履修)

キーワード	多様性、植物組織、遺伝子資源、細胞工学
授業の目標とカリキュラム上の位置付け	植物の生長や分化、環境との関係性、資源利用などに興味を持つ学生を対象にして、植物の形態変化および代謝に関する基本知識を習得するとともに、細胞工学、組織培養技術の概観と利用形態を理解することを目的とする。学生は次の2項目の習得を到達目標とする。 ① 植物の形態変化と代謝の基礎知識を習得できる。 ② 植物組織、組織培養技術の概観と利用形態について自ら考えられることである。
授業の内容	植物バイオテクノロジー領域で基礎技術の一つである細胞組織培養技術について、まず、技術習得の基礎となる細胞の観察と培養を説明する。次に細胞の中で植物の形態形成や代謝の仕組みならびにも組織培養方法の習得を解説し、植物組織培養の基礎知識と最新のバイオテクノロジーグループについて、学生に問題解決の意欲を定着させる。
成績評価の方法	ディスカッションへの参加(30%)、コメント欄(30%)、期末試験(40%)により達成度を総合的に評価する。達成度60%以上をもって合格とする。
テキスト	開講 植物分子細胞生物学(一冊) ISBN:4274197298
参考文献	組織培養実践(学会出版センター) ISBN:4762267368

2018年度 前期	2018年度 後期	学数	氏名
第1期	4月13日	出席	後藤

授業の主旨: シラバス各章の内容、スライドタイトルなどが時々になります。各自前章の内容から読み出すのが、ペー

課題提供: 本講義に際して、各論(具体例を挙げ、スライドを参照しながら)、問題に類似したタイトルをつける感覚です。

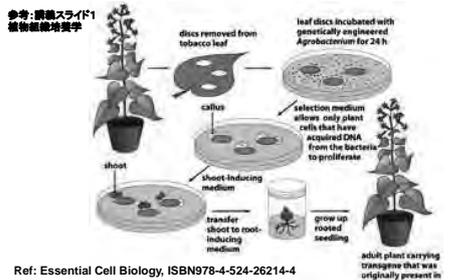
要点(キーワード): 英文で書いてもいいし、問題の中で覚えた(気になった)用語を抜き出すのが有効

コメント: 問題中の問題に対して、考えたこと、疑問に思ったことなどを自分なりにまとめてレポート形式で提出してください。また、疑問点があればコメント欄で質問してください。

\* 90分1コマの講義の中で活用するスライド枚数は、原則10～15枚程度で、PDFファイルで事前提供しています。

\* 関連資料(論文やWEBなど)は、PDFやA4レスリングで提供し、自主学習に対応します。

## 組換実験タバコのリーフディスク法



植物組織培養学 応用生命科学コース 3年次対象 前期必修  
 食品資源科学コース 3年次対象 前期選択  
 \*履修要件等: 学科共通科目でコース毎に選択/必修

コメント欄( ) で、両面印刷です。1枚で4回分のフォーマットです。コメント票の記入要領として、初回にこの注意事項を指示します。\*

## 【コメント欄】

- C1: 培養の意味として、自然にもっと適した細胞を持った植物を作るといふことなのか?  
 Q1: ⇒ 完全な答えではなくとも、着眼点や疑問点などが すぐに伝わる類の記述である。
- C2: 植物を利用したものが多いのを知って、植物を使って何までどこまでできるのか、興味を持った。  
 Q2: ⇒ 学習を進める(考える)上で、とても大切な 背景やコンセプト に通じる感覚です(ただし、毎回これだけでなく、進捗が望ましい)
- C3: NEDOやJSTIについての詳しい説明が聞きたい  
 Q3: ⇒ 別途調べてみてくださいと板書されたキーワードを考えた点、良いです。が、まずは 自分で調べてみましょう。
- C4: 家庭でも組織培養は行えるということがあるが、それは本当か?  
 Q4: ⇒ (素朴/面白い)質問事項は 歓迎します。 答えとしては 本当です。
- \* NEDO: New Energy and Industrial Technology Development Organization  
 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構については講義の中でもフォロー-up致します。質問事項の回答も 可能な限りは 共有します。

H28年度のコメント票( ) \*2-3回目に、これは！という事例を指示します。

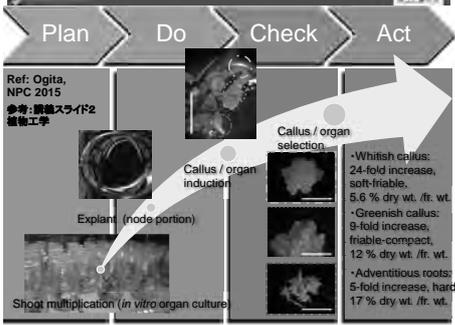
# 【特色ある教育－研究体系（事例2：植物工学）】

## ● シラバス事例2(抜粋 H28年度 12名履修)

キーワード	多様性、植物組織、遺伝子資源、細胞工学
授業の目標とカリキュラム上の位置付け	植物の生長や分化、環境との関係性、資源利用などに興味を持つ学生を対象にして、植物の形態変化および代謝に関する基本知識を習得する。学生は次の2項目の習得を到達目標とする。 ① 植物の形態変化と代謝の基礎知識を習得できる。 ② 植物組織、組織培養技術の概観と利用形態について自ら考えられることである。
授業の内容	植物バイオテクノロジー領域で不可欠なことである植物組織の特性について、まず、技術習得の基礎となる細胞の観察と培養を説明する。次に細胞の中で植物の形態形成や代謝の仕組みならびにも組織培養方法の習得を解説し、植物組織培養の基礎知識と最新のバイオテクノロジーグループについて、学生に問題解決の意欲を定着させる。
成績評価の方法	ディスカッションへの参加(30%)、コメント欄(30%)、期末試験(40%)により達成度を総合的に評価する。達成度60%以上をもって合格とする。
テキスト	開講 植物分子細胞生物学(一冊) ISBN:4274197298
参考文献	組織培養実践(学会出版センター) ISBN:4762267368

植物を工学的に活用する⇒「工学」であるから「Technology」より「Engineering」の意識で調べましょう。今回は個別対応です。

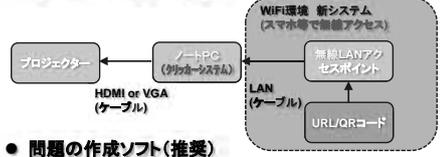
【基本手順】  
 ①植物工学的な研究の具体的な活用事例や社会のニーズを抽出して、外れにしてください。  
 ・植物起源の原材料・商品、植物(代謝)機能と環境等を、新聞・科学雑誌等のトピックス掲載、研究用HP掲載、関連省庁HPから抜粋する。  
 ・研究/開発の背景としてまとめていただき「レポート(1度原稿 再提出)」  
 ②基幹となる「植物性」、「形態形成」、「制御の仕組み」を直書きにて抜き出してください。その後、内容を調査していきます。  
 ・植物性は、科や属、種に至るまで調べると、その技術の応用範囲等も分かります。  
 ・形態形成は、葉、根、花など(場合によっては代謝能力)が、選んだトピックスの中で対象になっているはずである。  
 ・制御の仕組みは問題作成の中心となるので、教科書、図書館内の関連資料および論文検索によってしっかりと調べ



植物組織培養学 応用生命科学コース 3年次対象 後期選択  
 \*履修要件等: 応用生命科学専門科目を受講していることが望ましい

H28年度の植物工学( ) 作成の手引き(正しいもの/間違っているもの)を選ぶ形式は作成しますので、よく吟味すること

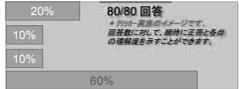
## ● クリッカーシステムの概要



● 問題の作成ソフト(推奨)  
 質問ファイルの本体を直接JSON editorで編集することをお勧めします。  
 \*JSON editorの起動には2種類の方法があります。  
 A: http://jsoneditoronline.org/ウェブ上でオンラインで行う(おすすめ)  
 B: ブラウザの拡張機能として、アプリJSON editor (jsoneditoronline.com)をインストール。これを使用して行う(インターネット接続の必要がない)。  
 \*本取組はH28県立広島大学FD活動促進事業「スマートフォンとWIFIを利用した簡便かつ高機能なクリックシステムの導入」を活用した実施事例です。

Q: 根には、カスパリー帯という疎水性の物質でできている細胞壁があり、イオンの移動を防げる。それは、根の細胞に毒性の強いアルミニウムイオン種を近づけない能力が働いている。このカスパリー帯は、イネの根の組織ではどこに存在しているか。

- ① 根の中心となる部分
- ② 中心柱と内皮の間
- ③ 内皮と皮層の間
- ④ 皮層と表皮の間



これら問題の実施と併せて、調査したトピックスに対して、背景やポイントをまとめたレポート提出(問題作成時に1回)→これを添削し、実施後(1回)。  
 \*このレポートをやりとりを通じて、 や、 のまとめがたい。

# 環境科学科におけるキャリア分析に基づく課題抽出とその改善の取組

県立広島大学 生命環境学部 環境科学科 准教授 小林謙介

## 1. ねらい

### ◆本学環境科学科の教育の重要課題:

- (ア) 受験生の関心と本学科で修得できる内容のミスマッチの回避
- (イ) 所属学生の目的意識を持った主体的な学習
- (ウ) 修得内容を生かせる進路先での活躍

### ◆本取組のねらい:

- 【取組1】平成20年から実施の所属学生のキャリアに関するアンケート調査を分析し、学科教員で共有して課題を整理すること
- 【取組2】一層効果的な教育体系にするための改善を行うこと

\* 体制:有志教員でWGを組織(西村、西村、青柳、小林、崎田、橋本、有馬、松本)して分析を行った上で学科全体で共有

## 2. 概要

### 【取組1】キャリアアンケート調査の分析と課題整理

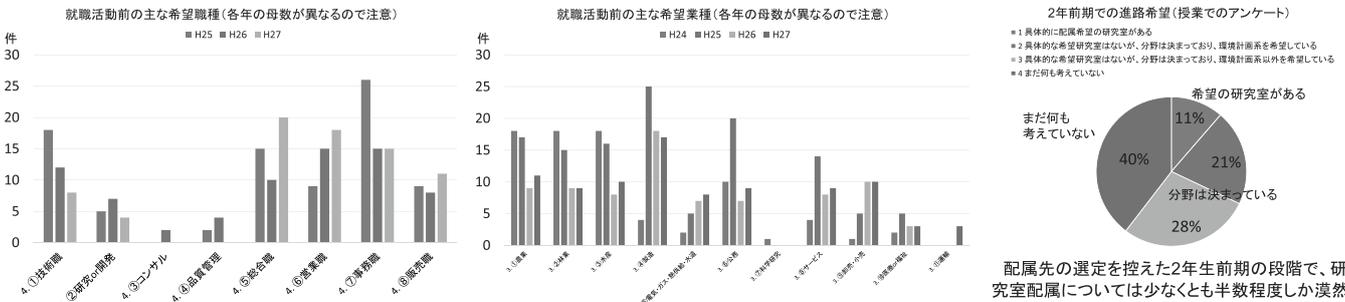
本学科所属学生に対するキャリアに関するアンケート調査(回答数488件)をもとに、WGで実態分析、課題取りまとめを実施。

### 【取組2】課題を踏まえた改善の取組

- ✓ 受験生及びその関係者に対する情報発信内容の改善
  - ①ウェブサイトにおける学科での取り組み内容の発信
  - ②学科の全体像を示すポンチ絵の作成
- ✓ 在学学生への一貫したキャリアの意識付けと学習意欲の向上
  - ③4年間を通した継続的なキャリアの意識付け
  - ④進路選択を意識した卒論従事研究室の配属体制の構築

## 3.1 成果【取組1】キャリア分析結果

調査結果および議論から、非常に多くの課題を抽出できた。卒業生は多岐にわたる業種・職種で活躍している。一方で、より効果的な学習を考えた場合、多くの課題があることも整理できた。また、これらの課題を学科教員同士で共有できた。以下に主要な内容を示す。



受験生にポリシーが十分に理解されていない可能性がある(初期の段階で、環境とのかかわりが薄い、営業職・事務職・販売職を選択肢としている学生が少なくない)。初期の段階、および進路選択の際も、技術職を選択肢に考える学生は極めて少ない。そもそもコンサルタント等は、学生の職業に対する理解が不足している可能性もある。

配属先の選定を控えた2年前期の段階で、研究室配属については少なくとも半数程度しか漠然と研究室の候補を決めてない。一方で、進路先はある程度、分野等の進路目標がある学生は4割程度で、残りは漠然としていて、進路に対する意識付けが十分ではない学生が少なくない。

## 3.2 成果【取組2】課題を踏まえた改善の取組

### ①ウェブサイトでの取り組み内容の発信

学科ウェブサイトにおいて、学科の活動を垣間見ることができる学科イベント等の記事を、原則月2回以上更新し、受験生や関係者に活動内容をより深く理解していただけるようにする。



\* 環境科学科 ウェブサイト  
http://www.pu-hiroshima.ac.jp/oshiki/environmental/index-2.html

### ②学科の全体像を示すポンチ絵の作成

環境科学科は多様なバックグラウンドを有する教員が所属している。それぞれの視点から環境科学にアプローチを行っているため、学科の全体像が見えにくいことが、大きな課題の一つである。

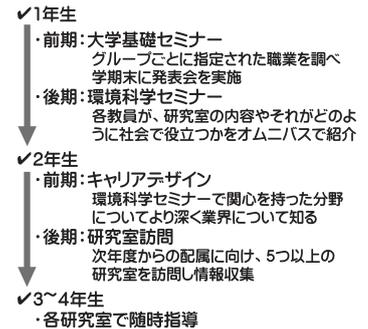
こうしたことから、環境科学科各教員が取り組んでいる研究等の内容を1枚のポンチ絵にまとめる取り組みを行っている。完成したらウェブサイト等広報で活用する。



### ③4年間を通した継続的なキャリアの意識付け

1年後期・2年前期におけるキャリア形成を意図した講義を新設。例えば、1年後期には「環境科学セミナー」を新設し、学科教員が持ち回りで、研究室での活動内容や研究室で学んだことが生かせる業種・職種などについて紹介し、学生のキャリアイメージの明確化、学習意欲向上につなげる。

これらを新設することによって、1年前期の大学基礎セミナー、1年後期・2年前期の新設講義、2年後期の研究室配属に伴う活動と継続的にキャリアを意識づけるための機会が与えられる体制を構築できた。



### ④卒業後の進路選択を意識した卒論従事研究室の配属体制構築

2年生後期に実施される卒論従事研究室の配属先の選定にあたり、研究室の取り組み内容と、研究室で学んだことが生かせる業種・職種を結びつけた一貫した情報提供を行うようにした。本資料はキャリアセンターでも配布し、2年生以外にも広く周知した。

教員名	担当研究室	研究室キーワード	フィールド研究	上級学生数
小林 謙介 (Kenji Kobayashi)	1号館717号研究室 email: kenji.kobayashi@hiroshima-u.ac.jp Web: http://www.pu-hiroshima.ac.jp/~kenji/ (公開が目的で最新バージョンを公開)	環境工学、環境化学、環境生物、環境地学、環境政策、環境教育、環境法	環境化学	5名
小野 謙介 (Kenji Ono)	2号館10号研究室 D: 085-861-8466, 831156	CO <sub>2</sub> 排出削減、環境政策、環境教育、環境法	環境化学	5名

# 患者中心の看護と多重課題へ対応するチームナーシングを学ぶ 演習と実習の学修成果

岡田麻里, 井上誠, 永井庸央, 近藤美也子, 土路生明美,  
船橋真子, 上野庸子, 伊藤良子, 片山友里, 榎木綾香, 松森直美  
県立広島大学保健福祉学部看護学科



## I. ねらい

### 1) 背景

少子高齢化、医療の高度化、国民の意識の変化により、現場の看護は高度化・複雑化している。そのため、現場で**必要な実践能力と基礎教育で修得する実践能力の乖離**が生じている。

### 2) 目的

既修の知識と技術および態度を統合し、専門的な看護を実践するために、チーム医療の実践のなかで、多様な状況を判断し、対応するための思考プロセスを学ぶ。これにより、**リーダーシップおよびメンバーシップに必要な能力を理解し、臨地における多重課題に対応できる自律した看護実践能力の基盤を養う教育プログラムを作成する。**

## II. 概要 1) 演習および実習の流れ

表1 多重課題演習とチームナーシングを実践する思考を育てるシャドウイング実習の流れ

実施時期	実習スケジュール	目的	内容
3か月前	実習指導者会議	・実習指導者と教員が、実習目的・目標を共有する。	前年度実習成果の報告 実習指導者による多重課題演習への参加協力依頼
1ヶ月前	全体オリエンテーションと事前課題の説明	・本演習と実習の目的・目標を理解する。 ・事前課題、カンファレンスの進め方、実習記録方法および提出方法を理解する。	事前課題の配布 1) ①～⑤の定義と1つ選び自己の考えを記述する。①チーム医療、②チームナーシング、③リーダーシップとメンバーシップ、④医療安全管理、⑤新人看護師に対する院内教育システム(A4用紙2枚以内) 2) 実習先の病院・病棟の概要・入院患者の特徴をまとめる(様式1) 3) 多重課題演習(表2)に必要な知識と技術をまとめる
1日間(5コマ)	多重課題演習	・チームナーシングにおけるメンバーの立場で、受け持ち患者をアセスメントし看護ケアの優先度を判断する思考過程を臨む。 ・チームで多重課題に対応していくための看護実践能力とは何かを考え、自己の課題を明確にすることができる。	グループワーク Step1 多重課題演習の事例展開 Step2 ①看護師に必要な看護実践能力、②自己の課題、③実習での自分自身の目的、疑問点、課題について話し合い、模造紙にグループ発表 自己の課題、実習での自分自身の目的、疑問点、課題の明確化 実習での観察ポイントを明確にし、実習指導者に積極的に質問するための準備
3日間	臨地実習	・既存の知識と技術、および態度を統合し、専門的な看護を実践するために、チーム医療の実践のなかで、多様な状況を判断し、対応するための思考プロセスを学ぶ。 ・リーダーシップ・メンバーシップに必要な能力を理解し、臨地における多重課題に対応できる自律した看護実践能力の基盤を養う。	1日目 看護部長による病院紹介および新人看護師教育に関する講話 病棟病長による病棟オリエンテーション 病長・リーダー・受け持ち看護師へのシャドウイング実習(グループでローテーション) 夕方の申し送りに参加 2日目 朝の申し送りに参加 病長・リーダー・受け持ち看護師へのシャドウイング実習(グループでローテーション) カンファレンス(学びをまとめるラベルワーク) 夕方の申し送りに参加 3日目 朝の申し送りに参加 病長・リーダー・受け持ち看護師へのシャドウイング実習(グループでローテーション) カンファレンス(学びをまとめるラベルワーク) 夕方の申し送りに参加
1日間(4コマ)	学内学びの振り返りと発表	演習および実習を通して学んだことを振り返り、共有する。	グループワーク 演習・実習を通して「多重課題に対応するための看護実践能力と自己の課題(サブテーマ)」の学びの内容をグループで学びの振り返り、模造紙にまとめる。 発表 各病棟の入院患者や看護の特徴を踏まえて、グループワークの学びを発表し全体で共有する。

### 2) 単位認定：3年次2単位60時間

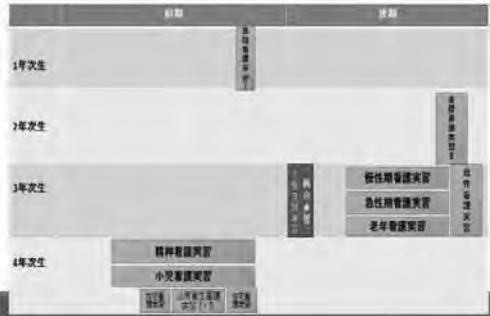
学生61名

### 3) 実習配置：広島県内総合病院3箇所19病棟

病棟に3～4名の学生を配置

### 4) 教育内容の意図：既修の知識・技術の統合ラベルワークを活用したグループワーク フィールドワーク形式(観察・インタビュー) 演習・実習の振り返りと学びの共有

### 5) 実習全体の位置づけ



実習後のカンファレンス



学内演習の発表

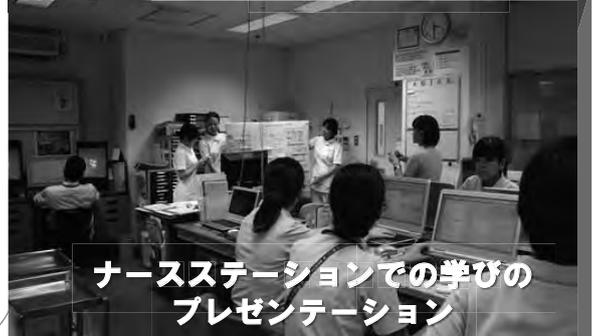
## III. 成果

### 1) 学生のまとめたレポートの分析から学びの抽出

- 「患者中心の看護を目指していることを学ぶ」
- 「自立して患者ケアを行うメンバーの要件を学ぶ」
- 「多重課題に対応する考え方の実際を学ぶ」
- 「チームナーシングの基盤となる関係づくりの実際を学ぶ」
- 「多職種による患者支援を学ぶ」
- 「多様な能力/専門性をもつ者の間の的確な情報交換の実際を学ぶ」

### 2) 実習指導者による評価(70名から回収)(H28年度の分析結果)

年齢：20年以上34名(48.6%)、15-20年未満9名(12.9%)、役職：師長17名(24.3%)、主任30名(30.0%)、スタッフ20名(28.6%)、  
統合実習の全体的印象：肯定的回答(よかった・まあまあよかった)59名(84.3%)、  
内容：肯定的回答54名(77.1%)、実習時期：肯定的回答41名(58.6%)、  
学生の学修状況：肯定的回答63名(90.0%)、学生発表：肯定的回答50名(71.4%)



ナースステーションでの学びのプレゼンテーション

## IV. 課題

- 1) "統合"の意味づけと学年次ごとの学生の学びに関する課題(実習時期に関すること)
- 2) 実習指導者と統合実習の目的や方法を共有する機会をもつ必要性
- 3) 生活と医療を統合したケアを実践するための継続看護の視点を統合実習で学ぶ必要性



# 理学療法士の臨床をイメージさせる初年次教育の取り組み

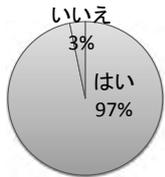
県立広島大学 保健福祉学部  
理学療法学科長・教授 田中 聡

はじめに

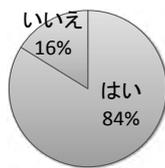
## 目的：初年次教育の必要性について検討

### 理学療法学科1年次生に対するアンケート（H27年度1年次生31名）

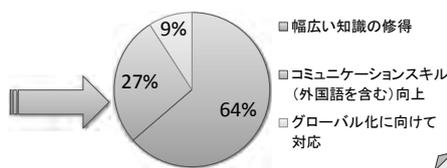
Q1. 理学療法に関する専門科目を1年次から学修した方が良いと思いませんか？



Q2. 全学共通科目は重要だと考えますか？



Q3. (Q2ではいい回答) 全学共通科目が必要な理由は何ですか？



1年次生へのアンケート結果から・・・

学生は初年次から、『理学療法に関する科目を学修したい』と考えている

一方で、全学共通科目の履修も重要と認識している

## 初年次に理学療法士教員が関わる科目

- ▶ チーム医療福祉論 (30時間1単位) 5学科合同
- ▶ 理学療法学概論Ⅱ (30時間1単位)
- ▶ 理学療法学概論Ⅰ (30時間1単位)
- ▶ 理学療法評価学Ⅰ (30時間1単位)
- ▶ 基礎運動学 (30時間1単位)

## 初年次専門授業での工夫

### 理学療法学概論Ⅰ：1年前期 30時間1単位

▶ 理学療法学の歴史、法体系、障害分類、対象疾患、理学療法過程、理学療法士と倫理・研究、診療報酬などを系統的に学ぶ

#### アクティブ・ラーニング（参加型学習）の実践

- ・理学療法の定義について考える
- ・理学療法士と倫理について考える
- ・理学療法の対象について調査報告する
- 脳梗塞、大腿骨頸部骨折、脊髄損傷、パーキンソン病、前十字靭帯損傷

#### 理学療法（士）研究とその多様性を学ぶ



理学療法士教員による研究紹介  
理学療法基礎研究、臨床理学療法、バイオメカニクス、地域理学療法など

#### 理学療法に関する治療手技体験



基礎医学分野の学修に有効な動機づけとなる

### 理学療法学概論Ⅱ：1年後期 30時間1単位

▶ 専任教員による講義に加え、学外より理学療法士を招き、臨床理学療法やチーム医療についての実践を学ぶ

#### 附属診療センター見学

▶ 早い段階から医療従事者となる自覚を高めるために、附属診療センターを利用して、理学療法士や作業療法士教員の治療見学、言語聴覚士教員によるコミュニケーションツールの説明、診療放射線技師教員による医療画像装置の説明など、臨床現場の実際に触れる機会を授けている

医療画像装置の見学・検査の模擬体験



コミュニケーションツールの説明



医療機関での理学療法士の役割を学ぶ チーム医療の重要性を学ぶ

### 理学療法評価学Ⅰ：1年後期 30時間1単位

▶ 理学療法における評価の位置付けと障害構造について、講義と演習を交えて実践的に学ぶ

#### 医療面接のシミュレーション実習



教員 対 学生  
学生 対 学生  
様々な場面を設定し  
実践的な面接技法・  
観察視点を学ぶ

#### バイタルサイン測定実習

屋根瓦式教育として、3年次生10名が教員の補助役として授業に参加

1年次生：2年後の自分が想像できた

3年次生：恥をかきたくないので勉強した

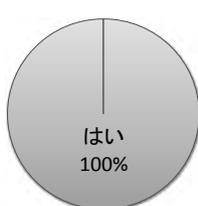
▶ 1年次生・3年次生両方の学修意欲を高めることが可能



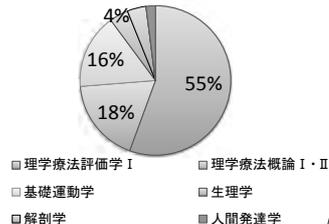
## まとめと課題：初年次からの専門授業に学生は満足しているか？

### 理学療法学科1年生に対するアンケート（H27年度1年次生31名）

Q4. 1年次の講義で理学療法の臨床について興味がありましたか？



Q5. 1年次の講義を受けて、さらに理学療法への興味がわいた科目がありますか？



- ▶ 1年次の限られた時間数、科目数のなかではあるが、教員による講義の工夫により理学療法の臨床をイメージさせることは可能である
- ▶ 本学ではアクティブ・ラーニングを導入・推進しているが、指定規則がある保健福祉学部において、どのように展開していくのか、さらなる検討が必要である
- ▶ Early Exposure program 導入の検討も必要である

## 作業療法士教育におけるプレイバックシアターの活用

保健福祉学部 作業療法学科

吉川ひろみ, 古山千佳子, 高木雅之, 永吉美香

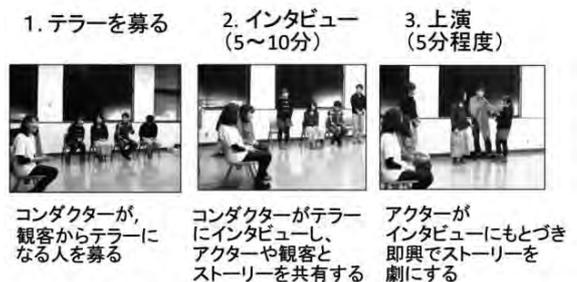
### 1 ねらい

卒業後、作業療法士として施設や病院で働くためには、状況を読み取る力と高いコミュニケーション技能が必要である。プレイバックシアターのエクササイズでは、こうした能力を学ぶことができる。また手法の一つであるストーリーでは、経験の共有や行動の省察ができる。作業療法士など対人援助職を目指す学生のための教育手法としてのプレイバックシアターの活用について報告する。

### 2 概要

#### 1) プレイバックシアターの概要

1975年にFoxが創出した即興劇で、現在50か国以上で実践されている。プレイバックシアターの主な手法であるストーリーは、コンダクター（司会進行役）、アクター（役者）数名、ミュージシャン（音楽担当）、により上演される。コンダクターが観客の中からテラー（体験を話す人）を招き、インタビューする。その後アクターがすぐに演じる。教育、医療福祉、子育て、復興支援、男女共同参画などの分野で実践されている。



#### 2) 本学教育における活用

- ① **臨床実習セミナー(3,4年)**: 学外実習での経験を共有するセミナーでの経験を共有する。
- ② **クリニカルリーズニング(4年)**: 実習での自分の行動の理由を振り返り、リーズニングのタイプを特定する。
- ③ **医療福祉倫理学特論(大学院)**: 倫理的悩みやディレンマ状況を思い出し、倫理の概念（自律尊重、無加害、功利主義など）を使って分析する。
- ④ **その他**: 自発性、共感性、対人関係などをテーマとした特別授業。3日間の集中演習（1~3年）、外来講師を招いての演習。

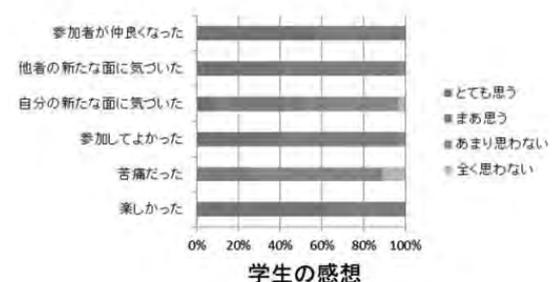
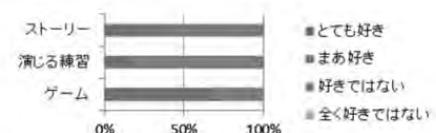
ソシオメトリー	お互いの様子を知り合うためのマッピングなど
ウォーミングアップ	ゲームや歌などで心身の緊張を解きほぐす
演じる練習	ロールサークル、既存の物語の寸劇など
ストーリー	お互いの経験を話したり、演じたりする
クロージング	感想を言い合うなど

プレイバックシアターの手法を活用した授業の例

### 3 成果

- 経験の共有により参加者間の関係が深まる。
- 行動の省察、他者への共感ができる。
- 苦痛でもあり、楽しくもある。
- 3日間の演習に、1日以上参加した学生の自尊感情と自己効力感が向上した。
- 三原市チャンネル平成28年7月25~31日分、9月26~10月2日分の「市民いきいき健康ひろば」で情報公開されている。

<https://www.city.mihara.hiroshima.jp/site/channel/2016-7.html>



### 4 課題と今後の展望

- 参加に抵抗を示す学生への対応：安心できるインクルーシブな場の雰囲気を作る。
- ファシリテータ（教員）の技能向上：継続的な研修機会をもつ（FD活動促進事業、「劇団しましま」としての活動等）。
- 感情—認知—行動をつなげる工夫：理論、倫理、専門技能に関する授業と関連づける。

# 言語聴覚士養成教育でのケースに基づいた演習への Team Based Learning (TBL) 導入の効果

## 1. ねらい

言語聴覚士養成教育の中の言語発達障害・学習障害の分野における患者の評価および訓練・支援計画立案演習の教育効果を高めるために、Team Based Learningを導入する

## 2. 概要

### 2-1. TBLの概要

**TBL(Team Based Learning)とは**  
 ・1970年代後半 ビジネススクールの教員であったMichaelisによって編み出された教育方法  
 ・大きなクラスで教員が1人であっても主体的な小グループ学習成立が可能  
 ※PBL(Problem Based Learning):  
 学習グループ毎に学習支援者が必要  
 学習者の学習姿勢に係る教育方法  
 ・事前準備とグループデザインを巧みに利用した学習活動の難動化  
 ・授業構成上、授業時間外にグループ学習をさせなくても良い  
 ・医療従事者教育によく活用されている

**グループのまとまりに関する要因**  
 ・少人数  
 ・メンバーの多様性(成績や興味など同じ性内の学生だけにならない)  
 ・メンバーの固定  
 ・メンバーの協力的な進捗(作業スペースに配慮)  
 ・メンバーの交流を要する課題設定(共同作業が必要な課題設定)  
 ・メンバー毎々の責任性(事前学習を全員が行う)  
 ・メンバー共通の目標(習得一つの課題を行う)  
 ・グループの成功に対する報酬(成績などへの反映)  
 ・内容的類似/グループ間の比較(他チームからの評価)

**効果的なチーム課題の特徴(4つのS)**  
 ・学生にとって重要な課題 (significant to students) を取り上げる  
 → 評価・訓練立案は言語聴覚士にとって中核的な業務  
 ・クラス全員が同じ (same) 課題に取り組み  
 → 同一症例を使った課題  
 ・学生が意見をもちた (specific) 選択をするように仕組む  
 → 理由を記載する  
 ・チームが同時に (simultaneously) 自分たちの選択を発表  
 → ポスター掲示により発表

個人学習 × チーム内の学習 × チーム間の学習 = 学習の効果

### 2-2. 本演習の概要

・対象授業: 3年生発達障害言語学演習Ⅱ(後期・臨床実習終了後)の後半6コマ  
 ※前半は、いくつかの検査の演習  
 ・課題内容: 11歳 男児 学習障害のケースをもとに  
 評価しいくつかの検査結果をもとにケースの評価報告書を作成  
 訓練計画立案: 上記の評価が終了した次の回の訓練計画の立案  
 ※全チームが同一事例に取り組む  
 ・チーム編成方針: チームメンバーの多様性を確保するため、GPAや関係の試験成績順に  
 均等にチームに割り振る  
 ①チーム(6名/team) or 5チーム(5名/team)

### 6コマの流れ→

**1コマ目(診断演習・チームビルディング) ⇒**  
 ・チームの発表 (以下、チームでの学習)  
 ・症例提示: 年齢、性別、主訴のみ提示される  
 学生は主訴に基づきまず行うことが必要な検査を相談  
 → 教員はその検査名、その理由を伝える  
 → 教員はその検査の結果のみ学生に提示  
 → 学生はその検査結果を検討し、次にする検査を相談  
 言語診断(障害)名となぜそれに至ったかについて、教員に説明をする

**1コマ目~2コマ目の間(時間外学修) ⇒**  
 ・1コマ目終了後に、学生には1コマ目のケースの全ての検査結果が与えられる  
 ・検査結果は、LMS(moodle)によりインターネットを使って学生は自由に閲覧ができる  
 ・それに基づき、個人で評価報告書を作成  
 → 2コマ目終了後提出(個人評価)  
 ※この課題をしっかりと行うことが、次のコマのチーム学修でのチームへの貢献へつながる

### 2コマ目、3コマ目(チーム報告書) ⇒

**2コマ目(チームで評価報告書を作成)**  
 ・各自作成の評価報告書を基に、チームで評価報告書を作成  
 A4判一枚以内でワープロソフトで作成し提出  
 ・教員が収集後に各チームの報告書を大型プリンターでA0判ポスターに印刷し、教室内に掲示  
 2コマ連続 ↓  
**3コマ目(他チーム報告書を開覧、評価し、その後全体で議論)**  
 ・掲示されたポスターを1チーム分15分程度で閲覧  
 ・チームで相談し、各チームの評価報告書について優れた点、改善が必要な点、各1点ずつ用紙に記載  
 ・全体で上記の用紙を読み上げながら、フィードバックおよび議論

### 3コマ目~4コマ目の間(時間外学修) ⇒

・チームや個人作成の評価報告書を基に、次の回の訓練計画を考える  
 ・個人で訓練計画書を作成  
 → 5コマ目終了後提出(個人評価)  
 ※この課題をしっかりと行うことが、次のコマのチーム学修でのチームへの貢献へつながる

### 4コマ目、5コマ目(チーム計画作成)

**4コマ目(チームで訓練計画を作成)**  
 ・各自作成の訓練計画を作成  
 ワープロソフトで作成し提出(図、写真、表など利用可)  
 ・教員が収集後に各チームの報告書を大型プリンターでA0判ポスターに印刷し、教室内に掲示  
 2コマ連続 ↓  
**5コマ目(他チーム計画書を開覧、評価し、その後全体で議論)**  
 ・掲示されたポスターを1チーム分15分程度で閲覧  
 ・チームで相談し、各チームの訓練計画について優れた点、改善が必要な点、各1点ずつ付箋に記載し貼る  
 ・優れた点について全体で共有、

**結果等の検証(学生へのアンケートによる)**  
 ・6コマ目終了直後に全学生へアンケート実施(匿名回答)  
 ・成績評価と無関係であることを保証  
 ・質問項目  
 下部の質問について、同じ質問項目について複数コマ(1,2,3)とそれぞれ別(4,5,6)についてVenn Diagram Analysis(4,5,6)により「全く同意しない」「一部同意する」の間に回答する方まで回答を求めた。  
 (1) 楽な説明、資料の適切性、必要な変更を得たか、(2) 都合よく、当分の学習を行った、(3) 身に覚えがない、(4) 成績向上で理解が深まった、(5) 目標とする状態に近づいたか、(6) 授業内容が良かったか  
 ※アンケートに利用した資料の複製  
 TBLを用いた演習の感想・意見(自由記述)

**5コマ目~6コマ目の間(時間外学修)**  
 教員が、ポスターへのコメント事項を訓練計画ファイルに導入したファイルを作成  
 Moodleに掲載し、学生はそれを閲覧。(自チームへのコメントを見る)  
**6コマ目**  
 ・自チーム訓練計画への改善点コメントをチーム内で検討(反論や説明不足の補足)  
 ・各チームごと改善点についてのコメント(反論や補足)を求めたり、それに基づいて議論。教員が質問をすることもあり  
 症例のまとめ(教員)  
 ☆診断や評価の際のポイントとなる点  
 ☆訓練計画について  
 ☆提示ケースの実際の経過や実際の訓練内容

**ポスター閲覧の様子**  
 コメントが入ったポスターの例⇒

## 3. 成果

- 学修内容に対する教授方法は、本演習の内容には合致している
- 学修の成果(更に学びたい、身に付いた、将来生かせる)も、学習内容とその教授方法において適切であった
- TBLによる演習は、能動的に学習している感覚や知識の統合、時間外の学習を促す仕組みとして効果があった

## 4. 課題

- ✓ チーム数: 1チームあたり5名以下が各学生の責任ある参加にはちょうどいいが、ポスター閲覧時間、討論時間がより必要であり、バランスが難しい。
- ✓ 症例数: 1症例にじっくり取り組めるが、症例の多様性が足りない
- ✓ ポスターを印刷する時間がかかる(20分くらい必要)。この時間が短縮できれば、討論やフィードバックの時間を増やせる。
- ✓ ケースの情報がもっと必要か?(学校での様子や検査での反応内容の記録など)
- ✓ やはりピア評価(学生同士での評価)は必要か?

# テーマ「地域活動を通じたアクティブラーニング」

報告者：金子努

## 1 はじめに

人間福祉学科では、将来、包括的な地域ネットワークづくりの担い手として、チームアプローチを実践できるソーシャルワーカー(社会福祉士・精神保健福祉士)の育成を行っている。そのためには、学生自らが学内の教育にとどまらず、地域社会へ参加し積極的にアクティブラーニングしていくことが求められる。アクティブラーニングの一環として、2012(平成24)年度より、人間福祉学科が“基町地域包括支援センター”及び“ほのぼのサロン基町”と協働して、基町住宅に居住する高齢者宅を月1回の頻度で訪問活動を実施した。2013(平成25)年度からは人間福祉学科の学生が中心となりボランティア活動を展開している。そして、2015(平成27)年度には、対象を子どもや外国人居住者まで広げ、さまざまなイベントを企画実施し、居場所づくりと交流の促進を図っている。

## 2 基町住宅の見守りボランティア活動の概要

見守りボランティア活動の訪問先は、基町住宅に居住の高齢者で、学区社会福祉協議会(ほのぼのサロン)の見守り活動に登録した高齢者である。具体的な活動は、毎月第三土曜日に学生が2人1組で個別に訪問するものである。



## 3 子ども、外国人居住者を対象としたイベントの企画・実施

2015(平成27)年度、新たな活動として、地区住民との協議を重ね、高齢者と子ども・若者との異年齢及び異文化交流を図るイベントを企画した(表1参照)。そして、外国にルーツをもつ子どもや保護者のニーズを把握することを目的とした質問紙調査を実施した。そして、誰もが集える拠点づくりを意図して、学生と教員、地域住民と一緒に基町住宅地域を探索し、拠点となる可能性のある場所を抽出した。その成果物として探検マップを作成した(資料1参照)。

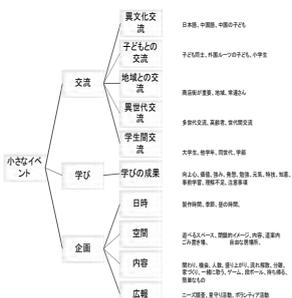
## 4 学修成果

学生は、基町住宅の見守りボランティア活動を通して、「ソーシャルワーカーが身につけておくべき、「価値」「職業倫理」「専門知識」「専門技術」の重要性を体感し、さらに向学心が向上し、新たな学びへと結びつき、将来自分の進むべき道を選択するうえでも役立っている。

学生自身の振り返りで挙げた学修成果には次のものがある。1点目は「やりがい」と「自己肯定感」の向上である。ボランティア活動のなかで、地域の高齢者から頼りにされ、学生は「自分が必要とされている」「認めてもらっている」といった承認の欲求を満たされる。2点目は、ソーシャルワーカーに求められる視点の獲得である。ソーシャルワーカーは、人間の生活の営みを社会との関係で捉え、個人で対応できることと社会的対応の必要なこととを峻別しながら援助する。そうした視点を見守りボランティア活動を通して培っていた。



「小さなイベント」の評価(参加学生)



## 5 今後の課題

活動への参加の促進と継続が課題である。基町住宅の見守りボランティア活動は任意の活動である。学生は、活動の継続を可能にする要因として、振り返りの重要性とその振り返りを通して「自分が得たもの」を実感できたことを挙げている。また、参加の促進については、教員からの働きかけに加え、学生同士のロコミを挙げている。今後は活動の場を増やし、一人でも多くの学生の参加を可能にしていくことも課題である。

表1 イベントの企画

実施計画	実施方法	予行の調査・準備
子ども・外国人居住者との交流	基町住宅見守りボランティア活動	子ども・外国人居住者との交流
異文化交流	異文化交流イベント	異文化交流イベント
子どもとの交流	子どもとの交流イベント	子どもとの交流イベント
地域との交流	地域との交流イベント	地域との交流イベント
異世代交流	異世代交流イベント	異世代交流イベント
学生間交流	学生間交流イベント	学生間交流イベント
学びの成果	学びの成果発表会	学びの成果発表会
日時	日時	日時
空間	空間	空間
内容	内容	内容
広がり	広がり	広がり

資料1



県立広島大学 総合教育センター（全学共通教育部門）

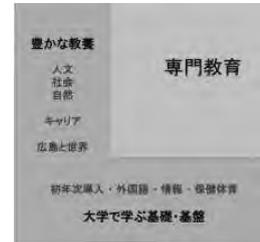
五條 小枝子（全学共通教育「広島と世界」担当主任） 馬本 勉（副センター長・教育改革担当）

《 背景・目的 》



- ・平成 27 年度、**新たな全学共通教育プログラム**がスタート
- ・大学で学ぶ基礎・基盤科目／専門と並び立つ豊かな教養を身につける科目  
【L（エル）字型】に配置 ⇒
- ・「広島と世界」という科目群を新設（各 2 単位、選択科目）

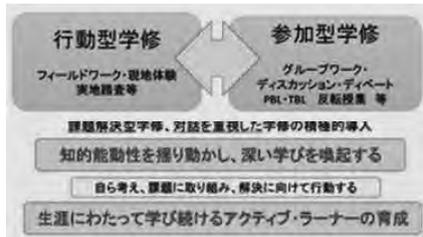
県大生として学ぶ広島と世界	ボランティア活動
地域の理解	地域情報発信論
留学生と学ぶ広島	異文化としての日本
海外研修 I・II	



「広島と世界」カリキュラムポリシー

- 1 学修目標 地域（広島）への理解と、世界とのつながりへの理解とを踏まえ、その理解や知識を応用・活用し、行動する力を養います。
- 2 学修成果 (ア) 今を生きる人間としての幅広い知識を身につけ、時代の変化に柔軟に対応できる力が身につきます。(イ) 異文化への理解をもとに、物ごとの本質を見抜いて行動する力が身につきます。
- 3 学修環境 (ア) 「遠隔講義システム」を活用し、3 キャンパスの学生が共に学べる機会を提供します。(イ) フィールドワークにより、地域の課題を肌で感じ取る機会を提供します。(ウ) グループワーク、ディスカッションや合同発表会等を通じて、コミュニケーション能力を高めるとともに、協働して物ごとを解決することの大切さを体感する機会を提供します。(エ) 留学生と日本人学生との交流を主眼とする科目を設け、文化的背景の異なる者どうしが理解し合い、共に生きることの意義を学ぶ機会を提供します。

《 概要・成果・課題 》



- ◆ 行動型学修を通じた、学外で現地体験（フィールドワーク、実地調査）
  - ◆ 参加型学修を通じた、経験の共有と内省（ディスカッション、グループワーク）
  - ◆ 成果発表を通じた、学修内容の整理（合同発表会、プレゼンテーション）
- 「広島と世界」における授業設計



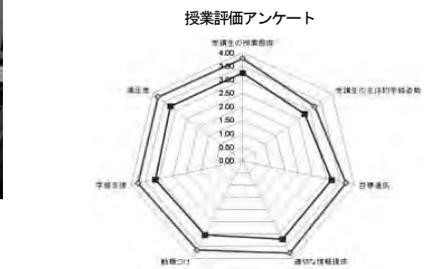
「地域の理解」 神楽団との交流

県立広島大学型アクティブ・ラーニング (Campus Linkage Active Learning: CLAL) : 平成 26 年度 大学教育再生加速プログラム(AP) テーマ I (アクティブ・ラーニング) に選定

取組の概要 (科目名・特徴)	成果と課題
<p><b>地域の理解</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィールドワークを核とし、講義と連動させたプログラム</li> <li>・グループを組んで行うフィールドワークと成果発表会</li> <li>・感想カード記入時間（毎回 10 分）の設定による振り返り</li> </ul>	<p><b>成果</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 体験学修や合同発表会を積極的に実施することにより、キャンパスを越えた学修を促進することができた。これにより、専門の異なる学生間のコミュニケーションが生まれ、協働性の涵養につながった。</li> <li>2) 新たな発見や広い視野を獲得することにより、学生が「自ら発見する喜び」を感じ、深い学びへいざなうことができた。これは主体的な学修姿勢につながるものと思われる。</li> </ol> <p><b>課題</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 「広島と世界」での AL 実践を他の科目群担当者と共に、全学共通教育プログラムへ体系的に組み込む。</li> <li>2) AL に対する学生への意識付けを高める。</li> <li>3) きめこまかな支援のための学修環境を整備する。</li> </ol>
<p><b>地域情報発信論</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中国新聞社スタッフと大学教員の協働による授業運営</li> <li>・サテライトキャンパス集中講義、キャンパス混成グループ編成</li> <li>・正解のない地域の問題をテーマに情報を集め、発信する力を修得</li> </ul>	
<p><b>留学生と学ぶ広島</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各国からの留学生と交流・フィールドワーク・議論</li> <li>・興味に応じたフィールドワーク先選択</li> <li>・事前・事後レポートによる知識の定着</li> </ul>	
<p><b>異文化としての日本</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生と対面してのディスカッション</li> <li>・非母語でのプレゼンテーション</li> <li>・異文化に触れ、日本を捉え直す</li> </ul>	

「地域情報発信論」授業展開 <参加型学修+行動型学修>

年度	平成 28 年度
テーマ	オバマ大統領の広島訪問を評価する
事前課題	「今日の押し記事」の概要と自他の意見（2 日分）
第一日	1 インTRODクッション、グループ分け 2 事前課題の確認、グループ討議 3 グループ討議の内容を発表し、全体で共有
第二日	4 記者の仕事学ぶ 5 オバマ大統領・広島訪問の経緯 6 オバマ大統領広島訪問をめぐる評価/取材計画の立て方
第三日	7 取材実習(1) 写真撮影指導/取材内容の確認 8 取材実習(2) オバマ大統領の歩いた道をたどる 9 記事風レポートのまとめ方
第四日	10 記事風レポート発表: グループ討議 11 グループディベート: グループ見解をまとめ、発表
第五日	12 ポスター発表のポイント、実習 13 ポスター仕上げ 14 ポスターセッション 15 ポスターセッション・合評、まとめ
事後課題	振り返りレポート「オバマ大統領の広島訪問を改めて評価する」





## (6) 教育改革フォーラムの開催

AP 事業に選定されて毎年度末に実施している教育改革フォーラムは 3 回目を数えた。高大接続へ向けて大きく舵を切った平成 28 年度は、広島県において学びの変革を推進する高等学校の実践例を学ぶとともに、本学の教育改革の取り組みを紹介した。

2 年間の事業期間延長に際し、高大接続とともに新たな柱に加えたのが「学修成果の可視化」であった。それを具現化するルーブリックの取り組みが学内で大きく動いていることから、それを牽引している学科の取り組みを取り上げた。

### 資料

- (6)－1 平成 28 年度県立広島大学教育改革フォーラム チラシ
- (6)－2 講演資料 

{	立上良典 学校法人鶴学園初等中等教育研究センター長
	前広島県立西条農業高等学校長
- (6)－3 取組報告資料 (馬本 勉 学長補佐 / AP 事業推進部会長)
- (6)－4 実践報告①資料 (丸山浩明 総合教育センター副センター長)
- (6)－5 実践報告②資料 (三苦好治 生命環境学部環境科学科教授)

## 教育改革フォーラムの開催について

平成28年度AP事業の総括として開催した「平成28年度県立広島大学教育改革フォーラム」について、開催概要及び参加者等を次のとおり報告する。

### (1) 開催概要

- 日 時 平成29年3月3日（金）14:00～17:40
- 場 所 広島キャンパス 2143大講義室  
庄原キャンパス 1201講義室（遠隔受信）  
三原キャンパス 1101大講義室（遠隔受信）
- テーマ 「アクティブ・ラーニングと高大接続」

時刻	内容	登壇者・発表者等
14:00～14:10	開会挨拶, 趣旨説明	○中村健一学長 ○馬本勉学長補佐
14:10～15:20	講演「高等学校におけるアクティブ・ラーニングと高大接続改革」	○立上良典学校法人鶴学園初等中等教育研究センター長
15:30～16:30	大学実践事例「アクティブ・ラーニングを通じた人材育成の課題」	○馬本学長補佐 ○丸山浩明総合教育副センター長 ○三苦好治環境科学科教授
16:35～17:35	全体討議	○立上センター長, ○見館好隆北九州市立大学准教授, ○丸山副センター長, ○三苦教授, ○馬本学長補佐 講評: 肥後功一島根大学大学院教育学研究科教授
17:35～17:40	閉会挨拶	○西本寮子副学長
17:50～19:00	情報交換会	希望者

### ● 参加人数

区分		広島	庄原 (遠隔)	三原 (遠隔)	計
学外	高等学校 教員	36	—	1	37
	他大学 教職員	30	—	—	30
	その他（教育行政・企業・一般）	10	—	—	10
学内	県立広島大学 教員（登壇者含む）	50	15	32	97
	県立広島大学 職員	24	2	2	28
	県立広島大学 学生（SA含む）	3	2	—	5
合計		153	19	35	207

### (2) 参加者からの主な意見・感想等

#### 【本学教職員】

- ・多様な能力を持つ生徒さんをどのように評価していくかについて考えさせられる、大変参考になる講演でした。

- ・[講演] 高度な取組の実践紹介で、大学教育を考える上で非常に参考になる部分があった。高校でのアクティブ・ラーニングを前提とした入試改革は急務であると感じた。
- ・時間が短く感じるほど、とても内容の濃いフォーラムだった。
- ・庄原キャンパスの取組に刺激を受けました。国際文化ももう少し進めていく必要があると痛感させられました。
- ・[講演] 高校教育改革がどのような方向に進もうとしているのかについて、多くの情報を得ることができた。
- ・今回の西条農業の話聞いて、本学の立ち位置はどうか・どうすべきかを考えるきっかけとなった。連携が広大中心となっており、本学は関連する学部があるのにほとんどなかったためです。
- ・高校での学びに接続するような授業内容を検討する必要を感じました。
- ・高大接続というテーマだったが、高校側からの課題は提出されていたと思うが、大学側からの意識はよくわからなかった。
- ・時間が長すぎる。
- ・ルーブリックを用いた学修指導が学修成果の可視化、学生と教員の目標共有（企業で言うところのMBO）に役立つことは理解できるが、アクティブ・ラーナー養成とどの程度深い関係があるのかわからない。短期的な評価（ルーブリック）では、目的（アクティブラーナー養成）の達成は議論できないのでは？
- ・本学内で、AL・FDの取組が一部の主体的な教員のみでしか行われていないことが残念である。FDerの拡大、教員の意識改革が進むことを強く望みます。あわせてAP事業をより充実してもらいたい。

### 【高等学校教員】

- ・[大学実践紹介] 大学の研究室で当然のように行われていることが、ルーブリックという形で具現化した所に、(点数に捉われない形での)フレキシブルな形での高校教育が行われる日が来ることに希望を感じた。
- ・庄原キャンパスの先生方には、本校に理数コースがあった頃から、大変お世話になっております。大学内の教育改革の内容がわかり、大変参考になりました。大学での育てたい学生像と本校での育てたい生徒像が一致しており、三次高校の教育の取組に自信をもつことができました。ありがとうございました。
- ・[大学実践紹介] アクティブ・ラーニングの話は、小学校での実践が多く、高校教育にあわないことが多いです。本日のお話は、高校教育にとってとても参考になる内容でした。
- ・[講演] 学力の定義に従って学校作り・授業作りをされたこと、原点を再確認させられる内容でした。思考の深みが日を追うごとにみられる成果がよくわかりました。何事も「どのような力を身につけさせるか」という視点が重要だと思いました。
- ・[大学実践紹介] アクティブ・ラーナーというのが生涯にわたって学び続ける人間という定義が理解でき、そのための教育という視点に共感ができた。
- ・大学は本気で授業や学びの質を変えようとしていることが良くわかった。大学を変えるには、教員ひとりひとりが変わらなければならない、その意思が感じられた。高校はまだ本気になっていない。教員間に意識の差が生じている。
- ・最後の副学長先生のあいさつ、まず教職員の意識が…高校も同じです。まず自分自身が、

そして生徒がアクティブ・ラーナーになれるようにがんばります。

- ・大学は本気。高校も本気でアクティブ・ラーナーを育成していきたい。自分自身がアクティブ・ラーナーになることが出発点である。

#### 【他大学教職員】

- ・[大学実践紹介] 所属大学では、資格試験（国家試験）に向かった教育に学生も教員も興味があり、アクティブ・ラーニングを積極的にとり込む例が少なく、うらやましいと思いました。
- ・先生方のお話を聞き、様々納得し、疑問を持ちました。知的好奇心を揺さぶられ、頭の中がアクティブな有意義な時間となりました。ありがとうございました。貴学で非常勤講師もさせていただいております。非常勤にも研修等のお知らせがいただければと思います。
- ・ルーブリックを使用した教育がそんなにアクティブ・ラーナー養成に有用なのか？よくわからなかった。あった方がベターなのはよく理解できるが、それ以上の有用性がどれほどあるのか？
- ・プログラムは大変有意義でした。本学にとっても課題なのですが、本日フロアの熱気が感じられなかった点が、外部からの私にとっては意外でした。大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・高・大・産の連携において、AP・CP・DP・入試を連続させることは前提と捉えている。今課題となっているのは、その具体策ではないか？人材の有効活用を含めて、高大産連携の具体的な取り組みを考えていきたい。

#### 【一般・企業等】

- ・[大学実践紹介] パンフレット等では見えない、教育改革・授業づくり・評価をする上での課題がよくわかりました。特に評価の重要性を強く感じました。
- ・スポットライトが当たる子の陰で、当たりにくい子や、その評価について、SSHが切れた後のお話がとてもうれしかったです。

### (3) フォーラムの様子





文部科学省  
大学教育再生加速プログラム「高大接続改革推進事業」  
テーマⅠ：アクティブ・ラーニング  
(平成26年度選定事業)

参加  
無料

平成28年度 県立広島大学教育改革フォーラム

# アクティブ・ラーニングと 高大接続



平成29年 **3月3日** (金)  
14:00～17:40 (受付開始 13:30～)

県立広島大学  
**広島キャンパス 2143大講義室**  
(遠隔配信) 庄原キャンパス 1201講義室  
三原キャンパス 1101大講義室

## ▼ プログラム

司会：本岡 直子 全学共通教育部門長

14:00～14:05	開会挨拶	中村 健一 学長
14:05～14:10	趣旨説明	馬本 勉 AP事業推進部会長
14:10～15:20	講演	「高等学校におけるアクティブ・ラーニングと高大接続改革」 立上 良典 学校法人鶴学園初等中等教育研究センター長 前広島県立西条農業高等学校長
15:20～15:30	休憩	
15:30～16:30	大学実践紹介	「アクティブ・ラーニングを通じた人材育成の課題」 実践報告①「アクティブ・ラーニングを中心に据えた教育改革の取組」 丸山 浩明 総合教育センター副センター長 馬本 勉 実践報告②「ルーブリック教育がアクティブ・ラーナー養成に如何に効果的か」 三苫 好治 生命環境学部教授・環境科学科FDeR
16:30～16:35	休憩	
16:35～17:35	全体討議	「主体的な学びのリレーへ向けて」 登壇者 立上 良典 見館 好隆 北九州市立大学准教授/県立広島大学AP評価委員会委員 丸山 浩明 三苫 好治 馬本 勉 (コーディネーター) 講評 肥後 功一 島根大学大学院教育学研究科教授/県立広島大学AP評価委員会委員長
17:35～17:40	閉会挨拶	西本 寮子 副学長(教育・学生支援担当)
17:50～19:00	情報交換会	会場：広島キャンパス食堂 (参加費 2,000円)

## ▼ お申し込み 3月2日(木)までに、下記のいずれかの方法によりお申し込みください。

### ■ WEBからのお申し込み

本学ホームページ(下記URL)内の専用申込フォームにアクセスの上、必要事項を入力し送信してください。(QRコードから直接フォームにアクセスできます。)

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/>



### ■ メールでのお申し込み

①氏名, ②所属, ③連絡先(電話番号またはメールアドレス), ④情報交換会への参加有無を明記の上, 下記アドレスまで送信してください。

E-mail. [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

### ◆ 広島キャンパスへのアクセス

【市内電車】県病院前電停から徒歩7分  
【広電バス】県立広島大学前(広島キャンパス) 徒歩1分  
【広島バス】県立広島大学前(広島キャンパス) 徒歩1分

※ 駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。

### ◆ お問い合わせ

県立広島大学 AP事業推進部会(本部経営企画室内)  
〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目1番71号  
TEL. 082-251-9727 FAX. 082-251-9405

県立広島大学  
Prefectural University of Hiroshima

平成28年度  
 県立広島大学 教育改革フォーラム  
 教育ネットワーク中国第4回研修会  
 同 高大連携研究交流会

大学教育再生加速プログラム

大学実践紹介 アクティブ・ラーニングを通じた人材育成の課題

## アクティブ・ラーニングを中心に据えた 教育改革の取組

丸山 浩明（総合教育センター副センター長）  
 馬本 勉（AP事業推進部長）



## 大学教育再生加速プログラム (AP)

「高大接続改革推進事業」	[テーマⅠ] アクティブ・ラーニング	テーマ内、テーマ間の連携強化と積極的な情報発信
	[テーマⅡ] 学修成果の可視化	
	[テーマⅢ] 入試改革・高大接続	
	[テーマⅣ] 長期学外学修プログラム(ギャップイヤー)	
	[テーマⅤ] (新規) 卒業時における質保証の取組の強化	

(文部科学省ウェブサイトより)

平成28年度「大学教育再生加速プログラム」適定取組

大学名：県立広島大学  
 テーマ：テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）

取組概要：学修活動を組み込み、主として学外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を磨き出し、学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を具現化する全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー）の育成を目指す。

県立広島大学型 アクティブ・ラーニング *ampus linkage active learning*

行動型学修 学生の主体性を育む能動的学修 参加型学修

学修成果の可視化

学修環境の整備 交流会をリードする学生の育成 教職員研修の充実  
 行動型学修実践支援 学修アドバイザー養成 ファカルティ・ディベロプメント

学修者のリーダーシップの育成、教育活動の活性化、本学での学びに関する学生の意識向上を促す。卒業生の進路により進路への効果も期待。

学修者のリーダーシップの育成、教育活動の活性化、本学での学びに関する学生の意識向上を促す。卒業生の進路により進路への効果も期待。

学修者のリーダーシップの育成、教育活動の活性化、本学での学びに関する学生の意識向上を促す。卒業生の進路により進路への効果も期待。

## CLAL例

フィールドワーク、実地調査、3キャンパス合同発表会、事前・事後レポート、学外実習、反転授業、振り返りシート、ディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、ワールドカフェ、クリッカー、コメント票の赤ペン添削、ラベルワーク、シャドーイング、シミュレーション、屋根瓦式教育、プレイバックシアター、訪問活動、ボランティア活動、Team Based Learning, etc.

## 学修成果例

知識の統合、自分なりの解法、専門の異なる学生間のコミュニケーション、新たな発見、幅広い視野、協働性の涵養、自ら発見する喜び、深い学び、主体的な学修姿勢、学修の体系化を構想、行動の省察、他者への共感、経験の共有による参加者間の関係深化、キャリアを意識づけるための機会、多重課題に対応する考え方、臨床をイメージ、自尊感情、自己効力感、時間外の学修を促す効果, etc.

参考資料

# 県立広島大学における 教育改革の取組について



大学教育再生加速プログラム

平成28年度  
広島県高等学校教育研究・実践合同発表会  
(第5回 FDer養成講座) (H29. 1. 27.)  
報告資料より

馬本 勉  
県立広島大学 学長補佐  
(教育改革・大学連携担当)

## 本報告の流れ

- 1) AP事業とアクティブ・ラーニング
- 2) 県立広島大学の教育改革とAPの取組
- 3) 大学教育改革の課題と高大接続

## 大学教育再生加速プログラム (AP) Acceleration Program for University Education Rebuilding

- 高等学校や社会との円滑な接続のもと、入口から出口まで質保証の伴った大学教育を実現するため、先進的な取組を実施する大学等(短大、高専を含む)を支援することを目的としています。

(文部科学省／日本学術振興会HPより)

## APの概要

平成26年度選定 ( )内は選定校数

- テーマⅠ： アクティブ・ラーニング(9)
- テーマⅡ： 学修成果の可視化(8)(\*複合型21)
- テーマⅢ： 入試改革(3)・高大接続(5)

平成27年度選定

- テーマⅣ： 長期学外学修プログラム(12)

平成28年度選定

- テーマⅤ： 卒業時における質保証の取組の強化(16)

## アクティブ・ラーニング(AL)とは

- 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。

中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための  
大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)」

(以下、「質的転換答申」)

## アクティブ・ラーニング(AL)とは

- 学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

「質的転換答申」

平成26年度「大学教育再生加速プログラム（AP）」選定  
 テーマⅠ  
 （アクティブ・ラーニング）

県立広島大学型アクティブ・ラーニング  
 Campus Linkage Active Learning



大学教育再生加速プログラム

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」選定取組

大学等名：県立広島大学  
 テーマ：テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）

県立広島大学型 アクティブ・ラーニング Campus Linkage Active Learning

学生の主体性を育む能動的学修

行動型学修 参加型学修

教室外での学びを取り入れる 40%の能動性を盛り込む

学生間交流、地域との交流、異文化交流、フィールドワーク、実地体験、実地調査等、グループワーク、ディスカッション、ディベート、PBL、TBL、反転授業等

学修支援

学修環境の整備、支援体制の構築、授業アドバイザー育成、授業アドバイザー養成、授業アドバイザー養成

数値マシクメント、体系的なカリキュラム、教育方法の見直しと充実、自己評価システム、生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー）

アクティブ・ラーニングを実施する学修の割合、アクティブ・ラーニングを実施する学修者の割合、アクティブ・ラーニングを実施する学修者の割合

Acceleration Program for University Education Rebuilding  
 平成26年度選定 テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）  
 県立広島大学のAP取組概要

地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かし深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。

これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー）の育成を目指す。

県大型アクティブ・ラーニング（CLAL）  
 教育方法の見直しと充実  
 ⇒アクティブ・ラーナーの育成へ

行動型学修  
 フィールドワーク・現地体験  
 実地調査等

参加型学修  
 グループワーク・  
 ディスカッション・ディベート  
 PBL・TBL 反転授業 等

課題解決型学修、対話を重視した学修の積極的導入

知的能動性を揺り動かし、深い学びを喚起する

自ら考え、課題に取り組み、解決に向けて行動する

生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成

全県域をフィールドとする県立広島大学の特色を活かした教育の実践

距離をプラスにする仕組みづくり

それぞれ100km離れた3つのキャンパスとサテライトキャンパス

遠隔講義

キャンパス移動

フィールドワーク合同発表会など

アクティブ・ラーナーの育成

幅広い教養と高度な専門性に支えられた確かな実践力と課題解決力を身につける

能動的学修 組織的な取り組み

特色ある4つの学部  
 教育効果をさらに高める

体系的なカリキュラム

高い研究力に基づく確かな教育力をさらに高める

授業改善の取り組み  
 教育方法の工夫

計画的AL導入

行動型 参加型

県立広島大学型AL手法例  
 Campus Linkage Active Learning (CLAL)

- 行動型学修
  - フィールドワーク、体験学習、他キャンパスとの交流を伴う学修、その他(実習・実技)
- 参加型学修
  - ミニツッペーパー、振り返り、プレゼンテーション、グループワーク、ディスカッション、ディベート、ワークショップ、PBL、TBL、双方向授業、反転授業、その他(演習・実験)

## 平成27年度 CLAL導入状況

- 導入の目安： 90分授業で20分相当の活動  
(学期中の合計300分以上)
- グループワーク, ディスカッション, プレゼンテーションを中心に導入が進む
- 授業への参加度, 理解度の向上
- 導入困難理由
  - 授業内容, 説明時間減, クラスサイズ

13

## 県立広島大学の教育改革とAP

- 県立3大学統合(H17)以降のFD活動, 高い授業満足度
- 課題: 主体的学修姿勢, 異分野間の協働機会  
⇒ 組織的にアクティブ・ラーナーを育てる

### 教育改革の取組【第2期中期計画 H25-30】

- 教学マネジメントの強化(H25)
- 体系的な学士課程教育プログラム(H27~)
- 教育方法の見直しと充実

## 人材育成目標(平成26年4月)

- 県立広島大学は, 主体的に考え, 課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え, 幅広い教養と高度な専門性に基づいて, 高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。

## 全学共通教育科目の改革(H27)

### 専門教育の役割

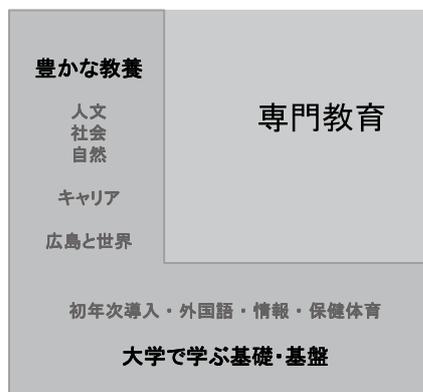
高度な専門的知識・技能を身に付ける

### 全学共通教育の役割

専門分野の枠を越えて必要とされる知識やスキル, 幅広い視野や教養を身に付ける

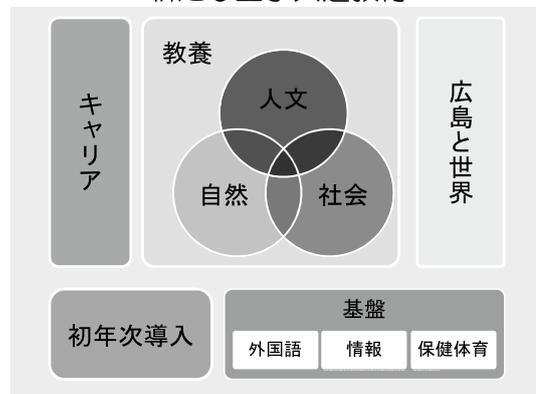
- ・大学で学ぶ基礎・基盤
- ・専門と並び立つ豊かな教養

## 全学共通教育 L(エル)字型モデル



17

## 新たな全学共通教育



18

## 学士課程を通じて身に付けさせたい力

- 学問的成果を踏まえた幅広い知識を習得している。
- 物事を多面的に捉え、自らの考えを組み立て、伝える力を身につけている。
- 課題に気付き、その解決に向けて熟考し、行動を起こすことができる。
- 他者を理解・尊重し、ともに豊かな社会づくりに貢献できる。

## 県大型アクティブ・ラーニングの推進

( )内は最終年度(平成31年度)達成目標

- 1) 参加型, 行動型学修によるAL推進  
(100%の学生が受講)
- 2) ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成  
(30名)
- 3) 学修支援アドバイザー(SA)の養成  
(55名)

20

## 1年目(H26): AP始動

- 全学共通教育プログラム(H27~)策定
- AP推進体制の整備
- CLAL促進策: 行動型学修経費補助
- 環境整備(ラーニング・コモンズ)
- AL実施状況調査

21

## 2年目(H27): 課題の整理と展開

- 個別実践の積み重ね ⇨ 組織的対応へ

平成27年度にスタートした組織的取組

- 新しい全学共通教育プログラム
- ファカルティ・ディベロッパー(FDer)養成
- 学修支援アドバイザー(SA)養成

22

## FDer(教員), SA(学生)

- **FDer:** 担当授業等においてアクティブ・ラーニングを実践し、学科内の他の教員へアクティブ・ラーニングに関する指導・助言を行うとともに、本学におけるアクティブ・ラーニングの普及・浸透に努める(現在36名)
- **SA:** 授業内外において本学学生への学修支援を行う学生であり、他者の学びを支援すること等を通じて、自身が学ぶ喜びを感じ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを目指す(現在42名)

23

## 3年目(H28): 実践と評価

参加型, 行動型学修によるAL推進

- ⇨ ★実践の共有, 評価方法の検討(ルーブリック)
  - ⇨ アクティブ・ラーナーとしての学生の意識向上
- ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成
- ⇨ ★FDerを中心とした組織的研修の企画運営
- 学修支援アドバイザー(SA)の養成
- ⇨ ★教職協働でSAを育成
  - ⇨ ★ラーニング・コモンズ, 授業改善支援等の活動

24

### 参加型, 行動型学修によるAL推進

- 参加型学修の手法に関する検討
  - KJ法, ポスターセッションの導入ほか
  - タブレット端末の整備
  - クリッカーの試行
- 行動型学修の促進
  - フィールドワーク, 合同発表会等
- 情報発信(講演, 成果報告)
  - ★ 教育改革フォーラム(3月3日)

25

### ファカルティ・ディベロッパー(FDer)

- 第1回 FDer養成講座(8月24~26日)
  - ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ
  - メンター6名, メンティー5名
- FDer連絡調整WG(8月1日)
- 第2~4回(12月9・12・21日)
  - 3キャンパスのニーズに応じたFD企画
  - ICEモデル, ルーブリック, アウトカムズ

26

### ファカルティ・ディベロッパー(FDer)

#### FDerの役割

- 授業改善の推進
- 授業ピアレビュー
- ルーブリック作成の検討
- 学修支援アドバイザーとの連携
- FDer養成講座の運営

27

### 学修支援アドバイザー(SA)

- 全体研修(3月), 補充研修(4~6月)
- H28前期: ラーニング・コモンズでの学修支援
- H28後期: 「授業支援」の活動を開始
- 新規募集(10~11月)・研修(1月~)

28

### SAの役割①: ラーニングコモンズ

- ラーニングコモンズに待機, 学生の学修相談に応じる。
- 文献検索や課題作成, PC等機器の操作について支援を行う。
- 自身が得意とする教科の学習指導(リメディアル教育)を行う。
- 学修支援や学習指導を内容とする学内イベントを企画・実施する。

29

### SAの役割②: 授業支援

- 事前学修を含む授業外学修のサポートや, 授業内での授業運営支援を行う。
- 授業計画の策定の際に, 教員の求めに応じて, 授業改善に資する意見を述べる。
- 他者を支援・指導する立場として, 知識・見識を広めるための努力をする。

30

## 大学教育改革の課題

FD (Faculty Development) マップ

マクロ: 組織の整備・改革

ミドル: カリキュラム改革

ミクロ: 授業改善

(愛媛大学教育・学生支援機構)

⇒ 高大接続の視点

31

## 「3つの方針」の見直し

- 学校教育法施行規則の一部を改正する省令  
(平成29年4月1日施行)
- 卒業認定・学位授与の方針(DP)
- 教育課程編成・実施の方針(CP)
- 入学者受入れの方針(AP)

32

## DP, CP, APの見直し

- 一貫性・整合性。三者の関係を分かりやすく示す。
- 様々な関係者(多様な入学希望者, 学生, 保護者, 高等学校関係者, 地域社会, 国際社会, 産業界等)が十分に理解できるような内容と表現。
- 学力の三要素(①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③主体性・協働性)を適正に評価し(AP), 発展・向上させる(DP, CP)。

33

## 高大接続へ向けて

- 高等学校との連携
  - ★ 広島県学びの変革に係る説明会・意見交換会(11月21日)
  - ★ 広島県高等学校教育研究・実践合同発表会(1月27日)
- 教育実践の共有, 学び合い

34



県立広島大学 馬本 勉  
[umamoto@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:umamoto@pu-hiroshima.ac.jp)

## ポスター一覧

(次ページより)

- 平成28年度 広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 発表ポスター
  - 全学共通教育の取組
  - 各学科の取組
- SPODフォーラム 発表ポスター
  - 平成27年度
  - 平成28年度

36

## アクティブラーニングを 中心に据えた教育改革の取組

平成29年3月3日  
総合教育センター 丸山浩明

1

### 【内容】 人材育成の課題

- 1 ポリシーの見直しに求められたこと
- 2 学修成果の把握・可視化
- 3 学生の満足度

2

### 1-1 社会からの要望への説明責任

**社会人基礎力**=3つの能力(経済産業省、2006)

- ・前に踏み出す力(アクション)
- ・考え抜く力(シンキング)
- ・チームで働く力(チームワーク)

**グローバル人材育成推進事業**(文部科学省、2012-)

- I 語学力・コミュニケーション能力
- II 主体性・積極性・チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- III 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

3

### 1-2 新たな教育・学習観への対応

「ラーニング・アウトカムズを重視する

- I 「教員中心」 → 「学生中心」
- II 「教育中心」 → 「学習中心」
- III 「個人の教育活動」 → 「組織の教育活動」

↓   ↑  
この科目を学べばしっかり身に付く。  
「カリキュラム改革は学問の改革」

4

### 1-3 ディプロマ・ポリシー(DP)の チェックポイント

- 達成されたかどうかの検証が可能な表現になっているか？
- 最終学年の自学部・自学科の学生が持つ理想的な能力のレベルとして、適切か？
- 企業等(主な卒業生の就職・進学先)、大学生、高校生(受験生)ならびに保護者が理解できる表現になっているか？魅力を感じる表現になっているか？

5

### 2-1 学修成果の可視化と学力の3要素

【学習指導要領では】

「知識・理解」「思考・判断」「関心・意欲」  
「態度」「技能・表現」

【2012年度以降新学習指導要領】

「知識・理解」「思考・判断・表現」「関心・意欲」  
「態度」「技能」

【学力の3要素】(『高大接続改革実行プラン』文部科学省決定2015)

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」  
「主体性・協働性」

6

### 2-2 達成目標 = 成果評価

以下の領域に分けて記述することが多い。

「知識・(理解)」

学問の内容および方法を理解している。説明できる。

「技能」

学問の内容や方法を応用できる。

「思考・判断」

課題について、研究方法を用いて、類別・指摘することができる。

物事を多面的かつ論理的に考察することができる。

7

### 2-2 達成目標 = 成果評価

「表現」

他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に伝えることができる。

「主体性・協働性」

積極的に他者と関わり、対話を通して相互理解に努めることができる。

「関心・意欲」

〇〇学の知を実践の力へと高めることができる。

〇〇学の知をもって地域社会のニーズに答えることができる。

8

## 2-3 評価のチェックポイント

アクティブ・ラーニングを活用するうえで

□意欲・関心(態度)に偏っていないか？

グループ活動の役割や積極性の個別評価

□知識・理解が欠けていないか？

学習した内容が身についたかの修得評価

□能力レベル(=目標=成果)として適切か？

□学生自身が納得する仕組みになっているか？

学生の自己評価や学生同士の評価を取り込む

9

## 3-1 学生の満足度

■アンケート調査の結果(H24-27年度)

『学生による授業評価アンケート』(授業評価報告書)

『学生意識調査』

○「目標とする力が身につく」

○「満足している」 = 90%以上

◆指標としてのルーブリックの活用

全学で共通している「大学基礎セミナー」(導入)

「卒業研究・卒業論文」(統合)を同一の様式で!

10

**学びの評価表** どのような力を求めるか、どのような力がついたか (例示)

初年次導入の「大学基礎セミナー」から深化・総合の「卒業研究・卒業論文」に至るまで、学びを可視化する評価の基本項目を整理する。これにより、学修到達レベルの指標と学生自身の学修目標を明確にする。

項目と基準	4 (統合)	3 (深化)	2 (発展)	1 (基礎)
<b>【知識・理解】</b>	活用・応用できる	根拠や関連が説明できる	定義・説明できる	
1 課題発見、課題設定				
2 内容(論)の構成				
<b>【思考力・判断力】</b> (情報分析力)	統合できる	比較や対比ができる	分類・識別できる	
1 考察・まとめ				
2 資料の作り方				
<b>【表現力】</b>	解決策を提案できる	根拠や意見が述べられる	順序だてて説明できる	
1 説明の展開				
2 伝達する姿勢				
3 資料の作り方				
(4 質疑応答)				
<b>【主体性・協働性】</b>	意欲的に取り組む	積極的である	自立できる、協力できる	
1 実験(調査)・実習する姿勢				
<b>【総合】</b>				
1 教員評価				
(1 ‘教員評価2)				
2 学生自己評価				

## ルーブリック教育が アクティブ・ラーナー養成に如何に効果的か

三苦 好治

県立広島大学 生命環境学部  
教授・環境科学科FDer

### 内容

1. 環境科学科教員の活動内容
2. 社会から求められる人材(=アクティブ・ラーナー)の育成とルーブリックの関係性・必要性
3. ルーブリックとその実践例(個人→組織)
4. ルーブリック及びその概念導入による成果
5. 環境科学科のFD活動状況(補足)

3

## キャンパス紹介と自己紹介



生命環境学部/  
大学院(修士・博士)

❖ 環境科学科  
(環境工学系:物理/化学/生物/統計学分野)

❖ 生命科学科  
・ 応用生命科学コース  
・ 食品資源科学コース

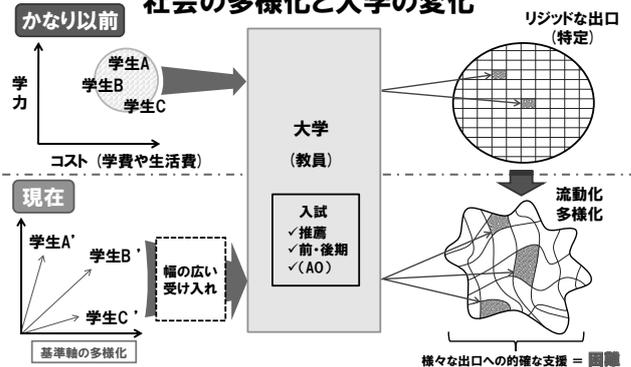
環境科学科  
三苦好治(みとまよしはる)

専門:環境保全学・資源循環学  
mitomay@pu-hiroshima.ac.jp



2

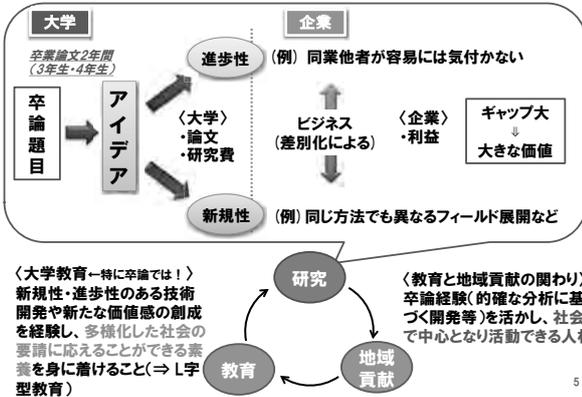
## 社会の多様化と大学の変化



多様化した社会に順応できる学生を育てるために必要な共通項を抜き出し、そのスキル・メンタルを強化する!  
 アクティブ・ラーナー by ルーブリック → ルーブリック教育化!

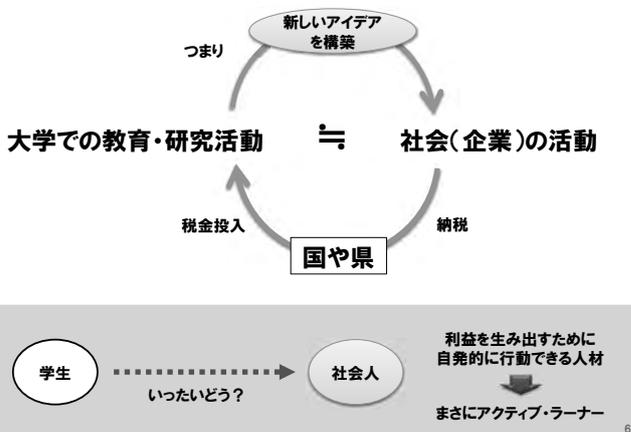
4

## 環境科学科:卒論重視! 理系(環境工学<物理・化学・生物>・社会システム系)



5

## 新たな知の創造とその活用



6

## アクティブ・ラーナーとは!?

学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができる人材

参考:

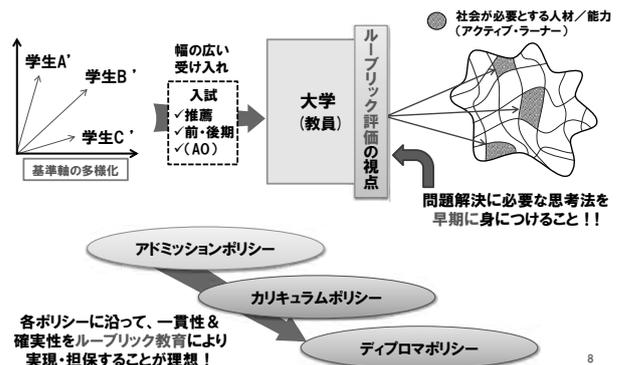
(アクティブ・ラーニング<メソッド>の一般的特徴として挙げられる点)

- a) 学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること
- b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- c) 学生は高次の思考(分析、総合、評価)に関わっていること
- d) 学生は活動(例:読む、議論する、書く)に関与していること
- e) 学生が自分自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること
- f) 認知プロセスの外化\*を伴うこと

\*問題解決のために知識を使ったり、人に話したり書いたり発表したりすること

7

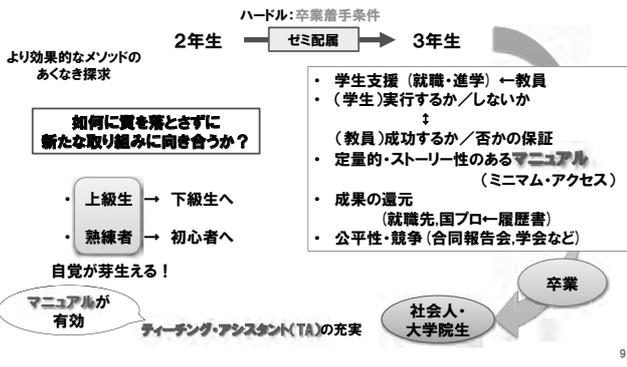
## アクティブ・ラーナー養成に必要なことは!?



8

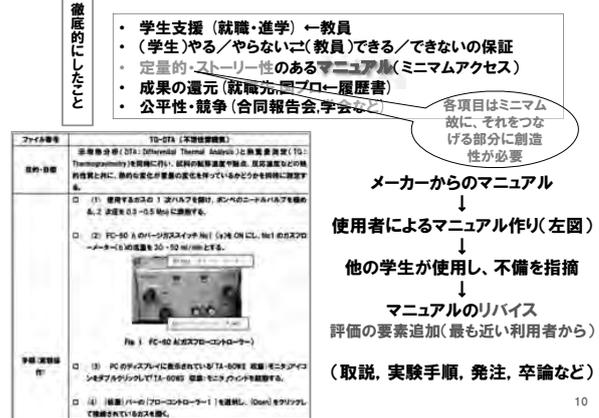
## ルーブリック教育が定着する以前(マニュアル対応)

先ず教員個人でできたことは？ 卒論2年間 (他大学1年間)



9

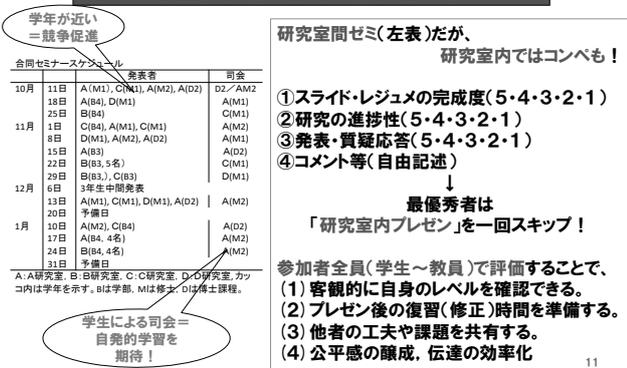
## ルーブリックが定着する以前(評価の視点)



10

## ルーブリックが定着する以前(学生間評価)

### 学生間評価項目の作成と評価



11

## ルーブリックとは

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価基準)からなる評価基準表

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/061/siroo/\\_icsFiles/afilefile/2016/02/01/1366444\\_6\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/061/siroo/_icsFiles/afilefile/2016/02/01/1366444_6_2.pdf)  
(平成28年2月10日アクセス可)

- ・目標に準拠した評価のための基準作りを目指すものである
- ・パフォーマンス評価を通じて思考力、判断力、表現力等を評価することに適している
- ・達成水準が明確化され、複数の評価者による評価の標準化がはかれる
- ・教える側(評価者)と学習者(被評価者)の間で共有される
- ・学習者の最終的な到達度だけでなく、現時点での到達度、伸びを測ることができる

ルーブリック ≡ マニュアル+評価法

c.f. マニュアル 方法と目標(定量化されたもの)から成る卒論遂行に役立つ!

12

## ルーブリックの例~講義~ (30準備済/54科目中)

単元	習得課題	習得内容	後習	良	可	不可
リスク評価	1) 外部データに基づくリスクのあり方を説明する。	リスク評価に関する外部データを読み取れること。	習得課題に対して、外部データを読み取れること。	習得課題に対して、外部データを読み取れること。	習得課題に対して、外部データを読み取れること。	習得課題に対して、外部データを読み取れること。
	2) リスク評価に基づくリスクのあり方を説明する。	資料中の化学物質のリスクを説明できること。	資料中の化学物質のリスクを説明できること。	資料中の化学物質のリスクを説明できること。	資料中の化学物質のリスクを説明できること。	資料中の化学物質のリスクを説明できること。
論文発表	1) 発表の概要とテーマを設定し発表する。	発表概要を正しく設定できること。	発表概要に対して、準備内容を正しく設定できること。	発表概要に対して、準備内容を正しく設定できること。	発表概要に対して、準備内容を正しく設定できること。	発表概要に対して、準備内容を正しく設定できること。
	2) アスワンダム法による論文の作成と発表を行う。	発表内容を正しく作成できること。	発表内容に対して、準備内容を正しく作成できること。	発表内容に対して、準備内容を正しく作成できること。	発表内容に対して、準備内容を正しく作成できること。	発表内容に対して、準備内容を正しく作成できること。
	3) 質疑応答による論文発表の進捗を確認する。	質疑応答を正しく進捗確認できること。	質疑応答に対して、準備内容を正しく進捗確認できること。	質疑応答に対して、準備内容を正しく進捗確認できること。	質疑応答に対して、準備内容を正しく進捗確認できること。	質疑応答に対して、準備内容を正しく進捗確認できること。

環境化学科教員の95%が準備済(他学科との乗り入れ科目は未整備)

学科長主導の下 教務委員・FDerが連携

内容重複/不足整理(削除/維持)

ルーブリック規格化

学科長への結果報告

↓

学部へ

13

## 学科では

(個人から組織へ。FD活動も含む。)

1. アドミッションポリシー
2. カリキュラム・ディプロマポリシー (ルーブリック)
3. 大学基礎セミナー (キャリア養成)
4. 2年生後期のゼミ決め
5. 3年生の中間報告会
6. 4年生の卒論報告/卒論発表会

14

## 大学基礎セミナー(キャリア養成)



【学生A:具体化】私は、各グループの発表を聞き「環境に関わる公務員」の中に出てきた「食品衛生監視員」と「自然保護官」に興味を持ちました。

【学生B:マイルストーンの考えの芽生え】これらの職業を目標に、それに関する授業を自分で選び履修し、自分のやりたい研究を見つけ、3年次の研究室配属も考えていきたいです。これからの自分の将来をいいものにするよう考えたいです。

早期に就職先を見据えることでモチベーションを維持

↓

講義内容と就職先をリンクさせて講義への興味を喚起

↓

発表会を開催し、調査内容を学生間で共有

↓

(課題整理:学科内FD会等) 調査結果についてのお手本(解答)を準備すべき

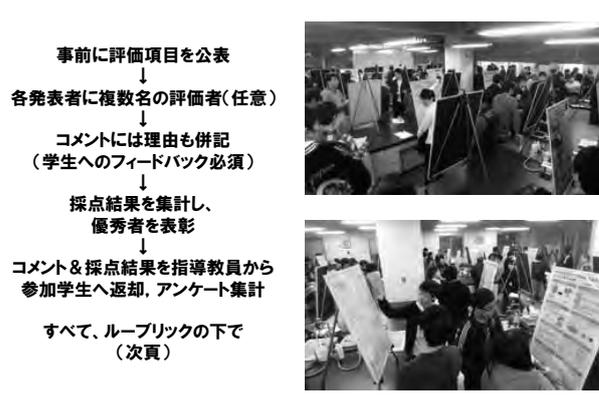
↓

1年生後期科目として環境科学セミナーを新設!

ルーブリックによる定量化で、課題の整理が容易となり実現!

15

## 3年生の中間報告会①



16

## 3年生の中間報告会②

表彰:上位3名  
最優秀者のfacebook  
(本人許可取得)

新履の履の付箋紙とスケジュール帳  
使用中、奮力アタックしている様子によって  
これ以上嬉しいものはありません(笑)  
これからも頑張っていこうと思います。



評価項目	とてよい	よい	普通	悪い
発表内容	発表内容が充実している	発表内容が充実している	発表内容が充実している	発表内容が充実している
発表態度	発表態度がよい	発表態度がよい	発表態度がよい	発表態度がよい
質疑応答	質疑応答が適切	質疑応答が適切	質疑応答が適切	質疑応答が適切
発表時間	発表時間が適切	発表時間が適切	発表時間が適切	発表時間が適切

数値目標がある  
定義が不明瞭  
フォーマットが不明瞭

中間の評価はない

一層の定量化を目指す

## 3年生の中間報告会 (学生側からの回答例:成長した点)



学生C:  
自主性の向上です。研究室の先生に実験のやり方を聞くだけではなく、自分で方法を調べたり、必要な器具を用意したりしました。先生との話し合いでは考えたことを伝えて修正してもらい、準備から片付けまで自分一人で実験をしていくことを意識しました。実験後はどうだったかを確認して、時間の管理や実験のコツを学び考えて次の実験に対して反映していくようになりました。自分の研究に向かい合うことで、自主的な行動が増えたと感じています。

学生A:  
実験で起こる現象についてなぜその現象が起こるのか考えるようになった。参考書を読むときに暗記しようとするのではなく、自分なりに理解しようと思うようになった。

学生B:  
主体的に自分の卒論テーマに向き合うようになった。また、先生とのディスカッションの時間が増えた。相手に伝わりやすい説明ができるようになった。もっと実験を進めたい、と思うようになった。

ルーブリックにより到達地点を効果的かつ具体的に示し、アクティブ・ラーナー化へ

## 4年生の卒論報告/卒論発表会



プレゼン  
(10分間)

質疑応答  
(少なくとも5分間)

発表10分+質疑応答5分程度  
(背景・実験方法・結果と考察・まとめ)  
↓  
各発表者に複数名の教員(専門性の異なる分野も含む)からの質問  
↓  
回答が不十分な場合、レポートも(ときには、厳しい意見も)  
↓  
今後、フィードバックの方法も規格化すべきかもしれない。

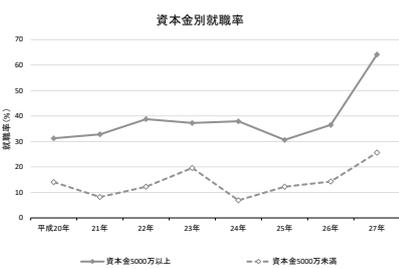
## 学生へのフィードバック①

項目	内容	実績
公的資格の取得支援	エコ検定や公害防止技術者等	受験者・合格者とも増加の傾向 エコ検定:H26 4名、H27 40名超、H28 100名超/環境測定士(3級)H24 2名、H25 6名、28年12名
競争的資金の獲得	文科省、経産省、JSPS <sup>1)</sup> 、JST <sup>2)</sup> 、NEDO <sup>3)</sup> 、水産庁など	学生も研究員登録(H28実績4名)、CITI履修(研究者倫理教育)、1000万円~1億円近く/課題
学会参加	研究発表会(ポスター、口頭発表)	平成26年度15件(地区大会奨励賞1件)、平成27年度28件(地区大会奨励賞1件、国際大会4件)、平成28年度42件(うち、全国大会最優秀賞1件、全国大会優秀賞ポスター賞1件、国際大会4件)

<sup>1)</sup>独立行政法人 日本学術振興会、<sup>2)</sup>国立研究開発法人 科学技術振興機構、<sup>3)</sup>国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構

## 学生へのフィードバック②

項目	内容	実績
就職支援	講義・キャリアセンターとの連携の強化等	要約は下図参照



## 学科の課題と取り組み

- 学科FD会で取り組んだ課題とその後の対策
  - ポリシーの再整理 (アドミッション/カリキュラムを先行整理→ディプロマも完了)
  - ルーブリックの作成 (一部未完→100%へ向けての取り組み継続・規格化)
  - 学科の教育レベルに応じた英語教育とは (一般教養部門との連携強化:L字型≠L型大学)
  - 就職先の開拓について (キャリア分析・研究活動とのリンク・教員間情報共有)
  - 広報活動について (HP情報更新・情報の整理と発信方法に工夫)
- 単位取得不良者へのインタビューと課題整理
  - 2年生前期のフォロー
  - (1年生:寮生活多い⇔3年生:ゼミ生活の始まり)
  - 学修支援をどう取り組むか(補講方法の改善、TAや学修支援アドバイザーなどの一層の充実を今後検討したい)

## 信頼関係の構築

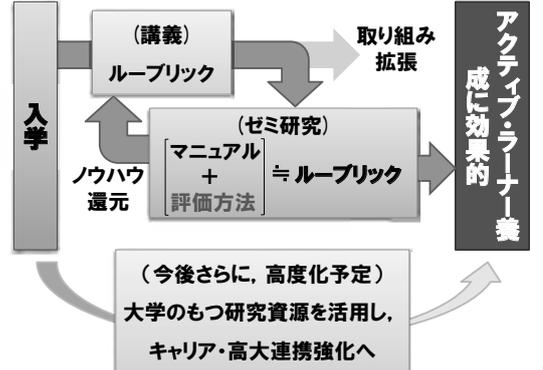
大学教員≒ある研究領域の専門家 ⇐ 学生の信頼  
Research map (J-Global)  
教員の専門性やアクティビティを検索可!!

先ず教員から変えていくこと ←重要!

- 査読付論文(国際的)
- 招待講演(国内・国外)
- レビュー付補助金(国内・国際)
- 国レベルの学術的な活動(学会・評議員など)

↑  
学生は見ている。実は教育の質向上にも通じる!

## まとめ



**ご清聴ありがとうございました。**



25

## (7) AP評価委員会の開催

平成28年度は前年度と同様に、教育改革フォーラム開催の同日に外部評価委員によるAP評価委員会を開催した。事業の進捗状況や、前年度の指摘事項を踏まえた改善について報告し、意見交換を行った。

外部委員によるコメントは、次年度の活動を支える道標であるとともに、推進のモチベーションを与えてくれる。熱意溢れるコメントを寄せていただいた評価委員の皆様には感謝しつつ、さらに加速した事業推進に努めたい。

### 資料

(7)－1 平成28年度AP評価委員会 委員からの評価・コメント一覧

## A P 評価委員会の開催について

本学の28年度AP事業の進捗状況を点検・評価し、次年度に向けて取組の改善を図るため、外部有識者委員会である「平成28年度県立広島大学AP評価委員会」を開催した。

### (1) 開催概要

- 日 時 平成29年3月3日（金）12:00～13:30
- 場 所 広島キャンパス役員会議室
- 出席者 委員 3名（※欠席した3名の委員からは、別途評価を頂戴した。）  
本学 7名

#### 【評価委員名簿】

区分	所属・役職	氏名	備考
高等教育関係	広島大学高等教育研究開発センター 准教授	佐藤 万知	
高等教育関係	東北大学大学院教育学研究科 准教授	島 一則	
高等教育関係	島根大学大学院教育学研究科 教授	肥後 功一	委員長
高等教育関係	北九州市立大学 准教授	見舘 好隆	
中等教育関係	広島県教育委員会 教育部 高校教育指導課 課長	吉村 薫	
産業界	マツダ株式会社 常勤監査役	河村 裕章	

### (2) 評価項目

下記の5項目について、それぞれ5点満点で評価及びコメントをいただいた。

(1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進について
(2) ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の養成について
(3) 学修支援アドバイザー養成について
(4) 情報発信による事業の波及効果について（教育改革フォーラム、広報活動等）
(5) 本事業の取組全体について
評価段階【5 非常に優れている・4 優れている・3 普通・2 やや課題あり・1 多くの課題あり】

### (3) 評価結果

	A 委員	B 委員	C 委員	D 委員	E 委員	F 委員	平均	H26・27 平均
(1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進について	4	4	4	4	4	4	4	3.5
(2) ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の養成について	4	4	3	4	4	4	3.8	3.5
(3) 学修支援アドバイザー養成について	2	3	3	3	3	4	3	2.8
(4) 情報発信による事業の波及効果について（教育改革フォーラム、広報活動等）	3	4	3	4	3	4	3.5	3.2
(5) 本事業の取組全体について	4	4	4	4	4	4	4	3.7

平成28年度AP評価委員会 委員からの評価・コメント一覧

(1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) の推進について

	評価	優れている点	改善すべき点
A委員	4	行動型学修・参加型学修は着実に実施されており、この点は評価できる。また、教職員の先進事例の調査や参加者による事例紹介なども着実に実施されている点も同じく評価できる。	CLALの導入率が微増にとどまっている点については、改善を要する。ただし、アクティブラーニングが必ずしも効果的とは考えられていない授業についてはその同定を行い、①実際に導入には問題があると考えられるケースと②アクティブラーニングの効果が期待できるにもかかわらず、実施されていないケースを切り分けていくことなどが必要であろう。そのうえで、後者については、FDerによる積極的な情報照会を行うなど、「調査」→「実態把握」→「働きかけ」を強化していくことなどが考えられる。仮に①のケースと判断される場合は、導入率の分母から積極的に外すこともアクティブラーニングを進めていくうえでの一つの見識でありうると考える。
B委員	4	取組み3年目でかなり本格的な導入が進んできた様子が伺えました。アンケート調査の数値として、たとえばA1の導入率や全般的な効果の実感といったところで、改善が見られている点が評価できるところだと思います。	3点申し上げます。 ①行動型と参加型とでは、主体的学修を促すという点では共通していても、ねらいとする能力(到達目標)が異なる部分があると思います。単に数値の伸びだけではなく、学生の「どのような能力」をターゲットとしており、それを伸ばすために「どのような授業方法」が適切なのか、ということを大切に、少し緻密な設計に入られる段階かなと思いました。 ②CLALの頭についている「キャンパス・リンケージ」というところが、いまひとつ取組み全体の中でどう位置づけられているのかよくわかりません。 ③上述②とも関係すると思いますが、今後、とりわけ高大接続の観点から大学に求められているのが、いわゆる3ポリシーの「関連性」です。貴学のHPを拝見すると、この3つのポリシー(特にCP)が、本AP事業による授業改善の試みとどう結びき、全学的に(キャンパスを通じて)統一的にカリキュラム・マネジメントされているか、ということがまだ見えにくいところがあります。どの大学にとってもむずかしい課題ですが、CLALの名称に相応しい展開になりますよう期待しております。
C委員	4	・グループワーク/ディスカッション/プレゼンテーション等のアクティブ・ラーニング手法を取り入れ、導入率が74.8%であり、部分的導入を含むと80%を超えている。 ・また、授業への参加が積極的になったと答えた方が70.8%もあり、全ての期待項目で改善効果が出ており、取組の妥当性が得られている。	・一方で、講義に充てる時間が減ると言う悩みも多いようだが、ALを講義の一環/ツールとして捉えた仕掛け/仕組み作りをしていく工夫が必要と思われる。 ・その為にも、教える側が個々に第一人称で考えられるように、FDerの養成カリキュラムへの積極的参加を検討される必要があると思われる。 ・また、現時点ではALの導入に関する判断基準を一律定量化されているが、次STEPでは単純導入率ではなく、個々の講義科目の特性等を考慮した判断基準で、取り組むなどの工夫も必要と思われる。
D委員	4	CLALに関する調査に基づいて検討をする、あるいは、構成員に説明をする、というやり方はいわゆるIRに基づく大学改革のPDCAサイクルをまわしていることと同義で、評価のための調査ではなく、改革を進めるための調査として位置づけられている点を評価する。	行動型学修については、学修成果として、教養教育あるいは専門教育の掲げる学修目標とのつながりがどのように形成されたのか、という点についても考察する必要があると考える(例えば、食品衛生学実験のように)。学外実習を通じて学んだことが、講義や他の授業の内容とどうつながって行くのか、というところが、重要だと考える。
E委員	4	CLAL導入率74.8%(回答があった科目)だが、全対象科目では53.5%あった。H29目標が60%であり、達成の可能性が見込まれる。回収率も約7割(69.2%)で、CLAL	保健福祉学部や生命環境学部においては、他学部に比べ実習・演習がすでに行われている可能性が高いので、アンケート回収率を100%にすればCLAL導入率は上がると考える。各学部長の協力をもっと得てほしい。また、アンケート「学修内容の理解度が上がった(65.9%)」「授業への参加が積極的

		導入への意識も7割5分で、コメントも合わせて意識向上の手ごたえを感じることができる。	になった(70.8%)」が高い数値にもかかわらず、「質問が増えた」「レポートなどの質が向上した」「遅刻・早退・欠席が減った」「私語が減った」がそれにリンクしておらず、各教員のALに対する理解や実施の質にバラつきがあることが懸念される。例えば、ただグループワークをただけでは、学生の意欲や理解度が向上しない。CLAL導入の的確な支援がなされているか、少し疑問が残る。
F委員	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3つのキャンパスをもつ本校の特徴及び各学科の特色が反映されたCLALの体制が確立され実動している。</li> <li>・CLALの定義についてより幅を持たせて定めたことで、各学科・科目のねらいや内容を踏まえた授業スタイルが期待できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・CLALの実践を通して、実際に学生がどのように成長しているのか教育効果の測定方法について研究する必要がある。</li> <li>・教員へのCLAL導入状況調査において学科によって回答率が低いもの(保健福祉学部・人間福祉学科等)がある。実際の取組として遅れているのか懸念する。</li> <li>・「他学部他学科科目履修登録者数」を指標として掲げられながら成果の伸び悩みが見られるが、この趣旨を周知する場面はどのように作られ学生に伝わっているのか、また体制は整備されているのか確認する必要がある。</li> </ul>

(2) ファカルティ・ディベロッパーの養成について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	全教員の1割程度がFDerとして教育改革に積極的に関わっている点は高く評価してよいと考える。特に個別の授業改善を超えた組織的な観点からの改革へつながりつつある点は重要である。	こうした教育改革のコアとなる教員が1割も存在し、FDerの意識が高まっていることは改革を進めていくうえで、非常に重要である。ただし、これらが残りの教員へどの程度の影響力を与えられているのかといった点をアンケート調査等で補足し、波及手段・改善手段を検討する必要がある。
B 委員	4	各キャンパスにおける代表FDerの指名、5回にわたる養成講座の開催など、着実な進展が見られます。またそのうちの1人の先生による発表をフォーラムで伺いましたが、FDに対する理解度や授業改善を超えてカリキュラム構造の検討を意識しておられる点など、まさしくFDerの名に相応しい内容であり、こういう見識を持ったカリキュラム改革志向が全学に及ぶようになれば、本AP事業の本旨が全うされることと思います。	FDerの方々にもいろいろなレベルがあるのではないかと思います。FDerとしての成長目標や段階を明らかにしながら取り組む方がよいと思いますが、むずかしい点もありますので、たとえば各学科ごとに、授業改革推進者(FDer)としてのルーブリックを作らせるという方法もあるかと思えます(人からの評価ではなく、各自がどの段階にあるのかは、それを見て各自が判断できるように)。これもまた、どの大学でもむずかしい問題ですね。
C 委員	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>第4回の養成講座を除き、「大変参考になった/参考になった」との回答が85%を超えており、有効な養成プログラムが実施されていると思われる。ここで得られた知識を、CLALに十分に生かしてもらいたい。</li> <li>但し、第4回の養成講座は、現在正にFDerを育成中の県立大学の講師によるものであったことを考えれば、「大変参考になった/参考になった」が62%以上もあり、今後に期待が持てる。</li> </ul>	ALの価値・重要性は十分に理解されているようなのだが、参加者が少ないように見受けられ、特に庄原地区においては、諸般の理由があったか参加者が少なく、参加しやすいハード面での工夫も必要なのかも知れない。
D 委員	4	各キャンパスのFDer代表者が企画・運営に責任を持つ体制となっている点。 また、個々の教員の教育改善だけでなく、組織としての教育力(すなわちカリキュラムと教員配置)にまでFDerの視点が及んでいるという点。	改善すべき点というよりも、不明な点だが、FDerとしての活動が、教員評価において、どのように評価されているのか。FDerの仕事を引き受けることは仕事量が増えることでもあるが、他の業務(ティーチング等も含む)へのエフォート率を減らすといった調整は、各キャンパスで行われているのか。
E 委員	4	FDerの養成講座を実施し、その目標人数を達成している(31名)。また、カリキュラム改善へ向けた議論も生まれている。	養成講座のアンケートの中で、参考にならなかった教員が1~2名おり、本当の意味でのFDerが養成できたかどうかは懸念が残る。また、養成講座だけでALを正しく理解し、他の教員へALを普及するディストリビューターとして持続時に機能しない限り、FDerの目的を果たすとは考えにくい。全学を上げてFDerを讃える学内文化の醸成や、それを持続的に維持する何らかの組織的な支援が必要なかもしれない。
F 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏に3日間実施された「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」では、教員同士がしっかり協議できる場を設けられ、当人の意識啓発に非常に効果的であった。</li> <li>定期的で開催される養成講座への肯定的評価が常にほぼ9割以上である。</li> </ul>	FDer自身のコメントにもあるように、各教員が自らの使命や教育に対する考えについて振り返り整理できる機会を持てるような研修の工夫を検討することが大切である。

(3) 学修支援アドバイザー養成について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	2	学びの支援を通じて学びの楽しさを知り、生涯を通じたアクティブラーナーとするという理念やそのための養成講座を開き、育成を図っている点は評価できる。	各年度の募集・研修実施期間（交付決定時期の問題はあるとしても）が遅く、28年度においては前年度の半数未満の養成人数になっている。こうした点について量的拡大や募集・研修実施時期の早期化などにおいて改善すべき点があると考ええる。
B 委員	3		養成講座の中身はデータとして示されましたが、その成果（特にこれを学んだ学生側からの学修者としての成長など）についてはよくわかりませんでした。 「学修支援」には、学内インターンシップ（学内業務補助）やTA（教務補助）とは異なる目標や内容があると思いますので、そのあたり（養成目標）をもう少し明確にしながら取組み、学生自身にとってどのような意味のある資格なのかがわかるように伝え、学生の主体的な取組みを広げていく必要があるかと思えます。
C 委員	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生が学生に支援するという主体的行動により、自ら成長させていくという取組みであり、一定の評価は出来る。</li> <li>特にラーニングコモンズの領域では、地域に片寄りはあるものの成果は現れている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アドバイザーの活動範囲を広げているとのことだが、達成感やモチベーションUPさせる為にも、ヒアリングによる現状分析を充実し、更なる高みに持ち上げられれば良いと思う。</li> <li>また、支援を受ける側が地域によって片寄っており、支援して欲しい内容に学部差や地域差があったり、支援の仕方に有効性が薄いのかも知れないので、現状を分析して、より活動を活性化させても良いのではと思う。</li> </ul>
D 委員	3		学修支援アドバイザーとして育成する中で目標とする人材像を明らかにし（生涯学び続けるアクティブ・ラーナーという表現はありますが）、これを目指すことで、あるいは学修アドバイザーとして活動することでどんなコンピテンシーを身につけられるのか、学生側からみた時にわかるようにするといいい。 学修支援アドバイザーがどのようなトレーニングを受けているのか、アドバイザーとどんな風に協働することができるのか、といった内容の説明を教員向けにする必要があるのではないか。
E 委員	3	学修支援アドバイザーの養成を実施している。	H29年度の目標が55人となっているが、養成人数が29名（H27）、13名（H28）となっている。おそらく目標数値は累積ではないはずなので、このままでは目標達成は難しい。立教大学経営学部のBLPなどのように、それぞれの学部において、上級生が新入生に向けて、組織的に学修を支援する仕組みを模索するべきではないか。学修意欲の向上は教員のALだけではなく、ロールモデルの影響を受けることが先行研究でも明らかになっている。貴学のCIAL導入の取組の中に、学生を主体とした自律的な活動を構築しない限り、本取組の持続的な発展は難しいと考える。
F 委員	4	AP事業の充実を図るために、学生自身がアクティブラーナーとしての意識を持つ上での効果的なプログラムである。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学修支援アドバイザーとしての自己研鑽の場を充実させる必要がある。</li> <li>学修支援アドバイザー候補者の募集については、学生の主体性に委ねることは当然であるが、教職員が適当だと思える人物へ個別に呼びかけるであるとか、現アドバイザーによる意義ややりがいなどについての説明の場を設けるなど、具体のねらいを示しながら啓発に係る工夫をすることが必要である。</li> </ul>

(4) 情報発信による事業の波及効果について（教育改革フォーラム、広報活動等）

	評価	優れている点	改善すべき点
A委員	3	AP活動についての取り組みや成果の広報は進んでいる点は評価したい。しかし、その在り方について県立広島大学としての特段の特徴といったものは見受けられないように思う。	情報発信の結果について情報を得ることが望ましい。例えば、CLAL意識調査などにおいて、教員自身がどの程度これらの情報発信を受信できているかなどを確認してもよいし、ステークホルダーに対してCLALなどの認知状況を確認することも考えられる（以上はあくまで例示であって、このことをそのまま実施すること望むものではない）。
B委員	4	毎年、本AP事業の取組みを、着実に、またわかりやすく、各方面に発信しておられると思います。特に広島を中心とした大学間ネットワークに呼びかけて開催したことで、フォーラムへの外部からの参加者が増えたことは、本事業の波及効果という点から高く評価できます。	今回のフォーラムでは「高大接続」がテーマに含まれていましたが、内容的には（基調講演者が高大接続について高い実績の持ち主であったという点以外は）大学内の授業改善の話題が中心であり、本AP事業と「高大接続」がどのように結びついていくのかの構想を明確にすることや、その具体的な展開に、今後を期待したいと思います。
C委員	3	・高大接続活動においては、大学側が何をすべきかを確認するのみに留まらず、大学側が何を求めていくのかという課題発見にも繋がっており、双方向の情報伝達が出来、今後の活動に期待が持てる。	・高大接続活動も重要であるが、大学と社会との接続として、広島や中国・四国地区と言う地域企業/社会との接続活動にも取り組まれることも肝要と思う。 ・高大接続活動に於いては、県立大学としてどのような学生に入学して頂き、地域社会にどのように貢献してもらえ人材に育成するのかビジョンも必要。
D委員	4	高大接続改革との連携ができたことから、情報発信の場も増え、また、高校の視点で取組を振り返るきっかけともなっている点を評価する。	本取組について、アクション・リサーチなども手法を用いて、機関研究をし、発表することは、他の大学や高等教育研究にとっても大きな貢献となるので、検討の余地はあるだろう。
E委員	3	刊行物の発行、学外での報告、webサイトでの情報発信、ステークホルダーへの情報提供をおこなっている。	単なる情報発信に留まっており、本取組の価値を最大限引き出せていない。ALの発展系として、もっと産学連携および高大連携を進めることを提案する。 産学連携においては、教員のみならず、企業団体の社会人と連携して授業を設計することで、学修意欲を高めることができる。具体的には「なぜ能動的に学ぶ必要があるのか？」の論拠として、学外の社会人と交流することでその必要性を理解させることが効果的だろう。同時に企業団体理解が進み、就職率のさらなる向上にも繋がるだろう。 また、高大連携においては、意欲的に学ぶ貴学の学生と一緒に、模擬授業やフィールドワークなどを高校生と一緒にを行うことで、貴学を志望する学生を増やし、もともと学修意欲の高い学生を入学させることに繋がるだろう。 もっと本取組の価値を発展させ、全学の持続的な活動へと、深化・進化させる必要があると考える。
F委員	4	・様々な機会を捉え、取組の振り返り及び発信の場を設定している。	・大学関係者等への発信も重要であるが、高大接続改革をさらに加速させるためにも、本校が推進している取組について高校現場の教員をはじめ、生徒や保護者にも周知されるよう工夫することが必要である。 ・HPの最初のバナーに本取組を掲載するなど一目でメッセージが伝わる工夫も必要である。

(5) 本事業の取組全体について

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	AL を基盤として生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを育てるといふ理念のもと、CLAL, FDer や学修支援アドバイザーの養成、それらの取り組み・成果の広報など、進捗に多少のばらつきはあるが、着実な成果、もしくは成果の基盤は出来つつあり、この点は評価できる。特に FDer の養成は当該事業の胆となると考えるが、この点に全教員の 1 割が「コア」として関わり、そこに自発的な教育改善、さらには組織的観点からの改革の必要性について認識やニーズが高まり、変化が生じている点は、単なる事業の実施ではない「真の」教育改革を成し遂げるうえで、とても重要な「途中」成果であると考えられる。大学としてこうした FDer を支援し、育てることを是非継続していただきたいと思う。	<p>一方で、上述した理念に向けて、CLAL, FDer・学修支援アドバイザーの養成、広報活動がどのように有機的に接続されているのか、具体的な活動レベルに落とし込んだ時、この点が十分見えてこない。この点が事業概要にある「体系的に組み立てられた教育プログラム」によって成り立つのか、例えば「ルーブリック」の導入によってなされるのか、これは県立大学の判断によるが、いずれにせよ、適切な取り組みがなされなければならない。ただ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを育てるためには、カリキュラム・教育方法を問わず、「学びは楽しい」と理解し、「学びを身体化」させる必要があるであろう。こうした観点からは、教員が引き続き、学び・研究を楽しみ、その姿が学生に伝わり、身体化されていくという、極めて素朴でシンプルな営みと以上の取り組みが現在どう融合しているのか、どう融合させるのか、もしくはすでに存在しているこれらの営みをどう「見える化」するのかなどといった観点があってもよいように思う。</p> <p>以上のほかに、気づいた点を挙げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・CLAL の行動型学修は AP 事業の経費に依存する部分が多いが、これらを事業終了後にどのような形で継続しようのか、出口戦略も必要な時期と考える。</li> <li>・学修支援アドバイザーについては、TA との関係を概念整理したうえで、現 TA への働き掛けを強化する形で（例えば、学修支援アドバイザー養成の資料を配布するだけでも違いは生まれまいだろうか?）、TA の質向上も含めた学生による学修支援の質の向上を進めうる可能性はあるように思う。より広義の「学修支援アドバイザー」制度という発想もあり得ると考える。</li> <li>・各種の取り組みについて多様な調査がなされており、丁寧に調査結果がまとめられている点は、評価できる。そこで、さらにこうした各種の調査において横断的に本事業の成果を測定することなどが考えられうるのではないだろうか（例えば、CLAL 調査において、「FDer からの AL 実施に関わる有益な情報提供を受けたことがあるか」など）。また、調査そのものを「情報提供・共有のツール」として利用することも可能である（例えば、「講義型の授業において、〇〇といった形での AL が実施可能であることをご存知ですか?」など）。</li> <li>・以上の改善提案は、あくまで事業説明資料に基づく、評価者によるありうる誤解を含めたものであり、すべての改善提案に取り組んでいただくことを期待しているものではない。人的、時間的制約の中で県立広島大学にとって意義ある、プライオリティーの高いものに取り組んでいただきたいと思います。</li> </ul>
B 委員	4	着実に事業が進展していることがわかります。取組み初年度に比べると、フォーラムに参加している教職員の発言や、学内アンケートの結果などから、本取組みが全学的な教育改善の意欲につながり、また取組み成果が次第に実質化しつつあることもうかがえます。	<p>フォーラムの最後でも述べましたが、次の 2 点を申し上げます。</p> <p>①授業（内容及び方法の）改善がカリキュラム改善に、カリキュラム改善が教育改革に、そして教育改革を通じて「何がよい大学教育なのか? 県立広島大学の地域に対する使命とは?」という方向に大学の教職員の意識が向かうことで、大学改革が進んでいくことを期待します。</p> <p>②またそのような取組みの方向性が、地域の高校教育現場に伝わることによって、地域の「地元貢献志向の高い生徒」が熱いまなざしを送ってくれる大学（地元で行きたい大学 NO.1）になっていくのではないかと期待しております。高大接続がそのような方向で進んでいくためにも、この AP 事業の展開が重要だと思います。</p>
C 委員	4	・CL という概念をもって、3 拠点での人材育成を、AL というツ	・CL の観点では、参加率等で 3 拠点に取組意識や姿勢に差異があるように思われる為、今後はハードの面での工夫も必

		<p>ルの導入で、果敢にチャレンジされており、その効果も現れている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高大接続活動も開始され、高校からの大学に対する期待や使命を、見える化されつつある。</li> </ul>	<p>要ではないかと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・県立大学として、どのような学生に入学して頂き、地域社会にどのように貢献してもらえる人材に育成するのか、県立大学としての「ビジョンとミッション」を共有化しておくことも必要があると思う。</li> </ul>
D 委員	4	<p>取組を通じて様々な種がまかれ、徐々に芽吹き始めていると評価する。昨年度の評価委員会でのコメントおよび評価シートの内容を熟考し、取り入れられるところから導入している点についても評価する。</p>	<p>個々の教員の教育改善という段階から、組織的な教育力の向上、という段階に関心がうつつているように思われるが、組織的な教育力ということを考えていくためには、教員だけではなく、職員組織がどう教育力向上を自らの職務として考え、関与するかも重要なポイントとなってくる。ぜひ、FDer 養成に併せて、教育機関の職員として教育活動を考えるような内容の SD を実施していただきたい。また、学生についても、サービスの受けてとして教えられることを待つのではなく、自分の学びに責任を持つ、あるいは自分の学びをデザインする、という思考性を身につけるよう、継続的に働きかけていくことが重要だと考える。</p>
E 委員	4	<p>全国の大学における AL の実施率と比べてみないと断言できないが、少なくとも私が所属する大学に比べて、教員の AL への意識が高く、取り組みの成果が出ていると考える。</p>	<p>AP「高大接続改革推進事業」計画調書に書かれた、テーマ 1「AL のさらなる充実」、テーマ 2「学修成果の可視化への展開」、テーマ 3「高大接続への展開」に、産学連携も加えて、是非今後とも本取組を持続して頂きたいと切に願います。</p>
F 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取組の柱 3 事業において (CLAL の推進, FDer の養成, 学修支援アドバイザーの養成) において教職員の意識の向上と具体的な行動が着実に見られる。</li> <li>・平成 28 年度から、「広島版『まなびの変革』アクションプラン」に基づき取組を進めている県立高校等と連携し、双方が目指す育成すべき人材像の共有し、それぞれの具体的な取組について周知及び議論する場を設けている。</li> <li>・平成 29 年度に向けて、新たに学修成果の可視化と高大接続の在り方についての研究を加えるなど事業内容を深化させている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員のみならず学生自身もこの事業の趣旨をしっかりと理解させ、大学全体でアクティブラーナーとして関わるができるような内容の工夫・充実を図ることが大切である。</li> <li>・学びの自己評価システムについて具体的な方向性が見えないことから次年度に期待している。</li> </ul>



## (8) 広報活動

本事業の使命の一つに、本学の取組成果を広く伝えていくことがある。本学では選定年度より「AP 事業推進部会ニュース」を発行し、各方面に配布してきた。それとともに、教育関連のセミナーや研修会等、取組発表の機会を積極的に活用している。

平成 28 年度は、徳島大学を幹事校とするテーマ I の協議会がスタートした。他の 8 大学・高専との連携のもと、ウェブサイトやイベントを通じた広報活動に拍車がかかるだろう。ここでは平成 28 年度に発行したニュースと学外で発表したポスターを掲載している。今後はより積極的な情報提供に努めるとともに、そこからどのようなフィードバックを得て事業の改善を図るかという点にも注力していきたい。

### 資料

(8)－1 AP 事業推進部会ニュース Vol.3

(8)－2 SPOD フォーラム 2016 ポスターセッション 発表ポスター

## 広報活動について

本学のAP事業の取組や成果を、広く学内外に周知するため、次のとおり広報活動を行った。

### (1) 刊行物の作成

- 「県立広島大学AP事業推進部会ニュース」VOL. 3

**配付** 学内教職員，同窓会，後援会，学内研修会講師，オープンキャンパス／大学説明会参加者，サテライトキャンパスへの設置，他大学への送付 など

### (2) 学外での報告等

	イベント名	日時	場所	内容
1	新見公立大学FD集会	H28. 5. 18	新見公立大学（岡山県）	講演
2	SPODフォーラム2016	H27. 8. 24	愛媛大学（愛媛県）	ポスター発表
3	平成28年度公立大学 創生フォーラム	H28. 11. 10	国立オリンピック記念 青少年総合センター （東京都）	パネルディスカッション
4	第23回大学教育研究 フォーラム	H29. 3. 19 ～3. 20	京都大学（京都府）	ポスター発表等

### (3) ホームページでの情報発信

- 大学教育再生加速プログラムホームページ
- アクティブ・ラーニングの取組紹介ページ（リンク集）

### (4) ステークホルダーへの情報提供

- 平成28年5月 後援会総会にて事業リーフレットを配布し，意見聴取
- 平成28年6月 同窓会総会にて事業リーフレットを配布し，意見聴取

# 生涯学び続ける自律的な アクティブ・ラーナーの育成をめざして

## 主体的な学びを促す 教育改善に向けて

学生の主体的な学びを促す教育改善に向けて、様々なプロジェクトが進行しています。  
県大型アクティブ・ラーニングの推進により、既に多くの学生が能動的な学修を経験していますが、更なる学びの質向上を図るため、「ファカルティ・ディベロッパー (FDer)」「学修支援アドバイザー (SA)」養成の取組を開始しました。  
今号では、昨年度に実施した各種取組をご紹介します。



アクティブ・ラーニング実践科目「地域情報発信論」授業風景

**ファカルティ・ディベロッパー養成プログラム（入門編）を開講しました。**

本事業では、学生の主体的な学びを促すアクティブ・ラーニングの導入を牽引する「ファカルティ・ディベロッパー（FDer）」を、各学科及び総合教育センターの中に2名以上、事業終了時まで全学で30人以上養成することとしています。平成27年度は、FDerを養成するための「FDer養成プログラム（入門編）」を開講し、年4回の養成講座を実施しました。

各回の養成講座では、学外から専門家を講師として招聘し、アクティブ・ラーニングの導入や実践、評価に関する専門的かつ実践的なお話をしていただきました。3つのキャンパスから多くの教員が参加し、FDerとして活動するための基礎的な知識や技能を修得しました。この「入門編」に引き続き、28年度は「応用編」を開講します。

**第1回 FDer 養成講座**

日時：平成27年9月14日（月）  
 場所：広島キャンパス講義室  
 講師：佐藤 万知 先生（広島大学 准教授）  
 テーマ：『FDerとしてアクティブ・ラーニングを考える』



**第2回 FDer 養成講座**

日時：平成27年12月1日（火）  
 場所：広島キャンパス2313講義室（主会場）  
 講師：吉田 香奈 先生（広島大学 准教授）  
 テーマ：『広島大学の教養ゼミにおける PBL（Problem-Based Learning）の導入について』



**第3回 FDer 養成講座**

日時：平成28年2月19日（金）  
 場所：広島キャンパス大講義室（主会場）  
 講師：佐藤 浩章 先生（大阪大学 准教授）  
 テーマ：『アクティブ・ラーニングを促す30の技法』



**第4回 FDer 養成講座**

日時：平成28年3月4日（金）  
 場所：広島キャンパス大講義室（主会場）  
 講師：安藤 徹 先生（龍谷大学 教授）  
 テーマ：『アクティブ・ラーニングの評価について：ルーブリックの現状と課題』



**平成27年度教育改革フォーラムを開催しました。**



平成28年3月4日（金）、広島キャンパス大講義室を会場として、「平成27年度県立広島大学教育改革フォーラム」（兼「第4回 FDer養成講座」）を開催しました。フォーラムの様子は、庄原・三原キャンパスにも同時配信しました。

今年度は「アクティブ・ラーニングの導入と評価」をテーマに、龍谷大学・安藤 徹 教授を迎えてルーブリックの導入事例を学ぶとともに、本学におけるアクティブ・ラーニングの実践報告を踏まえて、全体討議において本学 AP事業の今後の在り方を議論しました。

当日は FDer候補者を中心とした本学教員をはじめ、職員や学外者の参加もあり、本学の取組を学内外で共有する有意義な機会となりました。

**フォーラムテーマ「アクティブ・ラーニングの導入と評価」**

14:00～14:20	挨拶・講師紹介	16:45～17:25	全体討議
14:20～15:30	講演&ワークショップ （講師：安藤教授）	17:30	閉会
15:40～16:40	県立広島大学における事例紹介		

## 学修支援アドバイザーの養成に係る各種研修を実施しました。

学生同士が互いに支え合う仕組みの実現を目指した「学生による学生支援」を推進するため、本事業では「学修支援アドバイザー(SA)」を学生の中から募り、事業終了時までに55名以上養成することとしています。平成27年度は、学修支援アドバイザーを養成するにあたっての基礎知識を学内で共有する教職員向けの研修会、及び学生を対象とした学修支援アドバイザー養成講座を実施しました。

### 学修支援アドバイザーの養成に係る研修① (兼 教育ネットワーク中国平成 27 年度第 5 回研修会)

日 時: 平成27年12月24日(木)  
場 所: 広島キャンパス大講義室(主会場)  
講 師: ①林 透 先生(山口大学 准教授)  
テーマ『学生との協働による教育改革』  
事例紹介: ②尾野本 悟 先生(広島工業大学 特任教授)  
③木本 一成 先生(広島経済大学 准教授)



### 学修支援アドバイザーの養成に係る研修②

日 時: 平成28年2月18日(木)  
場 所: 広島キャンパス2313講義室(主会場)  
講 師: 清水 栄子 先生(愛媛大学 講師)  
テーマ: 『教職協働で育てる学修支援アドバイザー』



## 学修支援アドバイザー養成講座を開催しました。

平成28年3月24日(木)、広島キャンパス講義室を主会場に、学修支援アドバイザー候補者を対象とした研修「学修支援アドバイザー養成講座」を開催しました。研修には、3キャンパス合わせて19名が出席し、学修支援を行うに当たり必要な知識や技能を学びました。

また当日は、FDerである教員が数名参加し、グループディスカッション時のファシリテーターとして進行をリードしました。研修では終始議論が活発化し、学生からの積極的な発言も多く、充実した時間となりました。

研修を受講した学生は学修支援アドバイザーとして登録され、各キャンパスのラーニングコモンズを拠点に学修支援を行います。アドバイザーの募集と養成講座は、今年度以降も継続実施していきます。



## pickup AP事業の取組を学外で発表しました

AP事業による教育改革の成果は、他大学への波及という観点から、学外で報告することが求められています。27年度は5つの学外イベントに参加し、FDer候補者がAP事業の取組を発表しました。簡単にご紹介します。

	発表フォーラム等	発表日・会場	発表テーマ
1	SPOD フォーラム 2015 (主催: 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)	8月26日 愛媛大学(松山市)	行動型、参加型アクティブ・ラーニングとFD、SD
2	教育改革 ICT 戦略大会 (主催: 私立大学情報教育協会)	9月2日 アルカディア私学会館(東京都千代田区)	アクティブ・ラーニングを軸とした教育改革と課題
3	比治山大学 比治山大学短期大学部 平成27年度 AP 第2回セミナー (主催: 比治山大学・比治山大学短期大学部 質的転換加速化本部)	3月3日 比治山大学(広島市)	①県立広島大学における AP 事業全体のねらい・取組内容の紹介 ②「広島と世界」取組の成果と課題
4	AP 事業成果発表ジョイントフォーラム 2016 (主催: 山口大学)	3月14日 YIC Studio 2 階講堂(山口市)	県立広島大学の教育改革とアクティブ・ラーニング
5	第22回大学教育研究フォーラム 2016 (主催: 京都大学高等教育研究開発推進センター)	3月17日 京都大学(京都市)	①大学体育における総合性拡大の試み ②全学共通教育科目「地域の理解」授業改善の試み

## 行動型学修に係る経費助成事業について

本事業では、行動型学修\*の導入を促進するための経費助成を実施しています。平成27年度は計13件の申請があり、学生のキャンパス移動やフィールドワークへ赴く際の交通費を助成しました。この経費助成により多くの学生が、地域をフィールドとする実習や、他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修を経験することが出来ました。

※ 学外実習やフィールドワーク、他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修など、教室外における学修の総称

	対象科目（一部）	科目区分	実施日	内容
1	食品衛生学実験	健康科学科	7月28日	キャンパス間交流、現地体験
2	地域情報発信論	全学共通教育	8月31日～9月4日	キャンパス間交流
3	プロジェクト研究	経営学科	9月14日～9月15日	フィールドワーク
4	留学生と学ぶ広島	全学共通教育	10月3日	キャンパス間交流、現地体験
5	意思決定論 応用情報システム開発論	経営情報学科	11月11日	現地体験
6	東アジア地域史論演習	国際文化学科	12月5日	フィールドワーク
7	地域の理解	全学共通教育	2月7日	キャンパス間交流

## gallery ～アクティブ・ラーニングの様子～



地域情報発信論：グループワーク

食品衛生学実験：他キャンパスでの学修



国際文化学概説：ディスカッション

地域情報発信論：フィールドワーク

地域の理解：フィールドワーク



東アジア地域史論演習：  
ラーニングコモンズでのプレゼンテーション

意思決定論・応用情報システム開発論：  
学外実習（企業訪問）

### ■ 県立広島大学 AP 関連ホームページ

AP 事業ページ（大学 HP 内）  
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/>  
 ラーニング・コモンズ紹介ページ  
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/lcs/>

### ■ 本学 AP 事業に関するお問い合わせ先

#### 県立広島大学 AP 事業推進部会（経営企画室内）

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号  
 E-mail:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp Tel:082-251-9727（直通）、Fax:082-251-9405

### 編集後記

今号は多くの写真とともに、本事業の取組を広く紹介しました。県大の活気あふれる“アクティブ”な様子は十分に伝わりましたでしょうか。生き生きと学修に励む学生の姿には、職員として嬉しさを感じるとともに、日々沢山のエネルギーをいただいています。今年度はFDERや学修支援アドバイザーの活動が本格化します。本ニュースのほか、大学HP等を通じて、引き続き本学の様子を発信していければ幸いです。（AP事業推進部会ニュース編集担当 伊藤 俊）



# 行動型・参加型学修を基盤とするAL推進の取組

県立広島大学 総合教育センター 五條 小枝子  
本部経営企画室 川口 博之



## 1. 共通教育の改革とAL実践科目の開設

### ◆ 県立広島大学について

- 2005年に3つの県立大学が統合し開学(3キャンパス4学部11学科)
- 「地域に根ざした、県民に信頼される大学」を目指す

### ◆ 全学共通教育の改革(～H27年度)

「授業の満足度は高いが、授業外学修時間が伸びず、主体的学びが引き出せていない」

27年度から新たな全学共通教育を導入…「L字型モデル」

- 学生課程全体を「教育プログラム」と捉え、体系的なカリキュラムを構築
- 「専門教育と並び立つ教養教育」という理念

### ◆ 科目群「広島と世界」を新設

- 「地域に軸足を置き、世界を視野に活躍できる人材」の育成を目指す科目を開設(右表)
- 広島県をフィールドとするアクティブ・ラーニング実践科目を、共通教育の体系に組み込む



「広島と世界」開講科目	
県大生として学ぶ広島と世界	地域の理解
地域情報発信論	ボランティア活動
異文化としての日本	留学生と学ぶ広島
海外研修Ⅰ	海外研修Ⅱ

## 2. 行動型・参加型学修の推進

### ◆ 県立広島大学型アクティブ・ラーニング(Campus Linkage Active Learning : CLAL)

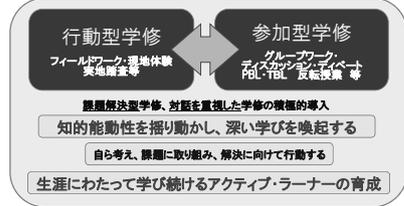
- 平成26年度「大学教育再生加速プログラム」(テーマⅠ:アクティブ・ラーニング)に採択
- 行動型学修・参加型学修を軸とする「県立広島大学型アクティブ・ラーニング」を全学推進

### ◆ 行動型ALの実践支援・・・「行動型学修に参加する学生への経費助成」事業

- キャンパス移動に係る移動補助 ⇒ キャンパスを越えた学生の交流、合同成果発表会の実施
- 学外実習へ出向く学生への移動補助 ⇒ フィールドワークや実地踏査等の体験学修を推進

学士課程教育プログラムの改革 + AP事業によるAL手法導入加速 = 主体的な学びを引き出す「広島と世界」等 「行動型・参加型学修」 能動的な授業の実践!

### 県立広島大学型アクティブ・ラーニング Campus Linkage Active Learning : CLAL



## 3. 「広島と世界」におけるCLALの展開

### ◆ 行動型学修を通じた、学外で現地体験(フィールドワーク、実地調査)

### ◆ 参加型学修を通じた、経験の共有と内省(ディスカッション、グループワーク)

### ◆ 成果発表を通じた、学修内容の整理(合同発表会、プレゼンテーション)

経験を学びに  
変える  
学修プロセス

### 『地域の理解』

- フィールドワークを核としたプログラム(フィールドワークと連動した講義内容)
- 感想カード記入時間(毎10分)の設定

配当年次:1年	授業実施内容
第1回 イントロダクション	第9回 広島県の産業の歴史
第2回 広島と世界	第10回 英字と地域の学問:住原英学校と倉田百三
第3回 中国山地の近代たたら製鉄業	第11回 ヒロシマを考える
第4回 広島県の歴史と地域	第12回 地域の暮らしを豊かにしたい! ~NPOの視点から~
第5回 広島県の歴史と地域	第13回 フィールドワーク総括
第6回 広島から世界へ ~量は通貨なり~	第14回 合同発表会に向けて
第7回 広島県の歴史と中国中部地域	第15回 合同発表会(広島キャンパスで開催)



安芸高田市へのフィールドワークにおける神楽の体験

### 『地域情報発信論』

- 中国新聞の寄附講座/単位互換科目
- 3キャンパス+他大学学生のグループ編成
- 地域の情報を集め、発信する力を修得

配当年次:2年(集中講義)	授業実施内容
第1回 記事の記述	第8回 記事編集レポート「かき船移動問題」について私はこう考える
第2回 かき船移動問題の経緯と今	第9回 グループディベート:グループの見解をまとめ、発表
第3回 かき船移動問題についてどう考えるか	第10回 平和公園の成り立ち・原爆ドーム100年
第4回 報告の整理と問題点の抽出	第11回 グループワーク:平和公園の整備イメージを見出し化
第5回 平和公園一帯の取材計画を練る	第12回 グループワーク:イメージ制作
第6回 取材実習(2)平和公園一帯の歴史と今を学ぶ	第13回 グループワーク:ポスター作り
第7回 模擬記者会見:学生の質問に記者が答える	第14回 ワーク:ポスター仕上げ
	第15回 プレゼンテーション:発表・質疑応答・合評



サテライトキャンパスひろしまにおける参加型学修

### 『留学生と学ぶ広島』

- 留学生との交流・フィールドワーク・議論
- 興味に応じたフィールドワーク先選択
- 事前・事後レポートによる知識の定着

配当年次:1・2年	授業実施内容
第1回 授業の趣旨や概要の理解	第8回 レポート発表会(グループ別フィールドワーク)
留学生との子、学生同士の意見交換	ワーク先:安芸高田市、鞆町、竹原市、庄原市、広島市
第2回 グループ活動:事前調査結果の共有	第9回 グループ活動:事前調査結果の共有
第3回 広島スタディツアー(弥生山)参加	第10回 広島スタディツアー(平和観光園、奥田元栄・小由女美術館)参加
第4回 グループ活動:ディスカッション	第11回 グループ活動:ディスカッション
第5回 レポート発表会(弥生山)	第12回 レポート発表会(平和観光園、奥田元栄・小由女)
第6回 グループ活動:フィールドワーク打ち合わせ	第13回 合同発表会
	第14回 合同発表会
	第15回 合同発表会



廿日市市・宮島でのフィールドワークの様子

## 4. 成果と課題

- 【成果】
- 全学共通教育に「広島と世界」群を配置したことで、キャンパスを越えた学修を促進
  - 実践支援制度による、体験学修や合同発表会の積極実施
  - 体験学修を通じた、新たな発見や広い視野の獲得
  - 学生が「自ら発見する喜び」を感じることに、深い学びへのいざない

- 【課題】
- 他の共通/専門科目へのALの波及 ⇒ カリキュラムへの体系的な組み込み
  - 学生への意識付け ⇒ 授業の目標や設計に対する、理解不足の解消
  - 担当教員の拡充や学修環境整備 ⇒ グループ活動時のきめ細かな支援の実現

### 『異文化としての日本』

- 留学生と対面してのディスカッション
- 非母国語でのプレゼンテーション
- 異文化に触れ、日本を捉え直す

配当年次:2年	授業実施内容
第1回 授業の趣旨と概要の理解	第9回 グループディスカッションの成果発表
第2回 留学生との意見交換	第10回 スチュワード先生の講話と質疑応答を通して、各自問いを立てる
第3回 留学生との意見交換	第11回 各自の問いに基づいて、グループディスカッション
第4回 留学生との講話と質疑応答を通して、各自問いを立てる	第12回 情報交換会(於:広島キャンパス)
第5回 各自の問いと調査結果に基づき、グループディスカッション	第13回 グループディスカッションの成果発表(留学生による発表)
第6回 グループディスカッションの成果発表	第14回 母国語以外の言語によるプレゼンテーション
第7回 留学生との講話と質疑応答を通して、各自問いを立てる	第15回 各自の問いと調査結果に基づき、グループディスカッション
第8回 各自の問いと調査結果に基づき、グループディスカッション	

おわりに

大学教育再生加速プログラム（AP）の採択を受け、アクティブ・ラーニングを中心に据えた教育改革に取り組んで三年が経ちました。ここに、二冊目の事業報告書、平成 28 年度の活動の記録をご覧いただくべく、お手元にお届けできたことに感慨を覚えています。

採択通知を手にして最初に行ったのは、キャンパスをまわり、教授会に出向いて事業概要を説明することでした。平成 25 年度に全学人材育成目標を策定した名残があったのか、組織的に教育改革に取り組むことを主軸に据え、学部ごとに目標を設定してもらっていたにも関わらず、AP と言えば「アドミッション・ポリシー」と理解する先生方が少なからずおられ、いま思えば少々滑稽なやりとりもありました。初年度は用語の定義からはじめ、事業概要を説明し、理解を求めて協力を仰ぐことを繰り返したことを思い出します。

本学の特色を全面に押し出して CLAL と銘打った事業の推進、学修支援アドバイザーの育成、FDer の養成と FDer が牽引役となって授業を変えていこうとする取り組みはもとより冒険などではありませんでした。以前から行っていた個々の授業改善の取り組みを、ゴールを決めて意識化し、名前を付けて目に見える形にし、組織的な力に変えるための仕組みづくりであり、これが採択に結びつくのだろうかという声も聞こえてきたほどの、言ってみれば地味な取り組みでした。決して背伸びをせず、三大学統合後 10 年の間に積み重ねてきた成果をさらに積み上げ、改革を着実なものにしたい。それが申請に関わった教職員の共通した思いでした。

しかしながら、待ちに待った採択通知を受け取ってからの事業推進は決して平坦なものではありませんでした。議論は堂々巡り、計画が暗礁に乗り上げたことも一度や二度ではありません。それでも前に進んでこられたのは、目の前の学生たちの変化や成長があったからです。学生を変えるためにはまず自分たちが変わらなければならない。そのような思いで改革に取り組む教職員が着実に増えています。AP 事業が折り返し地点に差しかけた今、自分たちの手で一つ一つ教育を変えていく私たちの挑戦は、まだ道半ばではありますが、着実に成果を上げていると自負しています。

事業推進部会の部会長のもと、議論を闘わせながら事業を推進している部会のメンバー、存在感を増している 50 名に迫る FDer、事業推進を支えてくれている支援スタッフの面々が一丸となって進めてきた挑戦のあゆみがこの事業報告書につまっています。

平成 28 年度、AP 事業は高大連携・高大接続を強く意識して一本化され、事業期間が延長されました。未解決の課題はまだありますが、数年後に実現する、強みを最大限に活かした私たちの大学の教育の姿をめざして、挑戦はまだまだ続きます。引き続き、ご支援と忌憚のないご意見を賜りますようお願いいたします。

教育・学生支援担当副学長  
西本寮子

---

---

平成28年度  
県立広島大学大学教育再生加速プログラム(A P)  
事業報告書

---

公立大学法人県立広島大学  
A P 事業推進部会(本部経営企画室内)

〒734-8558

広島県広島市南区宇品東一丁目1-71

TEL : 082-252-9727 (ダイヤルイン)

FAX : 082-251-9405

E-mail : [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

---

---

平成29(2017)年12月発行